

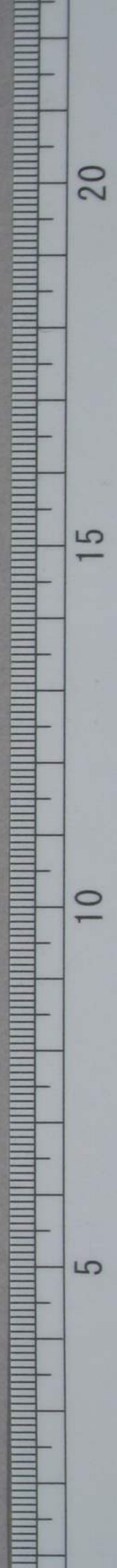
カリメアノパスイ  
名家詩集

舶來をみれ

文學博士坪内逍遙序文  
敬天牧童今村良治纂譯



美育社









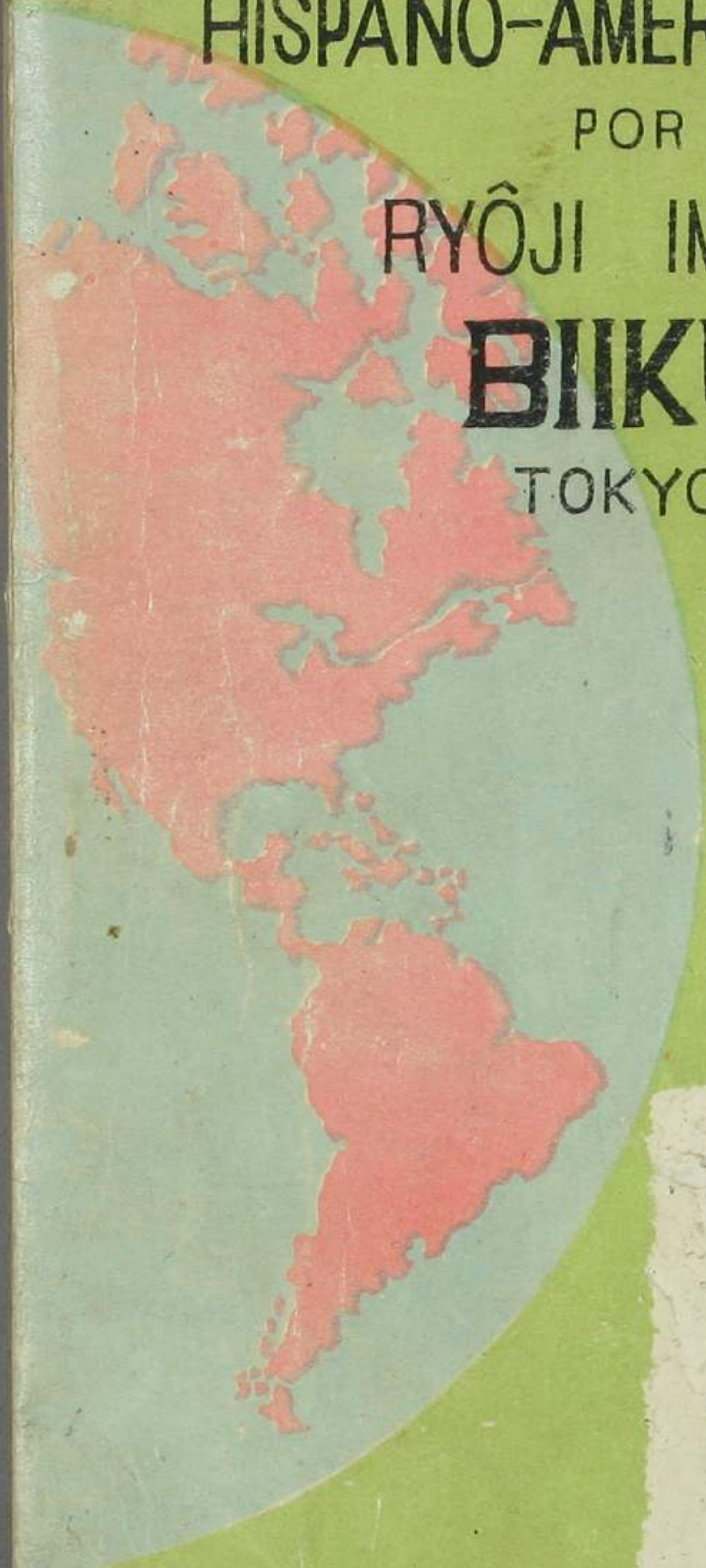
**ANTOLOGIA**  
**HISPANO-AMERICANA**

POR

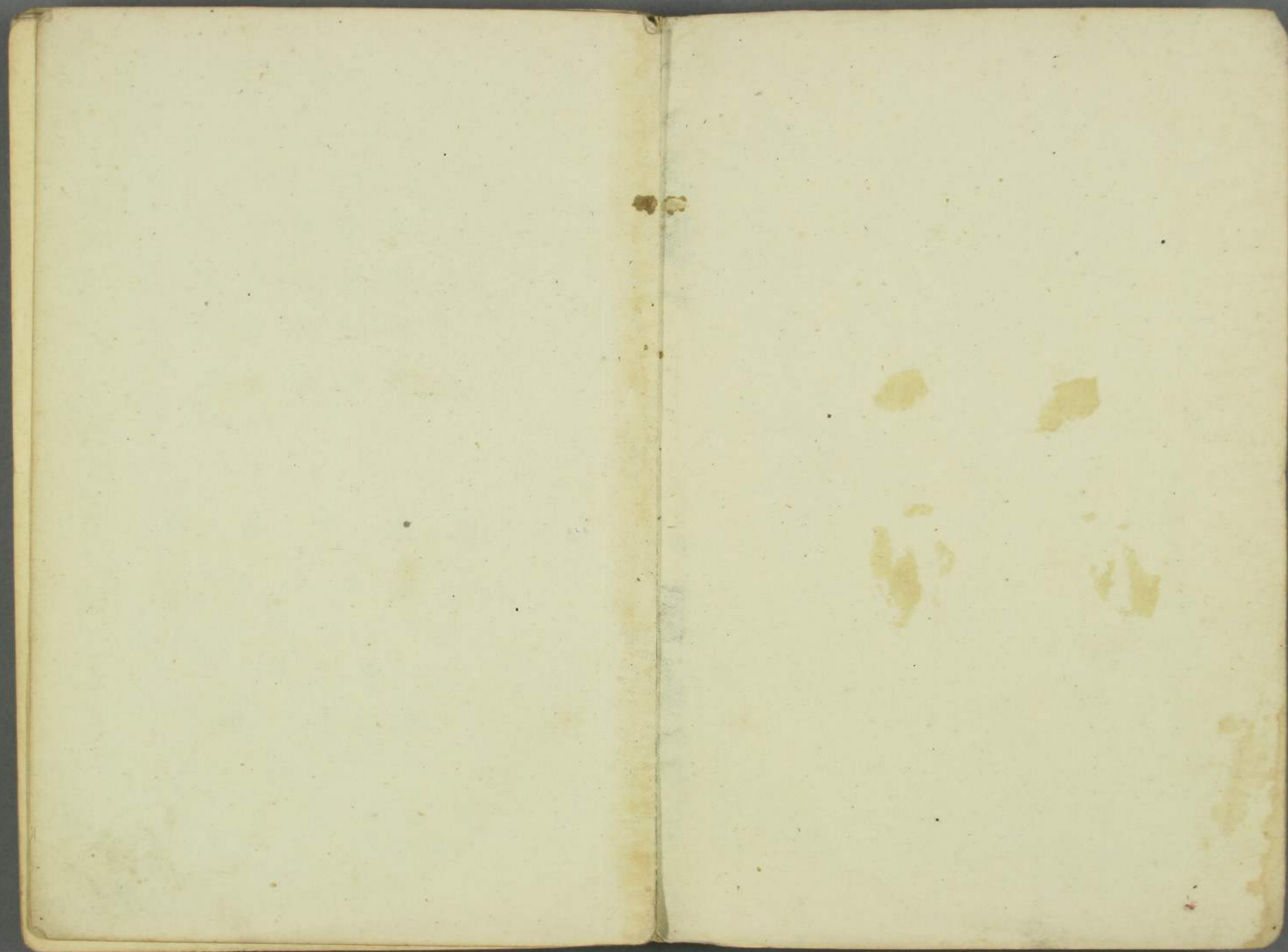
RYÔJI IMAMURA

**BIKUSHA**

TOKYO JAPON









文 學 博 士  
坪 内 雄 藏 序 文  
敬 天 牧 童  
今 村 良 治 纂 譯

い す の あ め かり

舶 來 水 鏡

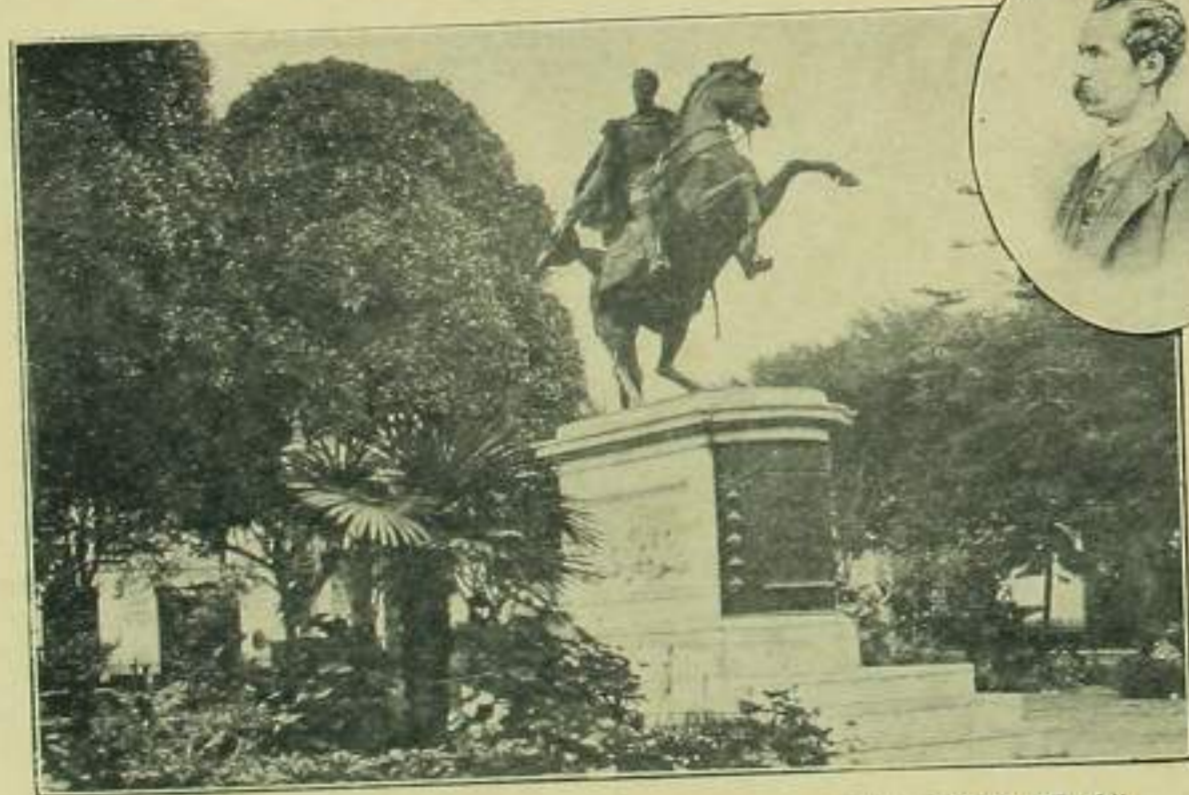
名 家 詩 集

東 京  
美 育 社  
發 行





墨國詩人サバミ墨府アラメダ公園圖



秘露國詩人バマルミマ市リゾーグ公園圖





人詩國ヤビムロコ  
ダレホルア

人詩國ヤ并リホ  
コンラブ

人詩國ラエス子エ  
ヨーベ

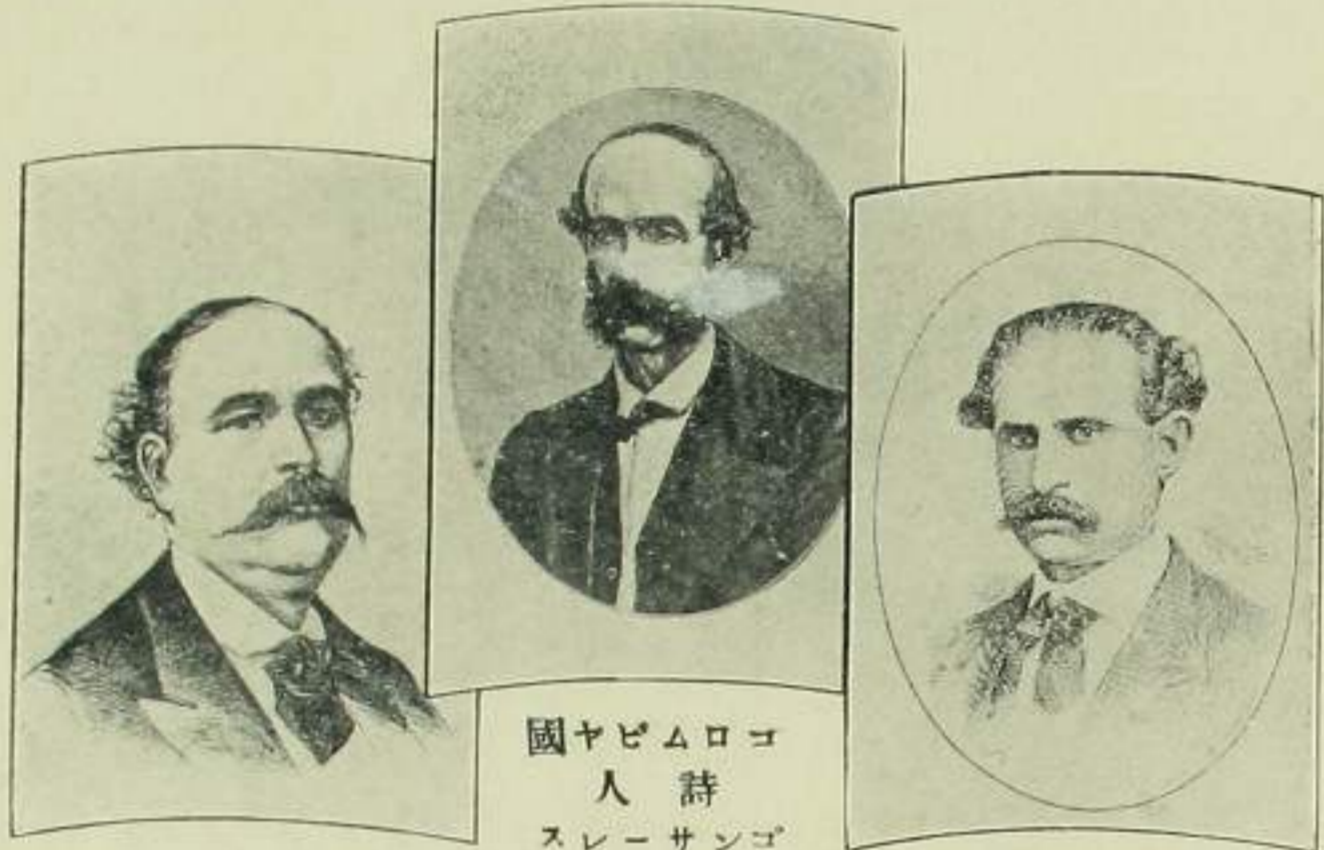


人詩の馬玖  
ヤイデレエ

人詩國丁善爾亞  
カンエク

人詩國利智  
ラルーバ

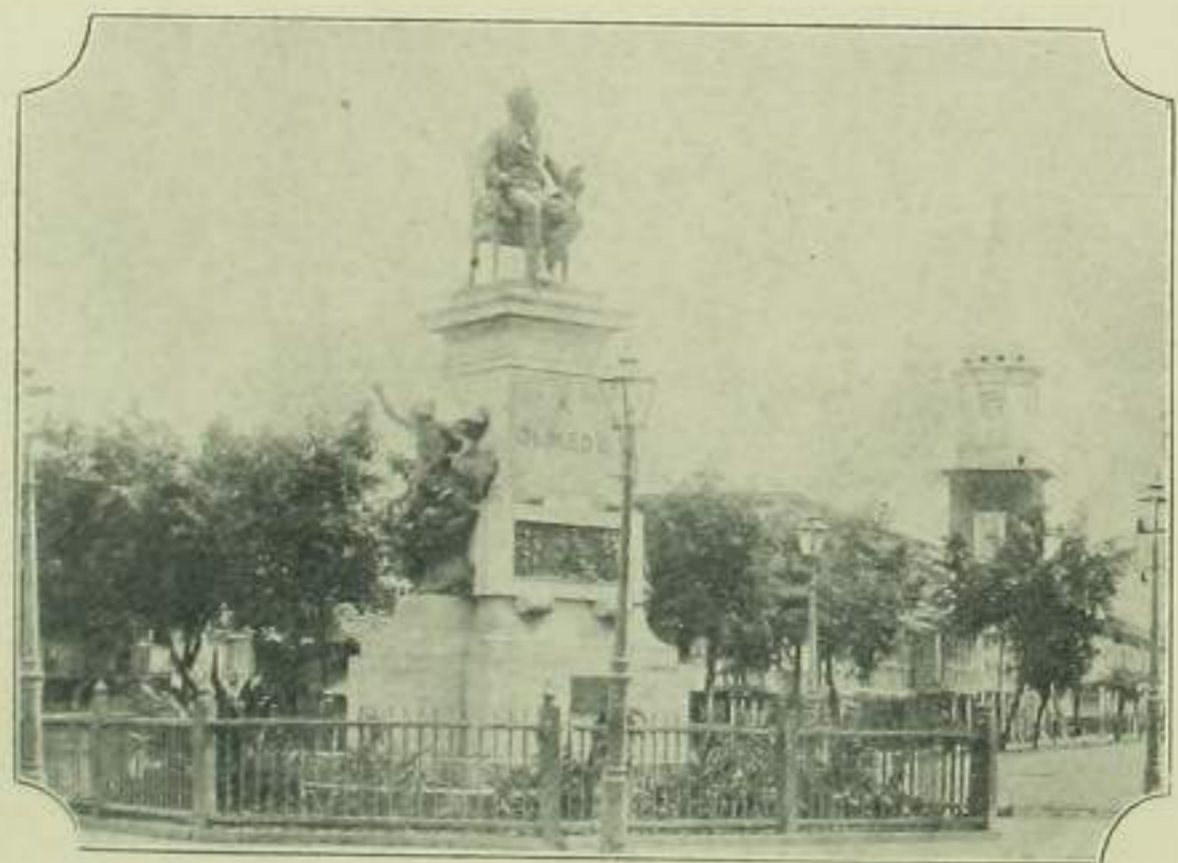




人詩國ラエス子ヱ  
スデン-ナルエ

國ヤビムロコ  
人 詩  
スレーサンゴ

人詩國ラエス子ヱ  
ロテンキ



像銅のドノルガ人詩國ル-ドワクエ



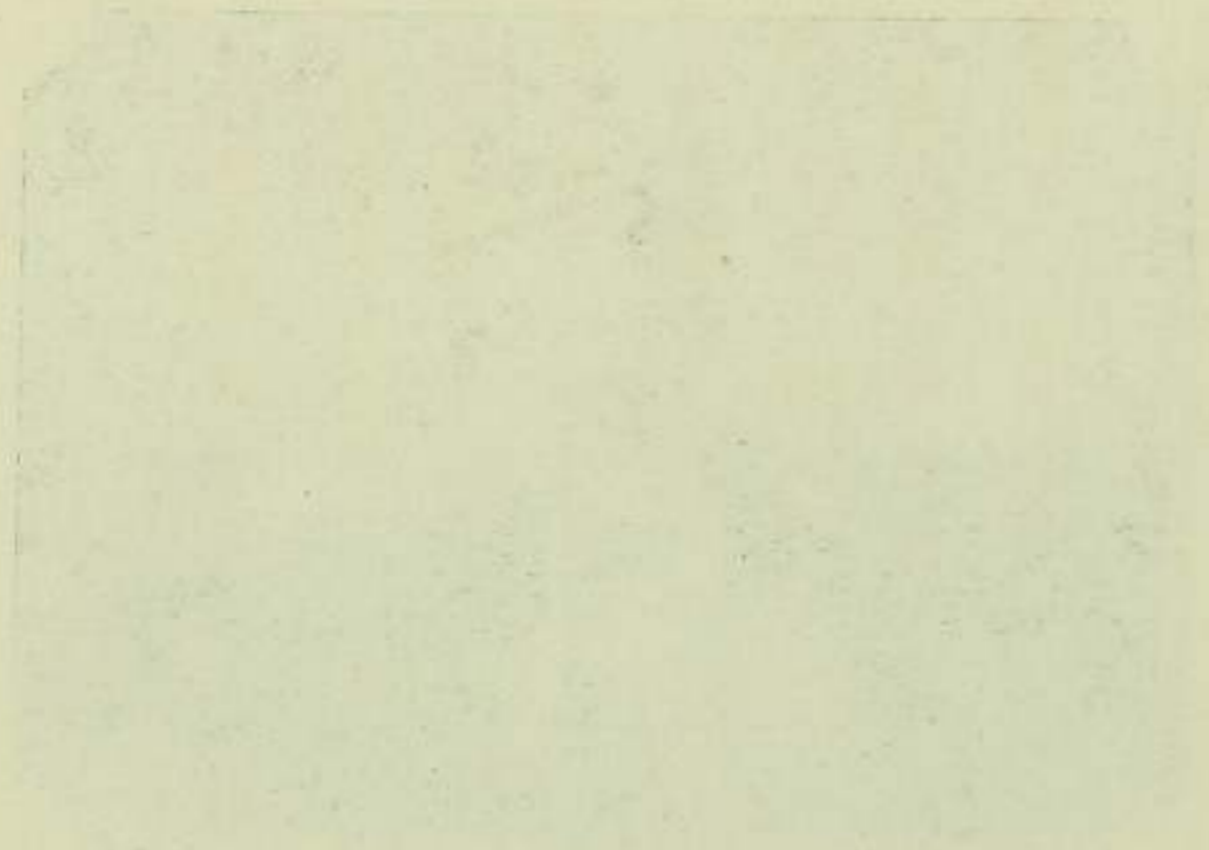
序

むかしは江戸に在りて西のかた幾十里興津鯛  
 の生なまのまゝなるを味あじふをさへ稀有なる泰平冥  
 利口の果報とこそうたひけらしを今は文明の  
 餘澤ありがたくまだ夢にだにも南アメリカあ  
 たりきの珍しき木草きくさの花はなごもの其の面影はおろ  
 か色香さへ尙ほほのくと残りたるを爰許に  
 るながらにして賞づるを得る是れ併しながら  
 著者が才筆の賜なり彼我の國語をへだつ相異



江戸の風景  
 第一巻

江戸の風景  
 第二巻



江戸の風景  
 第三巻



の海をよこぎりて地味も氣候もいたく異なれ  
 る里へ移し植ゑにし心づくしのいみじきを思  
 はんものはなごて此の上を望まんやあはれ船  
 來すみれよ色香問はで真ぶゝろを讀めと歌へ  
 る人の家土産と思へば汝美ならずともいとを  
 しかるべきを色香もほのくくと残れゝばかさ  
 ねくもいとをししくこそあれ

三十六年の春

逍遙

舶來すみれ

外國文學てふ廣やかなる  
 みどりの野に笑まふ花は  
 實に千差萬別色香高し。

われその野にうかれ出でつ  
 故國の友に贈らばやと  
 つみ集めき小きすみれ。

今村敬天

されどあはれ！色香うせき  
 彼我の國語をへだつ相異の  
 海をよぎり齎す間に。



友よ、われは常に貧し  
 價高き珠玉は買へず  
 形式ばかりのわが土産、

遠き異邦の旅の紀念  
 君に献ぐ一把のすみれ  
 色香問はで眞意をよめ。

## 目次

緒言—— 西語、西語文學の特徴、いすばのあめりか文學及詩學

フランシスコ、アクーニャ、デ、フイデロア (ウルグワイ國)

○無名の花束

マスエル、アクーニャ (墨西哥國)

○今昔

○屍骸の前にて

○悲歌

クレメンテ、アルタウス (秘露國)

○籠中の「コンドル」に

フリヨ、アルボレダ (コロンビヤ國)

○ベヤトリースに

エドワルド、デ、ラ、パールラ (智利國)

○人生はかくこそ



## ○熱情

アンドレース、ペーヨ (エネスエラ國)

## ○對話

ベンハミーン、ブランコ (ボリヰヤ國)

## ○かなりやに

マヌエル、ニコラス、コルバンチヨ (秘露國)

## ○夕の星

## ○庭の吊床

クラウデイヨ、マメルト、クエンカ (亞爾善丁共和國)

## ○亞弗利加人

イグナシヨ、ロドリゲス、カルブーン (墨西哥國)

## ○永別

グレゴリヨ、グティエルレス、ゴンサーレス (コロムビヤ國)

## ○ソントーンの墓地にて

## ○何故われは歌はぬか?

ドミンゴ、ラモーン、エルナンデス (エネスエラ國)

## ○ブランカの夢

ホセー、マリヤー、エレデイヤ (玫瑰島)

## ○ニヤーガラ

## ○南歸

ヌマ、ボムビリヨ、ヨナ (秘露國)

## ○ある詩人に

## ○人間の幸福

マリヤノ、メルガール (秘露國)

## ○哀歌

## ○「ヤラヰー」

ホセー、ミーヤ (クラテマラ國)

## ○はじめての誕生日にわが子に與ふる

ホセー、ホアキーン、デ、オルメド (エクアドール國)

## ○わが妹の死にける時



リカルド、バルマ（秘露國）

○供物

○いまでも

フアン、デ、デイヨス、ペサ（墨西哥國）

○わが女等に

アントニヨ、ブラサ（墨西哥國）

○その如く

ホアキーン、キンテロ（エネスエラ國）

○泉流に

○雅誦歌

○わが子リノ、クレメンテの臨終

リカルド、ロツセル（秘露國）

○ちゝうり

○友と鳥

### 緒言

『いすばの、あめりか』とは、嘗て西班牙所屬の亞米利加諸國を指すの語なりき。されど今は米洲の西班牙語使用國を意味するの稱となれり。

曰はく墨西哥、曰はくグワテマラ、曰はくサルヴドル、曰はくオンドゥラス、

曰はくニカラグワ、曰はくコスタリカ、曰はく玖馬、曰はくサント、ドミンゴ、

曰はくプエルト、リコ、曰はくコロムビヤ、曰はくエチスエラ、曰はくエクワ

ドル、曰はく秘露、曰はくボリ弁ヤ、曰はく智利、曰はく亞爾善丁、曰はく

パラグワイ、曰はくウルグワイ。今やいづれも西班牙の羈絆を脱せりと雖、而

かも同一國語の斷つに斷たれぬ鎖鎖を以つて母子の情を堅くす。西班牙語の勝

利何ぞ夫れ大なるや！

請ふ、少しく西班牙語に就いて語らしめよ。

西班牙半島に於ける原始の住民が如何なる言語を有せしかは、餘りに古き問題

にして、その研究の困難なる割合には吾人を益する所尠かるべし。故に吾人は

西班牙半島には『エウースカロ』といへる『イーペロ』種族の言語最古く行はれた



りとの説を根據とし、後『セルタ』族來住して土着人民と混和し、『セルタイーベロ』なる新言語を生せりしことを西班牙語の起源とせむ。さてこの『セルタイーベロ』語は、その後更に『フェニシヨ』、『ロディヨ』、『フラセヨ』、『カルタヒチス』等の異人種が齎したる新分子を加味せられ、希臘及東方諸國の語脈を交へたること少量なりとせず。

かくて漸次年代を經過し、羅馬民族が西班牙半島を侵略したる結果は、殆根本的に在來の言語を改造し之れを羅丁化せしめたり。漢學の傳來がわが日本固有の言語に及ぼしたる影響は頗、深大にして殆、根底より日本國語を改造したるが如き觀なきにあらずと雖、その實は日本語特有の語脈文法を崩壊せしむるには至らず。之れに反し羅丁語が西班牙半島の内に振ひし勢力は更に數層倍の甚しきものありしなり。蓋、羅馬人は征服地の人民をして羅馬の風俗、制度に同化せしむるを以つて、その政策とし、征服者たるの權勢を用ゐて羅丁語の使用を強ひ法廷、公會、學校に於いてはいふまでもなく、文書、貨幣、碑文等にもすべて羅丁語を使用せしめたるを以つてなり。

既にして歐洲の運命に一大影響を蒙らしめたる北方蠻族の侵入は、また、西班牙

牙半島の言語に新變訛を生せしめ、『ギシゴト』族の蠻語を以つて著しく羅丁語を腐敗せしめたり。然るに間もなく『アーラベ』人侵來し、『ギシゴト』王朝を倒して之れに代りしを以つて、茲にまた、言語の混亂を來たし、大に『アーラベ』語原の單語を交へ、この混交によりて生じたる言語を一般人民の通用語とするに至れり。されば純粹羅丁語といへるものは僧侶以外の俗人には一人として之れを解するものなく、遂に第九世紀の頃には純粹羅丁語と通常用語とは全く別々の言語となり、後者を呼ぶに卑俗羅丁語一に『ローマンセ』語の稱を以つてすることゝなりぬ。

今の所謂西班牙語一名『カステヤノ』語は即、この『ローマンセ』語の一種が進歩してカステヤノ王國の國語となり、漸次變遷し來りたるものなり。故に以上記述せる所を約言すれば、西班牙語とは腐敗せる羅丁語に種々雜多の異分子を混入して成れるものなり。否數元素の既に化合して一物質となれるものなり。黒白、精粗、大小、濃淡、相混亂せる間は見苦しきものなり。されどよく調和すれば茲に美生ず。西班牙語の優美なるは實に異分子の配合に基く。見よ、その調和と豊富は何れの國語も敢て企て及ばざる所にあらずや、その壯麗と婉曲



に加ふるに運用の自在と修飾の容易とを以つてするは博言學者のあまねく認識驚嘆する所にあらずや。溫和にして而かも柔弱ならず、激烈にして而かも粗野ならず、平坦にして且流暢なる、變化屈曲の極めて自在なる散文として明晰且正確なる、詩歌として韻語に富み且圓滿調和なる、凡、これらの長所は單に一步を羅丁語に譲るのみにして、能く伊太利語に當り、佛蘭西語を凌ぐ。豈、美ならずや！

而して西班牙文學は、この優美なる西班牙語の花を着飾りて世界の文壇に舞へり。更に一步を進めて西班牙文學の特徴を相せむか。

西班牙人民がその初代より今日に至るまで經過したる變遷、西班牙人民を組成すべき要素として來住したる異種族人民の混交、及、此等の異人種が齎らしたる、風俗、習慣、氣質等種々雜多なる分子は、西班牙文學に顯はれたる特色の由て生ずる原因たり。

そも、西班牙人民は南歐の一種族に屬し、その起源を探るときは、濃富なる想像力を有せる印度歐羅巴人種に出づ。初め『イーベロ』、『セルタ』の二族より成り、後、希臘、『フェニシヨ』、『カルタヒネス』、羅馬、『ゴト』、『アーラベ』

及猶太の諸人種來りて、在來の住民と混交し、これ等人民の來住によりて移入せられたる種々の新分子は、いづれも西班牙人活動の舞臺にその特色を發揮せり。就中、羅丁人、『アーラベ』人、及日耳曼人の勢力は西班牙國民の特性、即西班牙人の祖先が國の爲に生命を抛ちて外寇を防ぎたる勇ましき血戰に現はれたる義氣を養成するに與つて最効あるものなりき。

西班牙人の特性が顯出し初めたるは遠く羅馬人入寇の時代にありて、勇氣、愛國心及獨立の精神は、信仰の熱心、及冒險尙武の氣象と共に中世紀の初代に輝き、羅馬人、日耳曼人及特に『アーラベ』人と接觸し、争闘するに及びては、益々この氣質を活潑ならしめき。而して、強富特殊の想像、鋭敏奇捷の感情、感情的傾向、夢想冒險の精神、昂進したる愛國心、熱誠不動にして而かも執着迷信的なる宗教心、明徹にして稍反射的の才智、實利的感念の缺乏、外形の優美を愛すること、個人的及集合的勇氣、國民并に個人としての華奢と傲慢、慈悲及義侠心に對する盲目的崇拜は、相集りて西班牙の國風を構成したる特性の主要なるものにして、西班牙國民生活の鏡たる西班牙文學の花となりて咲き榮たりき。



然り、以上列記したる種々の性質を驗するときは、西班牙國に侵入したる種族の足跡は明かに印せられ、特に羅丁人、日耳曼人及『アーラベ』人の賜物は西班牙文明の特色を完からしむるに殊功ありしを見る。例之、西班牙文明が羅馬人に負ふ所は、政治上に於ける中央集權の思想、自由平等を愛するの念、及、宗教上に於ける形式及迷信的感念の如きその著明なるものなり。『アーラベ』人の遺物としては不可忍性と黨派心、西班牙人民の戀愛、習慣及俗文學に現はれたる情慾、西班牙人民の氣質たる優雅、温順、嫉妬、夢幻想像的氣風の大部分及一般風俗の幾分を繼承し、最後に基督教徒たる日耳曼人の紀念としては、その文明の本領を傳へられたり。而して此等の性質はいづれも高貴なる行爲、仁慈なる思想、秀妙なる信念の種子となり、中世紀の間優雅、名譽、忠誠の化身として崇拜せられたる義侠心を産み出すに至りしものなり。されどかくいへばとて西班牙人民の氣質は悉く之れを外來人種より傳承せりといふにはあらず。否、西班牙國にはその地理、氣候及基督教以外の宗教より脱化し來りたる自國固有の特性ありしは勿論なり。例せばその感情的なること及無頓着なることは地理及氣候の自然的感化により、之れを『アーラベ』人の遺傳

に比するも決して彼れに劣る所なく、愛國心、信仰心、決行冒險の精神、樂世夢想の傾向、及非政治的個人の自由を好むことは多少外來の勢力によるとはいへ、その主たる淵源は寧、異教的性質に存せるが如き、即、これなり。

文學は文明の反射なり。國民生活の忠實なる描寫なり。果して然らば西班牙文學には前項列記したる思想の反射を認むべきは當然にして、吾人は西班牙人民の生活及氣質の根源的條件を熟知したる後にあらざれば西班牙文學の眞味を解する能はざるなり。廣義に於ける西班牙美術は回想よりも寧、想像に支配せられ、客觀的且優美の傾向を呈し、現實主義よりも寧、理想主義に陥り、不相應に外觀を飾り、常識的なるよりも寧、神秘的なるを見るべし。而して是れ實に西班牙人民固有の性質の眞反影たるなり。従つて、西班牙文學の、あらゆる時代を一貫して現出せるものは回想の上に秀でたる想像にして、この想像たる、半ば西班牙の地理及氣候に胚胎し、半ば『アーラベ』人の感化により、且この特質たる西班牙文學をして比較的實質の缺乏せるに拘らず、その形體を豊澤美麗ならしめき。加ふるに、國民の思想を表明する媒介者たる天才と言語の性質は、たのづから客觀的傾向を呈し、西班牙文學に想飾主義コンセプティビスムと文飾主義ゴンゴリスモの二大角を與



へ、また神秘主義も『アラベ』人の遺物たる常識主義と相對峙して西班牙文學の特相となり、回想の不足と想像の過剰は知らず識らず西班牙國民をして詩學及雄辯學に偏倚せしめ、教訓的文體の進歩は比較的大ならざりき。且又同じく詩學の中にも叙事詩は抒情詩よりも一層客觀的なるが故に西班牙詩學は自然に客觀を主とせる叙事詩に傾き、劇詩の如きも概して甚しき客觀的のものとなり、動作即、外部に留意し、内部、即、心理的作用に疎きを免れず。換言すれば心靈的波瀾及心理的情態を描出し以つて眞實の感動を起さしむるよりは寧ろ用語の婉曲と壯麗を以つて人を驚嘆、眩惑せしめむことを勉めたり。

尙ほ、上來記述したる外、西班牙國美術の進化を助け、その文學に特徴を與へたる原動力の大なるもの三あり。即、世界に覇たらむとする理想、社會的人間といへる理想及義俠心の理想なり。第一は之れを羅馬人に享けて古代及中世の初年に西班牙の文明を支配し、延いて尙武冒險の氣風を作り海外征服の壯圖を養成し、第二は之れを宗教的『ゴド』人種より傳へ、發しては愛國心となり、第三は之れを日耳曼人及『アラベ』人より受けたり。これ即、西班牙文學の三大特徴にして就中義俠心はその最重要なる地位を占むるものなり。

かくの如き特色を有せる西班牙文學の種子を移して、新大陸の沃土に播きつけ、母國西班牙の思想の水を灌ぎ、温暖なる亞米利加の日光を以つて育て上げたるもの、これ即、『いすばの、あめりか』文學なり。

第十五世紀の末、クリストバル、コロンの大冒險によりて通路を開かれたる大西洋の波濤を蹶り、新大陸に移住したる歐洲諸國の人民多かりしと雖、結局この新世界は英西二國の間に分割せられ、英國は佛國に勝ちて北部を占領し、西班牙は墨西哥以南を併吞して餘す所はブラジルとギアナとに過ぎざりき。故に英、西二國がその殖民地に對する政策は彼是相異なる所ありしとはいへ、甲は北部を英化し、乙は南部を西化して各々その特殊の文化を輸入したるは即、一なり。

然らばその昔、無智蒙昧なる亞米利加印度人と野牛の群が東西に水草を逐ひ、南北に轉住したる北部の地が、約三世紀が程英國の屬領たりし間に、徐々として自由民主の大理想を養ひ、一躍して獨立共和國を建て、今日は世界の富強を以て誇る北米合衆國の光榮ある名稱の下に、母國英吉利より移植せる文明の花を咲かせ、遂に文界にフランクリン、ウエブスター、アーピング、ブライヤン



ト、エマーソン、ホーソーン、ロングフェルロー、ホイットイール、ホルムス、ロウエルの如き英傑を出せりとせば、何ぞ怪むを須ひむ、墨西哥以南の西班牙領土も、續々西班牙の羈束を斷つて獨立を宣言し、各々その國柄に相應せる文豪を輩出せしめしこと。而して南北文明の花に大小の差あるは唯々種子の異なるに因る。決して彼れに花あつてこれに花なきにはあらず。英文學といへる名詞を廣義に用ひて、英語文學を意味せしむる時は米文學なるものは自、その中に含まるゝが如く、西班牙文學を以つて西班牙語の文學なりとする時は別に『いすばの、あめりか』文學なるものゝ存在すべき道理なし。されど今の北米合衆國は一個獨立の國にして英國の版圖に屬せざるのみならず、ロッキーの山脈、千里の高原、大洋、大河、物として偉大ならざるなき大陸的風土の感化、自由、平等の歴史及投機、拜金の氣風を有せる米國人は肥滿せる『ジョンブル』にあらずして、瘦せたる鶴の如き『ヤンキー』なり。かゝる國民の理想を發顯せしめたる米國文學、いかでか、英國文學と同一なるを得む？ 『いすばの、あめりか』文學に於いても亦然り。よし、その人民の教育ある部分は多く西班牙人の末孫なるにせよ。よし、その言語、宗教、風俗、習慣は西班牙本國固有のものを、

全くその儘に移植したるにせよ。氣候の差、地形の異、土人との觸接、土語の混入、小さなながらも清き光彩を放てる獨立の歴史、將來に對して抱ける特殊の新理想此等の要件はいづれも相待つて一種の亞米利加的特徴を構成するに足るものなり。世人言はずや、日本の菊も米國に移し植うれば異様の花を開くと、これ豈單に植物のみを支配する天則ならむや。然り、米國文學にも『いすばの、あめりか』文學にも確に一種の特徴は備はれるなり。たゞその特徴の著しく顯はれざる所以のものは、その年齢の若きによるのみ。

『いすばの、あめりか』は比較的微小なる十數個の共和國に分たれ、比較的歐洲文明の中心より遠かれり。これ諸般の事物に於いて北米合衆國に比して一步を譲れる原因の一なり。文學は由來物質的のものにあらずと雖、その進歩は大に物質的進歩の勢力に支配せらる。たとへば印刷料の高直と紙價の不廉は讀書界を狭小ならしめ、讀書界の縮小は文士の收入を減じ、文士收得の微小はその輩出を阻ぐるが如き是れなり。西班牙語の勝利は然かく大にしてその領域の廣大なるに拘らず、未だ世界的大々文學者を出さざる亦其故なきにあらず。日本語の領域小なるが爲に名著と雖も出版部數を多くする能はざるわが國の文



士は概して貧なり(寛大なる文士乞ふ直言を恕せよ。)文學を專業として衣食する能はざる『いすばの、あめりか』の文士は貧家の門より出づること稀なり。況んや教育は下層社會に普及せざるに於てをや。従つて文士たるものは中流以上の階級に屬し、或は政治家たり、或は官吏たり、或は辯護士たり、或は新聞記者たるものが本職の餘暇に筆を執るを多しとす。これその長篇物を出すことの尠少なる理由にして、小説劇曲よりも寧ろ短篇の詩を作り、散文の作物よりは更に多量の韻文作物を産するなり猶、わが國に於いて三十一字の和歌、十七字の俳句を作るものは空の星の如く多きに拘らず、纏まりたる大著述をなす所謂専門的文學者少きが如し。これ『いすばの、あめりか』文學の殊に詩學の方面に於いて發達したる一原因ならむ。

『いすばの、あめりか』文學の中にて詩學が、とりわけ、發達したるには尙一ツの理由あり。それは言語の詩的なるは人民の性質自、美術を愛するに基く。然り、西班牙語は既に述べたる如く温雅優美にして、この點はわが大和の言の葉に比ぶべく、西班牙人種の氣質はその感情的、美術的なる點に於いて日本人に酷似す。

三十一字の短歌は小き花なり。十七文字の俳句は更に小き寶石なり。莖は牡丹よりも小しとて棄つる勿れ。金貨は銀貨より小なりとて輕むするを止めよ。『いすばの、あめりか』詩人の作詩中にはわが國の新體詩人が曾て企てし事なきまでに長篇のものあり。されどかくの如きは單に一詩を以つて一小冊をなすが故にこの集に載するに適せず。單に比較的短きものを撰むで出だせり。蓋、本集の目的は若干の見本を示すに過ぎざればなり。讀者諸君乞ふ諒せよ。



ウルグワイ國詩人

フランシスコ、アクーニャ、デ、フイゲロア

南米ウルグワイ國！

こは僅に七万二千百平方哩の面積と九十万の住民を有する一小共和國に過ぎず。初め西班牙の領地として秘露副王國の一部を形成せしが、亞爾善丁國の獨立と同時に西曆千八百二十五年八月廿五日を以て獨立の旗幟を翻へし越えて千八百二十八年八月二十七日モンテパオの條約によりてその獨立國たることを認められき。さればウルグワイ國はその齡、未だ一世紀に満たず、且國土の廣袤よりいふも日清戦争以前の我日本國にすら及ばざる幼弱の小國にしてイスパノアメリカ諸邦中、最小なるもの一なり。

國既に小なり、國力亦未だ振はず、故を以つてその國情は多く外國人の度外視する所となり、同文姉妹國たる墨國若しくは秘露に於てすらウルグワイ國の形勢を知悉するの便宜を有せざりき。著者はこの「イスパノアメリカ」詩集編譯の初より廣く各國の詩人を網羅せむことを勉め、之れが材料の聚集に熱中せしも、その盡力の大なりし割合には得る所少く、ウルグワイ國詩人の詩は十數家の作を集むることを得たれども、外國の詩人を紹介する上に最必要なる略傳を得る能はず、漸く秘露國を出發する二三日前に至り「アメリカ、ゴエーテイカ」と題する一巻の大冊詩集を得、之れによりて兼てその詩を知り得たるフイゲロアの略歴を知ることを得たり。



EL RAMITO ANÓNIMO.  
FRANCISCO ACUÑA DE FIGUEROA (Uruguay)

3

しあはせものなる花束よ！  
美の天使さし飛び行けよ、  
わが身軽侮をかこたむ間、  
うつくしき容姿ほめてあれ。

汝は誰れに行くか誰がやるか、  
少女子ひとりこそ告げよ、  
さはあれ他人もしきけばとて、  
いふなよ誰れより誰れへとは。

(なほり)

ウルグワイ國

フランシスコ、アクーニャ、デ、フィゲロア。

無名の花束。

2

今は左に記する所より以上を讀者諸君に知らしむる能はざるを遺憾とす。

Francisco Acuña de Figueroa は千七百九十年九月二十日にウルグワイ共和國の首府モンテビデオ市に生る、健腕と愛嬌とを以つて世に知られたる詩人にして、イスパノ亞米利加文學の好標本を示せる一人なり。千八百四十八年に宗教的詩歌を収めたる一卷の詩集を出版して好評を博し、其の後引き続き頻りにその作を公にせしも、遂に世に出でざりしもの亦極めて多し。千八百十二年より十四年に至るモンテビデオ攻圍の史的日記 (Diario Histórico del Sitio de Montevideo en los años de 1812-1814) と題する二卷の韻文、雜詩を集めたる五卷、千八百章の短諷詩を収めたる一卷、宗教詩、史詩及祝詩等を集めたる二卷ありて大抵は上梓せられ世に行はる。  
アクーニャは温厚、正確且健腕の詩人なりしが、今後と雖も、「いすばのあめりか」中の最賞讀せられたる詩人兼文士の一人として永久に記憶せらるべし。  
千八百六十二年(わが文久二年)十月六日歿す。



## 墨國詩人マヌエル、アクーニャの畧歴

マヌエル、アクーニャ (Manuel Acuña) は千八百四十九年 (我が嘉永二年) を以て墨西哥コアウイラ州 (Coahuila) の首都サルティエヨ (Saltillo) に生る。歸十四才に滿つるや滿ちざるに首府墨西哥に出で「サン、イルデフチンソ」小學に入りこれに寄宿したりき。後年「我が父を思ひての涙」と題したる詩中に

「かれの腕はわれを堅く抱きしめぬ……………」

かくて程なく……………薄明の中に沈む

日の青白き反射により

わが搖籃さわが兩親をこめて

見えずなり行く市邑のみ遠く見ぬ。」

と歌ひたるはかれが故郷を去りし時の述懐なりき。

羅丁語、數學及哲學を學ぶ數年の間は秀才の名の下に經過し、遂に轉じて醫學校に入りぬ。この醫學校はわが札幌農學校の當初に似て、當時、單に醫師を出したるに止まらず、屈指の女士、學者を輩出せしめ名聲頗る高き學校にてありき。

その相貌をいはんが、彼れは瘦形の好男子なりき。額秀で、極めて清潔、その上方には後に向けて撫でつけたる黒き毛髮、強れたる如く立ち、一見して無性なる手の外には決して極さいふものを用ひざるもの、如く思はれぬ。眉は羅丁人種に多く見る所の弧形所謂三日月眉にして濃密に且黒く眼は大に

して眼孔より脱出せむとせざるが如くに突起し、鼻小くして鼻筋よく通り、口は小にして下唇厚く、鼻下の髻はその兩端を剪れり。額は稍尖りてこゝに笑くぼをたゝる、常に腰下の長き黒の「フロツクコート」を着し、歩行の速なる割合に言語は稍々濫吃するの傾ありき。

その性格をいへば内心悲哀に滿つるも口頭には嬉語戲談を躍らせ、感情的なることは小兒の如く、忠實なることは古代の騎士の如く、能く他人の苦痛を以つて己が苦痛となし、貧困又は罹病の友人を見舞ひ之れに侍する彼れの知きは稀なりき。

醫學校に入りてよりは同校二階の十三號室を占めて (この室は嘗てフアン、デイヤス、カゼルベヤスの占め居りしものにしてこの人は千八百五十九年四月十一日タクパヤに於いて銃殺せらるゝ際、此所より出で行きたりさいふ) 常に良友に愛せられかれの室には友人の來訪絶はざりき。これ等の友人は後、大抵名を成したる人にしてアクーニャの才を嫉まず、また、その横恣をも尤めず、而かもその物は率先して之れを賞讃するの輩なりき。

アクーニャの作「過去」(El Pasado) と題する劇が初めて演ぜられたる際かれが耳を聳せしむる喝采の中に、當時第一流の俳優ホセ、グレロ及女優サルヴドール、カイローンに導かれ、舞臺に顯はれたる時は眼に涙を持ちさいふ。ある葬式の際朗吟したる一篇の「オダ」は當代の老練なる詞宗をも感激せしめ、「滑稽の一撃」(Un rasgo de buen humor) と題する詩は濫面家の綽名ある紳士をも微笑せしめさいふ。

又孝心にも富み、故郷の母の書翰を受取る毎に、之れを讀み了れば必らず母の署名に接吻し、「母上に逢はざるこそ久し、おいさしや母上は唯寫眞にて我れを見給ふのみ」と歎息せり。あゝ慈母との別居、



こはつれを精神的に殺しぬ。疑ふものは乞ふかれの詩「今昔」(Eufonias y hoy)を讀め。  
千八百七十三年十二月五日の金曜日なりき。かれはその親友フアン、テ、テイヨス、ヘサ(今尙在世の名詩人なり)と共にアラメダ公園に散歩し、そこにて「小川に」を題する一短詩を作り(こはつれが絶筆なりき)黄昏二人はサンタ、イサベル街のさある家の前にて分るゝに臨み、アクーニヤその友に向ひていふ

「明日正二時に間違ひなく来て呉れ給へ」

「正一時……………」と友は尋ねぬ。

「若し一分でも遅くなる……………」

「どうする……………」

「君に逢はずに行くかも知れぬ」

「一体何處へ？」

「旅行をする……………」とウム……………旅行を……………後で判然とす

と友が尙ほ問はむとするを待たで彼はその家に急ぎ入りぬ。あゝこの時憐むべき詩人の偉大なる心は既に病み居たるなりき。

その夜アクーニヤは晩く學校に歸り來り、秘藏したる多くの紙片をとり出して之を裂き且燒棄て、やがて數通の書狀を認めたり。一は故郷の母、四通は知己朋友に宛てたるものにて何れも黒縁をこりたる裏中用書翰紙を用ひたり。次ぎの日かれは晩く起床し、室内を整理したる後、入浴に出かけ、正午十二時にその室に歸り來れりといへば

「わが死因につきて細々しく記さす、されどこの事、誰れかに累を及ぼすべくとも信ぜず、われ自身を除きては何人も罪なきことを知るを以て足れりませよ

千八百七十三年十二月六日

マヌエール、アクーニヤ

この書置をなしたるは蓋し、この時に於てせしものなるべし。暫時の後かれは廊下に出で來りて、さまざまの雑談をなし十二時半頃その室に入りぬ。

親友ヘサは醫學校の門前にて一友に引留められたるため約束の時間より數分後れて入り來りその室に入りて、夜机の上の蠟燭は點火せられ、アクーニヤは安眠せるが如くに寢臺に横はれるを見出しぬ。されどかれは最早この世の人にあらざりき。かれは毒を仰ぎて死せるなりき。

死するまじき齡僅に二十四才、されどかれの文名は單に墨西哥のみならず、遠く諸方の西班牙語國に知られ作者の誰たるを知らざる輩までもアクーニヤの傑作を吟誦すること盛なり。現んや墨西哥市に於てはかれの劇「過去」を興行したる例さへあれば同じ月の十日(水曜日)に於ける彼れの葬式は實に壯觀を極めたり。かれの遺骸が醫學校の禮拜堂に横はれる間、種々の會、又はかれの賞讀者より贈り來れる花冠、花束はちの數幾百なりしかを知らず。この日午前九時頃には醫學校の構内は更にもいはず、その前面なるサント、ドミンゴの小公園には群集の山を築き、會葬者は屈指の豪商紳士、教授等をはじめ數百人の多きに及びたり。午前十時、親友數名自からアクーニヤの棺を擔ひて醫學校を出で行列肅然たり。棺の次ぎには文學會をはじめ、種々の會の代表者あり……………次ぎに招待したる會葬者續き、その後には一輛の極めて華美なる葬式車つき、この葬式車の後部には絲を断らる黄金の琴



ENTÓNCE Y HOY.  
MANUEL ACUÑA (Mexicano)

9

夜縮緬の面巾を  
やぶりすてつゝ温き  
朝日の光窓すぎて  
かゞやく時の景なりき  
神入りませと半分ほど  
今しも開けし屋根ひとつ  
一方の隅にちらつける  
燈火ひかりかすかにて  
夫と妻のそが中間に  
さながら愛の絆とも  
見ゆるは籐の搖寐籃  
なかに生れて程もなき

今昔

墨國 マヌエール、アクローニヤ

8

を載せ、琴の上にはこの詩人がかれの劇の初興行の際に得たる最名譽ある花輪を載せたり。この葬式車の後に續きたる會葬者の馬車は實に百を超たりといふ。かくて道中殿前にかムゴ、フロリドの墓地に送り、盛大なる儀式の下に薄命なる詩人を埋葬す。後年改めて之れをドローレスの墓地に移し友人相計りて詩人の爲めに一の紀念碑を建つ。

アクローニヤが自殺の原因につきては或は之れを失戀の結果といひ一時巷説喧しかりしも其の戀人の誰なりしやすら明かならず。畢竟かれは悒鬱症と戀病とに侵されたるに外ならず。その自殺前數日間の如きは殊に萬事に規律なく、殆、不眠の有様にて曉天に至るまで讀書し、物を書き、好むで濃き珈琲を飲み、心中に纏まる苦痛を醫さむため窓と外面には嬉悅を装ふものゝ如くなりき。

かれの故郷サルテイーヨ市もアクローニヤの紀念としてかれの名を場名としたる劇場を建築しその内庭を琴の形とせり。

嗚呼運命は二十四才の前途多望なる詩人を奪ひ去りぬ、されどアクローニヤ死して茲に三十年、歲月もかれの文名を消し去る能はず、かれはかれの精神をこめたるその作詩と共に永久に生きむ。



ちで一人……そはわれなりき！  
 荒き軒端に宿かりて  
 いづれも二羽の一番  
 灰の色せしおのが巢の  
 近傍に燕の囀れば  
 籠の「トルカサ」「シンソソテ」  
 戸口に近く身を寄せて  
 苦痛に慄ひ、そが歌と  
 聲ををそれに合はせけり。  
 △「マドレセルヴ」は蔓長う  
 格子戸攀ちて上りつゝ  
 枝葉たくみに面白う  
 うちまじへつゝからみけり、  
 窓布ひとつ編みあげて  
 一葉／＼に花ひとつ

一花でここに小さなる  
 ま水の滴しづくには  
 その頃いさゝ楽しさの  
 日とながめつゝ今日は憂き  
 日とぞ見るなる同じ日の  
 照りかへせるを映し以て！  
 われ生きてある故になほ  
 ながらへ給ふ母上は  
 幸福と狂喜に息つきて  
 われをみ腕にあやし給ひき、  
 その間わが父上は  
 はてしも知れぬ恩愛の  
 たゞもあまりに過ぎければ  
 われをなめづり給ひしが  
 その接吻は年すぎて



『逝去』といへるものゝ來て  
 われより奪ひ去りけりな。  
 またその父の接吻の  
 負債を拂ひ戻さむと  
 今は眠りて在す墓に  
 行きもせでわれ残りつゝ……  
 われは父母を酔はしむる  
 その愛情の夢の本躰  
 魔美に富みかつ幸福多き  
 その家庭の中にその頃は  
 いくく生まれしわが身にて  
 白き寐籃はこのわれを  
 愛度なきものと思ひなし、  
 世はわが身をば苦ぞと見つ、  
 善き父母の心には

ふたつの外に今ひとつの  
 心と思はれ居たりしを……  
 その幸福の時よりは  
 今日を積つて二十三年……  
 げにその朝より今朝までに、  
 かの太陽見しよりこの太陽まで、  
 わが故郷の家はしも  
 わが眼を遠く去りうせて  
 わが喜望も沈みはて  
 兩の腕に天國を  
 抱き給へるわが愛の  
 いとし母上朝ごとに  
 われさまさむと呼び給ふ  
 ことさへあらず、そのみか、  
 わが住む此處に在さねば



朽ちはてしわが琴とりて  
 歌ひとついざ奏でむと  
 思へどあはれ甲斐もなし、  
 歎きの聲を母うへの  
 すゝりなきとに歌聲を  
 吞ませたけれど甲斐もなし……  
 われたゞ孤獨逃げうせし  
 むかしの時のありとある  
 紀念の前にうちむかひ、  
 わが心霊はさながらに  
 荒れしみ寺院の如くにて  
 燈火もなく神もなく  
 萎頹の中に希望をば  
 呼びこそ起せ、その希望、  
 古き墓場の底ふかく

太陽の面影の沈むごと  
 奥殿ふかくわけ入りつ……  
 人生てふものが搖籃と  
 墓場の中間にひろげたる  
 天が下にはなべてみな  
 心ひとつに一つづい  
 世界は動きなべてみな  
 ひとつの愛に太陽もひとつ……  
 (さばれ)その光はや死にうせし  
 わが曇りたる一生の  
 天が下なるこの世には  
 わがみる夢も何かせむ？  
 わが心、また何かせむ？

\*「トルカサ」シンソソテ「はいづれも墨國産の小鳥の名なり。  
 △「マドレセルワ」は忍冬に類せる一種の植物なり。



ANTE UN CADÁVER.

MANUEL ACUÑA (Mexicano.)

16

屍骸の前にて

墨國 マヌエール、アクーニャ。

さても！汝れは早くここに在るよ……板の上に、  
學術の大なる地平線が、  
その境界の廣がり延ぶる板の上に。

頑強なる經驗が、  
人世てふもの、服膺すべき、  
無上法を布かむとて來るこの場所に。

その光もて奴隸と貴人との、  
差別を滅するかの星が、  
光輝を發散するこの場所に。

虚誕は黙して、  
事實の聲昂がり、  
迷信消滅するこの場所に。

たゞその不可思議のみを以てすら吾人を恐怖せしむる、  
かの問題の解決を讀んで、  
學術進歩するこの場所に。

學術——そは理性を以て標題となし、  
汝が唇頭より無上眞理の、  
嚴肅なる聲を聞かむと熱望しける學術。

17

汝は早、此處にあり……汝を苦痛に禁錮せし、  
牢獄を破らむとて最後まで、  
汝が續けゝる忌はしき戦闘はて。



汝が瞳孔の光は今や、あらず、  
汝が存命機關は漫然休止し、  
その目的を果たすを拒めり。

『あはれ、而してそれのみ！』といはむ、  
生命の帝國は死の帝國の始まる所に、  
終ると信する者汝れを見て。

而して汝が天職盡されたりと想像し、  
汝に近づき、その目つきもて、  
汝に永遠の袂別を告げむ。

されど、あらず………汝が天職未だ終らず、  
そは吾人の生まるゝ點は無にあらず、  
吾人の死する點もまた無にあらざれば。

人生は圓なり、之れを測らむとするに當り、  
搖籃と墓地とを兩端として、  
そを限定せむとするは誤まれり。

母てふものは吾人の形體をうくる、  
模型に過ぎず、而かもその形體や旅客の如くにして、  
吾人はそを携へて不親切なる生涯を横斷す。

されどその形體は吾人の身を蔽ふ、  
最初の形體にあらず、また、その形體死するとも、  
そは吾人の身を蔽ふ最後の形體にもあらず。

今や呼吸もなき汝れ、暫時の間に、  
地に歸るべし、而かも宇宙的生活の、  
燒點たるその中央に。



かくて其處に異形の生を得て、  
雨と風の能力は、  
原種を以つて汝が泥土を富ますべし。

かくて根より穀粒に昇進するに及び、  
宏大なる化學試験室の中に、  
植物を實見する者たるに至らむ、

思ふに悲しき妻が一個の麵包をも得ずして、  
汝を夢みる悲しき家庭に、  
小麥に變生してかへらむため。

さては汝が墓穴の裂目は、  
蛹變りて蝶となり、  
その開ける底より揚がるを見む、

その力なき飛びさま試しつゝ、  
汝が死人の接吻を齎さむため、  
汝が愛の幸なき寢所に行くならむ。

而してそれ等の内部の變化を遂ぐる間に、  
汝が頭蓋骨は一新生命に満ち、  
思想にはあらで花を咲かせむ、

(かくて)その花の花盃には涙隠れて輝かむ、  
思ふに汝れの愛する妻が、  
汝が告別の挨拶に對へけるその涙。

墓は旅行の終極ぞ、  
そは吾人の心中に裏まれたる火焔は、  
墓中に死して残るなれば。



されど門戸にて吾人の呼吸吹き消さるゝ、  
その住家には新に吾人を生命の中に、  
よびさます他の呼吸あり。

其處には力量と才能了り、  
其處には歡樂と不幸了り、  
其處には信仰と感情了り、  
其處には地上の縁繩了り、  
賢者、白痴相混じて、  
共に平等界に沈む。

されど生氣銷盡して、  
機關破滅するそこにこそ、  
死する身は生ひ出づる他身たるなれ。

舊組織の有力、且、豊沃なる深谷は、  
侵畧せられ、その中より、  
他の組織形造られ而して成る。

人は虚心平氣、その姓名が、  
不朽に傳はると否を問ふことなくして、  
正邪を評判する歴史を見棄つ。

かれはたゞその土塊を集拾し、  
形体と目的とを變じて、  
永遠に生きむことを努む。

23  
墓は一個の骸骨を藏せるのみ、  
されど生命はその死の圓天井の中に、  
隠かに自養の道を講ず。



NOCTURNO.  
Á ROSARIO.  
MANUEL ACUÑA (Mexicano.)

25

よし、さらば！われは欲りす、  
われ汝を拜むと汝れに告げむことを、  
あらむ限りの心をつくして、  
われ汝を愛すと汝れに告げむことを、  
わが苦惱することや多量、  
わが啼叫することや多量、  
最早しかく多量なるに耐へず、  
汝に哀願する泣號の中に、  
汝に哀願し且わが最終の、  
空想の名によりてわれ汝に語ると。

悲 歌

ロサリヨに。

墨 國 マヌエール、アクローニヤ。

24

(そは)而かく吾人の懇望を言ひ入るゝ、  
この推移的なる人世の終末には、  
榮光に似たる不滅の物質は、  
形體を變ずと雖、決して死なざるものなれば。

(なほり)



われは汝が知らむことを願ふ、  
 しかく睡らざりしが爲に、  
 われ病むで蒼白きこと、  
 既に久しきを、  
 わが希望はみな、  
 既に死に失せたることを、  
 わが夜は闇し、  
 げにも將來てふものは何處に、  
 飛揚し行きしかをすら我れ早知らぬまでに、  
 しかく暗黒に且陰鬱なることを。

夜間我れわが頭を、  
 枕の上に横たへ、  
 わが心をして別世界に向け、  
 轉せしめむと欲りするとき、

われは多く、多く歩む、  
 而して旅行の終極に、  
 わが母の容姿は、  
 虚無の中に消失して、  
 汝は新に、  
 わが心中に現出し來る。

われは知了せり、汝が接吻は、  
 今後決してわがものにあらざるべきを、  
 われは知了せり、われは汝が眼中に、  
 今後決して我れを見るべきにあらざるを、  
 而して我れ汝を愛し、  
 且わが狂熱なる亂心の中に、  
 汝の侮蔑を祝福し、  
 汝の無頓着を禮拜し、



より少く汝を戀ふる代りに、  
更に多く汝を愛す。

時としてわれは汝に、

永久の告別をなし、

わが記憶の中に汝を塗抹し去り、

わが焦心の中に汝を沈めむことを思ふ。

されどこの事すべてその甲斐なく、

わが心霊汝を忘れずば、

汝はわが如何にすべきを願ふか？

わが生命の一半よ、

汝はわがこの心臓を、

如何にせむことを願へるか？

さても、汝の至聖所竣工し、

汝の燭は點火せられ、

祭壇には汝の<sup>かつぎ</sup>白帛、

鐘樓のうしろに、

朝の太陽、

大蠟燭は火花を飛ばしつ、

香爐は烟をあげ、

はるか彼方に家庭の門戸、

開かれぬと、

見るまもなく……………

如何に美はしくありつらむ、

二人永久に合體して、

二人互に愛しつゝ、

汝は常にわれを慕ひ、

われは常に満足し、



二人はたゞひとつ靈魂、  
二人はたゞひとつの胸、  
われらが中間にわが母を、  
ひとりの神とあがめて、  
その屋根の下に住まむは！

思ひても見よ、生命の時間は、  
如何に美はしきかを、  
かゝる地を過ぎり行く旅は、  
如何に甘く且美なるかを！  
而して我れはそれを夢み居き、  
わが聖なる約束の少女よ、  
かくて慄へたる心霊を以て、  
それを空想するとき、  
汝の爲に、汝の爲のみに、

善ならむことをわれは思ひき。

こはわが最美はしき夢、  
わが熱心、わが希望、  
わが幸福また我が歡樂なりしことは、  
神よく知り給ふ。  
わが生るゝを見けるとき、  
われをその接吻の中に褰みし、  
樂しき家庭の中に、  
あつく汝を愛せむことの外、  
何事にもわが努力を費さざりしことは、  
神よく知り給ふ！

わが希望はかくの如くなりき……………  
されど今や二人の間に、



存在せる深き斷壑は、  
その光輝を遮ぎれば、  
今を限りの暇つけむ、

わが戀の戀よ、

わが闇中の光明よ、

わが花の精よ、

詩人のわが琴よ、

わが青春よ、いざさらば！

結婚式の時新婦の被る白き薄絹なりわが那の綿帽子にあたる。

(をばり)

### 秘露國詩人クレメンテ、アルタウス

クレメンテ、アルタウス (Clemente Althaus) は千八百三十五年(わが天保六年)十月四日に里馬市に生る。父はフニン及アヤケーチヨの獨立戦争に勳功ありし將軍クレメンテ、アルタウスなり。

詩人アルタウスは生れて體質頗る虚弱なりしを以てかれが十歳の時、その両親はかれを南隣智利國に送らざるを得ざるに至り、異郷に留まること數年、この間「國學院」に入りて普通學を修めき。

さて故郷秘露に歸りて「サン、カルロス」學院に學び、同校在學中はリカルド、バルマ氏等と同級にして、早くより詩作を試み、「繪入雜誌」の編輯者は一少年アルタウスの作詩を歓迎して續々之れを掲出し、單に秘露國內に名を揚げたるのみならず、篤學の旅行者マークム (Markham) は、千八百五十六年に出版したる (Cuzco and Lima) と題する旅行記中にアルタウスの詩才を賞讃せり。

千八百五十五年かれは年二十にして歐洲に修學旅行を企て、佛、伊、西、英、獨、の諸國を漫遊して古今の文學を探究し得る所少からず、千八百六十二年には巴里にて諸集二卷を出版し、翌六十二年秘露國に歸る。

而してかれはそれより多年大藏省の官吏たりしも、その後の履歴に就いてはコレテイスの「秘露詩壇」にも、バルマ氏の「亞米利加の琴」にも記す所あらず。よつて記者は明治三十五年六月十九日バルマを里馬の國立圖書館に訪ひて之れを尋ねしに「私の同時代の詩人で生きて居るのはマルケス、ヨナシスネロスと三人だけで、アルタウスはズット前に死にました」(千八百八十年に逝去せり)と答へられき。故に今ほこれのみを以つて姑く満足し、更に他日を俟つて補正する所あらむと欲す。



Á UN CÓNDOR ENJAULADO.

CLEMENTE ALTHAUS (Peruano.)

籠中の『コンドル』に

秘露國 クレメンテ、アルタウス。

アンデス山脈の高地に棲む「コンドル」といへる大鷲が外國の動物園の籠の中に自由を失へるあはれさを歌へるものなり。原詩は十四行詩にて作りたれば、唯脚法のみを變へて七五調とし、行數と押韻は原形を存せり。即、第一節と第二節は一、四を四つながら(オ)韻とし、二、三をすべて(イ)韻とし、第三節は一、三、五を(イ)韻、二、四、六、を(ウ)韻とせるに注目せられ、これ譯者の苦心せる所なれば。

亞米利加の地に萬鳥の

王とまつられいと高き

アンデスの雪うしろにし

昨日は飛びぬ揚々ど。

廣く際涯なき空間を、

帝國とせし身ながらに、

今日はひとやに羽をのし、

舉動にあらはす大心。

あゝ「コンドル」よ、見る我れに、

汝は幽囚の苦を語る！、

されどもわれは故郷に、

歸り行くべし、程もなく、

なれは死ぬらむ外國に、

奇なりと衆人に見られつゝ。

(をばり)



## コロムビヤ國の詩人フリヨ、アルボレダ

千八百十九年を以つて西班牙の羈絆を脱し、獨立共和國となりたるコロムビヤ國は、内亂の接踵せる國に對し、獨り立ち革命を唱へ、大統領選舉は常に内亂を意味し、過ぐる第十九世紀の間、國內靜謐にして人民その塔に安んじたるは單に二三回數年の平和を維持したる間に過ぎず。従つて泰平の賜物たる文學の進歩は遅々として、見るに足るべき紀念物を遺せる大文學者も出てざりき。

されどコロムビヤの上流人士は詩想に富めりとの評ある西班牙人の子孫なり平家の一族中、戰亂の中に尙、風雅を捨てざる歌人少からざりし如く、戰争の聲に驚きて生れ、劍戟の音を聞きつゝ世を辭したるコロムビヤ人中にも、尙よく心を風雅に傾け、詩神の前に琴を撫づるの士もありき、フリヨ、アルボレダは、そのゆかしき詩人の一として指を屈せらるる風流男子なり。

フリヨ、アルボレダ (Julio Arboleda) はラフアエル、アルボレダとその妻マテイルデ、ボムボ、イ、ガドネルの間に設けられたる長子にして、一人の弟あり。かれの兩親戰亂を避けて太平洋岸の一嶺山に隱匿せるさき、其處にて生れたるは長子フリヨにして時に千八百十七年即、わが文化十四年七月九日なりき。

アルボレダ一家の移りてボパヤーン市に住むことになりしはフリヨが二才の時にして、かれは一たびも學校の門をくぐらず、家に在りて父母の薫陶をうけ、又祖父につきて羅丁語と幾何學、祖母に就きて佛蘭西語を學習せり。

かれの父ラフアエル、アルボレダは南米のワシントンと稱せらるる獨立主唱者シモン、ボリーヴルの股肱として國事に奔走し、過度に心身を勞したる結果としていたく健康を害ひたれば、靜養のため歐洲漫遊を思ひ立ち、千八百三十年子のフリヨをも伴ひて、倫敦に赴き、其地に在る愛蘭の加特方教徒たる一教師に兒の教育を托し置き、單身大陸を旅行せしが、翌年十一月に至り病革まりて伊太利のピサに客死せりき。されどフリヨは依然英國に留まりて勉學し、遂に倫敦の大學より「文學得業生」の稱號を受け、千八百三十二年には巴里までの旅行をなして英國に歸り、後佛國を経て伊太利に赴き伊太利語及伊太利文學を學びて得る所少からざりき。

かくてかれが故國コロムビヤに歸りしは、千八百三十八年のことにして、歸國後かれは共和國の一公民として國政に參與せむとの目的を以つて、カウカ州の大學に入り翌三十九年まで民法及政治學を修め、文學を教授せりき。

かれが故郷ボパヤーン市に「博言學會」を起し、一の青年團體を作りたるはこの頃のことにして、學術的研究の傍、時の大統領マールケスの政治方針に合同して反對黨を攻撃し、地方の輿論を喚起するを以つてこの會の目的とせり。尋いでオバンド首領となりて革命の旗を翻へし、政府に反對するに及び、フリヨ、アルボレダは軍人となりてマドルケス黨に加はり、ボパヤーン國民軍の副隊長より進みて中佐となり、内亂平定すると同時に退職せり。

この内亂は千八百三十九年より四十一年に亘りしが、翌四十二年にはフリヨ、アルボレダは妻を迎へて田園に退き、農場管理の傍、文學の研究を唯一の娛樂とし、平和の月日を送りしが、千八百四十四年より四十八年までは下院議員に選舉せられ、議會に於いて雄辯家の名を得たり。又一友かれを推薦して



外務大臣の職に就かしめむせしも、かれは時の大統領モスケラ將軍を主義を異にせるの故を以つて固辭して受けず、再、退隱の生涯にかへり。

超いて千八百四十九年三月七日將軍ホセー、イラリヨ、ローベス選ばれて大統領となる。ローベスはもとアルボレダの友なりしも、アルボレダはローベスの方針が自己の利益を害するを見て、ボバヤーン市に一雜誌を起して盛に大統領の政治を攻撃し、遂に一時ボバヤーンの獄に繋がる。時に千八百五十一年にしてかれは自、革命の首魁となり、エクアドールに於いて軍器を購ひ、本國に攻め入りしも事成らず、遂に陸行して秘露國に逃れ、千八百五十三年の初まで里馬市に留まり、衣食のために或は教師となり、或は新聞に物をかきなごしき。

千八百五十三年アルボレダ家族を率ひて組育に移る。されどこの時は既に政府變革の後なりしを以つて翌五十四年選ばれて上院議員となり、故國に歸り來りて首府ボゴターに住し、居るも數ヶ月にしてメロの獨裁官となりて政府を顛覆するに會ひ、之れに反對して正當政府の爲に戦ひ、同年十二月四日の勝利を得たる後、推されて國會の議長となれりき。

千八百五十五年、かれは政界を辭して巴里に赴き、專、兒等の教育に従事せしが、千八百六十年私用のため一旦歸國す。然るに時、恰、内亂の最中なりしかば大統領オスビナの囑を受けて、直に革命の渦中に投じ、サンタ、マルタに於いて苦戦の結果、病に罹りしを以つて十二月十四日船に乗りてコローン港に逃れ、翌六十一年パナマに於いて餘衆を糾合し、三月バストに達し、進んでカウカ州の首都ボバヤーンを占領せむとし、六月三十日その近在にて劇戦あり。アルボレダ微傷を負ふ。八月十日故郷ボバヤーン市に進入し、尋いでカウカ、アンテイオキヤ二州官軍の都督となりしも、味方諸所に敗

れて事成らず。千八百六十二年十一月十二日同志數名と共にベールルエコスといへる山を超えて逃るゝ途中に暗殺の害に遭へり。時にわが文久二年にして、アルボレダの享年實に四十有六。

詩人アルボレダの閉居かくの如し。かれは始終内亂に干與して戰場に馬を馳せ、或は外國に流寓し、眞に平和の生涯を樂しみて、専心文藝に耽るの時日極めて少かりしため、その作詩は或は故郷ボバヤーンに於いて、或は里馬市に於いて、或は巴里に於いて成りしもの多く、大抵匆卒の間に綴れるものなれば、未以つて上乘の詩、成熟の筆なりとは、評し難し。唯、この戦亂の世に出て、身みづから、劍戟の間に入らせる一將士にして、紙數三百頁に餘る詩集一卷を後世に傳へたりといへる一事によりて、吾人はこの詩人の風流を欣慕すべきのみ。



À BEATRIZ.

JULIO ARBOLEDA (Colombiano.)

ベヤトリースに。

コロムビヤ國

フリヨ、アルボレダ

この詩はアルボレダの企謀せし革命軍敗れ、秘露國に逃れ流寓せるとき、千八百五十一年十一月に里馬市より故郷の五才になる女兒ベヤトリースに作りて送れるもの。原詩は八言の「イタリヤナ」律格なり。戀郷の切情と愛國の熱誠を吐露せる詩人の心を讀め。

むすめよ、母は告げこせり、  
汝れはわが文見てしとき、  
兩眼うるませ我れゆへに、  
汝はつく息をもらしぬと。  
いとしむすめよ、この父は、  
汝が爲しほごの事きゝて、  
思ひ浮かぶる事はしも、  
苦患か樂か得も知らず。

幼くてさへ流すなる、  
罪なく潔きその涙、  
われらの神にめぐみこひ、  
あはれみ呼ばぬことやある？  
汝がためわがため、母のため、  
また泥水と暴虐の、  
底に沈める孤兒の、  
いとしきなれが兄弟のため。

幸なる哉や、汝れが目、  
うるむ涙の中にこそ、  
わが父母の勇徳は、  
かゝやく光はなつなれ。  
國家の爲とて身を殺し、  
永き奴隸の鏈をば、



斷ち給ひにし父母の、  
孫女に當れるいましなり。

道理ならずや？やよ娘、  
人は笑めども汝はうれふ！  
人はこゝろも安らかに、  
はゝねめど汝は泣くになむ。  
世の人すべて奴隷にて、  
わが娘また苦になげく。  
しかも彼等は甘んじて、  
しのべり屈辱の鏈をば。

五たび春を見しまでの、  
汝も早泣くよ幼くて、  
泣くは貴し汝が國民も、

また貴めり、その泣聲。  
子等よ！汝等が憂き様や、  
麵包と生命を汝等より、  
奪ふは父の讐敵にて、  
その所爲見れば無慘なり。

無慘もよけれ。わが子らは、  
徳を忘れてひざまづき、  
宥免をねがふあはれなる、  
いやしき民の子にあらず。  
わが子等死なむ飢餓のため、  
死か！…奴隷か！…われのをむ、  
わが子等の死を歎かむを。  
奴隷となりて生くるなよ。



智利共和國は南米の戦勝國なり。二十年前（一八七九—一八八三年）秘露ボリヂヤ二國に勝ちて以來國運頓に隆盛の境に進み、近年國力振興の稱ある亞爾善丁共和國すら、尙一步を智利に譲らざるを得ず。南米一と稱せらるゝ海軍と、圖書館と博物館とを有する智利國が文物の進歩に於いて如何なる地位を占むるかは、日清戦後の日本を知るもの、能く推測し得る所ならむ。

國勢既にかくの如し。故に智利國は單に自國の詩人を輩出せしめしのみならず、また、他の南中米同語國の文士を歓迎して、自國の文學界に活動せしめたり。而して記者が茲に讀者に紹介せむと欲するエドワルド、デ、ラ、バール氏は綺羅星の如く數多き智利國詩人の中に在りて、群に秀で、寺院の高塔の如く聳立つ第一流の大家なり。今や春秋を重ねるこゝ六十四。早熟早老の定評ある西班牙人種の通義に漏るゝなくむば、氏は既に老衰に近く、今後多く望を屬する能はずと雖も、氏が過去四十年間に得たる名聲は、西班牙語使用國を通じて、既に到らざる所なし。西班牙翰林院編纂の西班牙語辭典の新版を持つる人は、その巻に首掲げたる智利文學院學士の部に於いてバール氏の姓名を發見すべし。

わが國に於いて維新後最、廣く新知識、新思想の普及を圖り且實行上之れを爲し遂げたる人はと問はば、何人も、故福澤先生を思はざるものなかるべし。而して今日智利國の青年に向つて、彼等が最敬慕せる自國の大人物は誰れなりやと問はば、彼等は異口同音にバール氏なりと答へむ。實に氏は全生涯の過半を擧げて、新知識と新思想の宣傳に盡せり。氏は教育者たりき。學術演説の雄辯なる辯

### 智利國の現代詩人エドワルド、デ、ラ、バール氏

わが娘よ、誰れか思ふごと、  
翔りて汝れがいとけなき、  
語調を聞きつ、口つけつ、  
幸福の身となるを得む！  
とても叶はず故國の戸は、  
われに閉ざされあるものを……  
されどいつかは開かれむ、  
それまで、さらば、ベヤトリース！

(なほり)。

「イタリヤナ」律格とは四行のもの二つを合せて一對とし上半、下半ともに各二行目と三行目に韻をそろへ、また上半の第四行と下半の第四行はいづれも昂音を以つて終り西班牙語の作詩法に従ひ昂音の時は綴音の數一個を減す。上半下半ともに起句は没韻なり。



士なりき。著述家たりき。新聞記者たりき。種々の會の發起者たりき。また宗教上に於ては夙に羅馬教の陋説に厭きて合理的基督教を信仰し、德行高し。その一時官界に身を置きたる一事を除くときは、氏は智利國の福澤翁にして而かも詩人を兼ねたるの士といふべし。

氏の姓名はこれを詳記すればエドワルド、レガオン、テ、ラ、パウルラ、イ、ラスタルリヤ (Eduardo León de la Barra y Lasturia) にして、父は公使館書記官として十ヶ年間も巴里及倫敦に在勤し學者として相應に名を知られ、また、内祖母は女詩人として兄弟と共に世に知られたるマリヤ、メルセデス、ローペス、テ、并ヤセニヨール夫人なりき。而して氏が智利國の首府サンテイヤゴ市に生れ出でたるはわが天保十年、即、西曆千八百三十九年の二月九日なり。

氏は未だ東西も知らざる頃母を失ひ、九才の時ワルパライソにて父の死に遭ひ不幸なる孤兒となる。千八百五十一年より五十五年まではワルパライソの簡易商業學校の間に轉學して普通學を修め、特に英語に熟達して操縦意の如く、英語を用ひて。作詩をもなし得たりき、尋いで千八百五十六年にはサンテイヤゴ市に移り、國學院に入りて三ヶ年間勉學し、數學を能くせり。又性頗、文學を愛し、好むで小説、紀行、詩歌を讀み、詩作に長じ、千八百五十九年には文友會 (Círculo de Amigos de las Letras) の懸賞詩募集に應じ、『亞米利加の獨立に與ふるの歌』一篇を草して優等賞を受く。爾後氏はこの文友會、及文學、美術の研究を目的とせる美術學院 (Academia de Bellas Artes) の會員として大に文學の進歩を圖れり。

かくて國學院より卒業して齡漸く二十才に滿つる頃、この國學院及ワルパライソの陸軍學校、高等學校に聘せられて文學、歴史、數學を教授し、夙に學生の愛慕する所となれり。また教育者たるの餘暇

を以つて、或は新聞に投書し、雜誌に寄書し、或は教育會の書記となり、その副會長となり、或は職工學校を起し、後「輿論」を題する日刊新聞を創め、之れが主筆たりき。さればこの間氏は主として筆を散文に走らせ、あまり作詩を公にせざりしを以つて、その千八百六十六年に自作の重なる詩を編纂し「抒情詩」を題して出版せし時は、大に世人の注意を惹き、數週を出でずして悉皆之れを賣り盡せりといふ。

超はて千八百七十五年氏はサンテイヤゴ市に於いて開設せられたる萬國博覽會の書記長 (總裁) として、熱心且忠實にその職務を盡し、この際にも作詩によりて二大賞を得たり。その後は廣義に於ける教育者として、或は農業會議を發議開會せしめ、或は著書をなし、或はワルパライソ高等學校の長として之れを改良し、或は南米隨一と稱せらる、博物館を創始し、或は學術演說會を公開して人智の發達を圖り、或は消防組合を起さしむる等、その効蹟枚舉に遑あらず。就中秘露國との戰爭中は口筆に國民の元氣を鼓舞し、その効果頗、大なるものありしも、氏は大抵匿名にて筆を執りしを以つて戰勝後

政府が新聞記者に行賞したる時、氏は遂に顧みられずして止みぬ。さて氏は一時官界に入りて職を奉じたることあれども、極めて意志の強固なる性質なれば、よくその職責を守りて餘念なく、また代理公使としてウルグワイ共和国に駐劄せしことあれども、決して政海の渦中に入らず、度々國會に席を占めむことを勧められしも應ぜず、且如何に榮譽ある官職たりとも

自己の主義に反し、若くはその意に満たざるときは斷然拒絕して受けず。逸事極めて多し。氏はまた、後進の士を推擧するを喜び、氏の門下より出て、重要な地位を占むるに至りしもの頗多く一朝官界を辭してよりは、專、教育文事に従ひ、千八百八十五年には「サンテイヤゴ中央氣象調査會」



SUCH IS LIFE!

EDUARDO DE LA BARRA (Chileno.)

人世はかくこそ。

智利 エドワルド、デ、ラ、バールラ

『春は行きぬ。』

『行きぬとて、何かあらむ？』

また來む行末を思ひ

樂しみて我れ在らむ程は。』

『春はかへりぬ。』

『かへり來ぬるとや、こは何とせむ、

すぎこし方のみ思ひうかべ

かなしく生くる身にしあれば。』

（終）。

の名譽會員となり、翌八十六年には西班牙翰林院の通信學士に擧げられ、超えて八十七年には詩文競  
技會に寄稿して優等賞を得たり。こは同年五月二十一日フエテリコ、ウレラ氏の主唱を以つて國文學  
獎勵の爲に詩文の懸賞募集をなしたるものにして、詩題は「抒情詩西班牙詩人グスタダ、ア、ベツケル  
を模倣したる暗示的の詩的作物」なりき。氏の受賞詩は新作の詩と共に收めて氏の「智利雅歌」  
(Rimas Chilenas) の中に在り。この詩集は千八百九十年巴里の西班牙語書籍出版社たるガルニエ  
兄弟出版社より出だせる詩集、文庫中の一冊なり。



わが腕に抱きて、卿を締め殺さむほごに！  
妾をも殺し給ひね、卿の唇を、  
永久妾が唇に押しあてゝ！」

(わはり)

## PASIÓN.

EDUARDO DE LA BARRA (Chileno.)

## 熱情

智利

エドワルド、デ、ラ、バルラ

男「われを斬らむとや？……斫れ！ されど、

まづ汝れが手に接吻させよ、わが敵！

斬れ！……怖れず斬れ、心づよく！

いかに！ わが生命は汝がものならずや？

わが胸を開け、心臓を抜きとれ、

また苦痛を断て……否、苦痛はもたじ！

心臓！ 心臓！ よしや裂かるゝとも

乙女に戀ふることをな、忘れろ！

ひと思ひにわれを殺せ！……身を汝れに捧ぐ！」

女「あれ！ しづかに、もはやこのうへのたまうな！

戀もて、戀のみをもて卿を殺さむほごに！……」



## エネスエラ國の詩人アンドレース、ペーヨ。

西班牙語亞米利加に輩出せる詩人は、第十九世紀に於いては、革命獨立といへる滋雨の後、大さなく小さなく東西に起り南北に現はれ、その數、指を屈するに堪へざるが中に、衆を排して光清き曉の明星は實にアンドレース、ペーヨ (Andrés Bello) なり。かれは西班牙語亞米利加詩人の王プリンスといへる綽名を有し、攻馬クバのホセー、マリーヤ、エレテイヤと共に二大詩人といはれ、また時としてエクラドールのホセー、ホアキン、デ、オルメドを併せて三大詩人の稱あり。而かもかれはその隨二にして、ひさり言語を同じくする國々のみならず、用語を異にせる英米にまでもその文名を轟かせしなり。

アンドレース、ペーヨはわが安永五年即、西曆千七百八十年十一月三十日を以つてエネスエラの首府カラカスに生る。當時エネスエラは西班牙に屬せる一殖民地なりしを以つて、生時の國籍よりいへば、かれは西班牙國王の臣民たりしなり。されど讀者諸君の夙に知り給へる如くエネスエラは千八百十九年に西班牙の羈絆を脱して獨立したるコロムビヤ共和國の一部分なれば、その共和國(今のコロムビヤ共和國を意味せず)の公民なりしともいふべく、舊コロムビヤ共和國は、後、千八百三十年に至り、分離獨立したる三個の新共和國となり、エネスエラはその一なりしを以つて、エネスエラ共和國の民ともいふべく、後年智利共和國に歸化して遂に遺骸をこゝに埋めたるよりいへば、智利人とも稱し得べし、さはいへ、かれの故郷はカラカスなればかれがエネスエラ國の詩人たることは何人も異議を挾まざる所なり。

さてペーヨは故國獨立の際には、夙に起つて自由の旗下に奔走し、政府高等會議書記局の官長として力を國事に盡し、後日獨立主唱者の稱號を受けたる南米の英雄シモン、ボリーヴルが當時使節となりて歐洲に赴き外交上の任務に當るに際し、ペーヨは茲に公使館書記官となりてボリーヴルに隨行し、使節の一行、英京倫敦を去りてエネスエラに歸りし後も、ペーヨは獨、代理公使の資格を帯びて在任したり。蓋、ペーヨは學業拔群、品行また方正なりければ、いたくボリーヴルの愛顧する所となり、兩者の間、交情頗親密なるものありしに因る。

かくてペーヨが外交官として歐洲に留まりしは、千八百十年より二十八年まで前後十九年間の長日月にして、この間主として倫敦に在勤し、當時の有名なる政治家及文學者と交際し、閑あれば文友と相携へて、かの音に名高き英國博物館ボタニカル・ガーデンに至りて、専心勉學し、以つてその廣大なる智囊を充たせり。またかれは出版物を利用して、一面亞米利加諸邦の利益に供するを同時にまた歐洲諸國に向つて亞米利加大陸なる新國民の状態を知得せしむるの必要を感じ、千八百二十年にはその友人にして、また、同僚たるアントニヨ、ホヤー、デ、イリサルリAntonio de Herrera y Obispoが創始したる「亞米利加時論」の編輯を助けて文章を投寄せしを始めし。尋いで「亞米利加文庫」を出版し、千八百二十六年には「亞米利加倉庫」三巻を出せり。此等の出版物は政治、文學、批評、科學、歴史等に關する論説を含めるものなり。

千八百二十八年ペーヨは智利共和國に向つて亞米利加に歸來せり。思ふに智利國は大に文才の士を敬重し、之れを歡迎優待するの國柄なれば、學藝の忠僕を以つて自、任じたるペーヨの爲にはエネスエラよりも寧ろ、その姉妹國たる智利を以つて自己の天職を盡すに便なる舞臺なりと考へしものならむ。



兎も角、文界の一雄として既にその名を知られたるペーヨは大に智利人民の歡待する所となり、幾くもなくして外務省の一等書記官に任ぜられ、後、轉じて上院議員となり、また、大學総長に任ぜらる、かれは外交官として多年の経験を積み、國際法にも精通したりければ、屢々外務大臣の要位を與へられむとせしも遂に固辭してこれを受けざりき。然り、かれは學者なり、政海の士たるべからず。

ペーヨの如きはよく自己の天職を知るもの乎。  
實に然り。ペーヨは極めて博聞強記の大學者にして、凡そ學術といへば、あらゆる枝葉にわたりて涉獵追究せざるなく、歴史、國際法、文法、詩學、天文學等能く之れを精攻して、その堂奥を探險し、歌一章を草するも同一の容易を以つて數學の難題を解釋するの奇才なりき。而してこは單にかれの崇拜者が弄する過賞の諛辭にあらざることは、かれが左の數書を著せしを見て之れを知ることを得べし。茲に所謂ペーヨの著書とは「國際法原理」、「西班牙語文典」、「西班牙語の發音及長短原理」、「理會の理」、「西班牙語動詞時別變化の思想學的解析」、「民法草案」、「天地總論提要」の如き、即、是れなり。而して此等の書はわが國に於いて近來殊にその數多き書籍製造學者の手になれるが如き粗瀆杜撰の著述にあらずして、かれの文法書は動詞の時別變化を説明する點に於いて古來未發の學理を以つて之れを解説し、西班牙本國に於いてすら名著として大に行はれ、また、かれの「國際法原理」も遠く歐米の學者間に知られ、特に米人 Wheaton の如きは其の著書中にペーヨの著書を引き、且その原書は千八百四十七年、エネセラのカラカス市にて第二版を印行せり。  
ペーヨは千八百六十五年、即、わが慶應元年十月十五日を以つて逝けり。かれの名譽ある遺骸は智利國の土と化せり。

然れども、かれの作詩はかれの榮光を語るの紀念碑なり。ペーヨが「いすばの、あめりか」詩人中の第一位に坐する所以は、その詩句の正確、調の流暢、想の致爲高潔、愛國的精神に加ふるに温乎なる信仰、該博なる學識及純然たる亞米利加的特徴を以つてせるにあり。

千八百四十五年（わが弘化二年）、この大詩人の子として智利國の首都サンテイヤゴ市に生れたるエミリオ・ペーヨ (Emilio Bello) も、また、有名なる詩人の一なり。博士の稱號を有し、千八百六十四年に外務省の一局長となり、千八百六十九年には昇進して同省次官となり、千八百七十年ラウタロ州選出の豫備下院議員となる。



DIÁLOGO.

ANDRÉS BELLO (Venezolano)

56

對話

エネスエラ國 アンドレース、ベローヨ

ティルシ「汝れに戀せむ願望はあれど……」

クロリ女「なせに戀せぬ？」

ティルシ「告げてほしきか、その理由を？」

クロリ女「聞きたく無くて……」

ティルシ「さはれ、汝れ、もし腹立てむには……」

クロリ女「何いかるべき。」

ティルシ「よし／＼さらば、語り聞かせむ。」

クロリ女「告げませ聞かむ。」

ティルシ「汝れに戀せむ願望はあれど、

クロリよ、知れば……」

クロリ女「ティルシよ、わが身なにをなせしか？」

ティルシ「過ぐる日曜日<sup>ほか</sup>に他の戀人に、

57

「汝れは誓ひぬ幾世かはらぬと。」

クロリ女「そは事もなし、ならば君にも

同じ誓を立て、見せばや。」

(なほり)



## ボリ井ヤ國の詩人ベンハミーン、ブランコ氏

ボリ井ヤ國の詩人ベンハミーン、ブランコ氏！

この固有名詞は古くはホームー、グーツル、ダンテ、シエークスピヤ、セルグンテス、ゲーテ、近くは英のテニスン、佛のゾラ、獨のニツチエ、露のトルストイなどいへる雷名に耳を奪はれたる、わが大日本帝國の外國文學研究者に果して如何なる感を起こさしむるか？

ベンハミーン、ブランコ (Benjamin Blanco) なる姓名は未だ曾てわが國の活字を以つて印せられしことあらず。ボリ井ヤ共和國といへる名詞すら漸く地理學者の頭腦の一隅に微かにその影を止むるに過ぎざるならむ。

ボリ井ヤ共和國！そは何れに在りやま問ひ給ふ讀者もあるならむ。請ふ、南亞米利加洲の地圖を開きて、秘露、伯刺兒爾、バラグワイ、亞爾善丁、智利の五國をその境界せせる、海なき一小國を發見せられよ。これ即ボリ井ヤなり、而して中にはは水草を逐うて移住する蒙昧の土人國ならむこの想像を起す人もあらむ。

面積をいへば、わが北海道に九州を併せたるに等しく、人口をいへば臺灣の一孤島に及ばず。而かもその住民の四分の一は白人種、他の四分の一は混血人種にして兩者を合せてはじめて土人の數に匹敵す。如何にその國の幼稚、微小、且弱勢なるよ！

されどボリ井ヤは第十九世紀以來永く西班牙の領屬たりしを以つて、所謂上流社會は西班牙人の子孫より成り、征服者たるの權威を以つて被征服者たる土人に對し、西班牙固有の言語、宗教、風俗、習慣

を採用せしむ。千八百二十六年八月六日以後、一個獨立の立憲民主共和國として世界列國の一たるもの亦深く怪しむを須ひす。

然り、ボリ井ヤ國の土人は今尙「ケチュア」、「アイマラー」等の土語を用ふさいへども、公用語として最廣く通じ且勢力あるものは、かの羅丁語の遺幹より發芽したる優美流暢なる西班牙語なり。既に西班牙語を以つて國語とす、西班牙本國に高く尊ゆる文學の影がボリ井ヤの山間にも及び、この幼稚なる小國にも尙、文學と名くべきものを見るに至る、蓋、當然の理なり。故に假りに「ボリ井ヤ文學」と命名すべきものありせば、そのこれある所以はボリ井ヤの地に發生したる特殊の花を指すにあらずして、西班牙より移植せられたる文學の樹が、よくこの地に生長して實を結べりいふべきのみ。

ベンハミーン、ブランコ氏はかくの如くしてボリ井ヤの山地に結ばれたる果實の一なり。氏の故郷はコチャバムバといへる小都會にして、こゝに生れ出でしは、わが天保三年、即、西曆千八百三十二年の十二月二十九日のことなれば、氏は今や古稀の齡に達せるなり、父はヒーオ、ブランコ母はマクダレナ、ウンスエタ。故郷にて初等教育を受け、羅丁語の第一學期試験を了へたる後、千八百四十三年の暮、智利國に赴き、南米中米諸邦の書生を薰陶して有名なる英人ウチツキングスの私學校に入り、英、佛、伊の三國語を學び、千八百四十五年三月ボリ井ヤに歸り、その頃初めて設立せられたる中學に入り、後また故郷コチャバムバ市の「スクレ學院」に移りて羅丁語學を卒業す。

當時ボリ井ヤ國の首府はスクレ市なりしが千八百五十年氏は同市に遊學し、有名なる詩人にして今は故人となれるダニエール、カルチと共に法學の第一課程を修め、この良友を得てより共に詩作に熱心し、文學上氏は大にカルチの感化に浴せり。而して千八百五十二年には再、故郷に歸り、「コチャバムバ



評論」を發刊せる、文學會に加はり、友人にして且詩人たりし故ネストル、ガリンドと共に、この雑誌の編輯を助け、ガリンドと相駢びてコチャバムバの二大抒情詩人と稱せられき。かくて氏の家は富裕なりければ、著名の教師を招聘して、益々法學を研究し、千八百五十四年、齡二十三にして代言人の免許を受け、同時に文學に熱心し、前に揚げたる評論の外、種々の新聞雜誌に詩文を投寄し、且友人ドクトル、フリヨ、ロドリゲスと共同して「ドン、ペリコ」(小鸚鵡殿といふ意)と題する滑稽的の政治雜誌を發行し、輕妙なる諧謔と用語の純潔さを以つて大に高評を得たり。千八百六十四年以後氏はしばしば市會議員、大審院陪席判事の椅子を占め、千八百七十二、三、四年の國會には代議士として出席し、常によく其の職務をへくし、千八百七十六年には「サン、シモン大學」の視學官に任ぜられ、教育上に貢獻する所、頗大なりしを以つて、千八百八十六年の國會は名譽紀念章を贈りて氏の効勞を賞す。同大學の今日ある全く氏の盡力によれりといふ。

既に述べたる如く、ハリヤ國の現状は甚幼稚なるを以つて、文學によりて衣食せむことは到底不可ものなり。必しもその所作の多からざるを尤む可きにあらず。氏の作詩中にて比較的長篇大作はボトシ市の傳説を基礎として作り千八百五十二年を以つて公にしたる、「女人の復讐」と題せる物語の詩、及千八百五十七年に作したる「汚點なくして姪めるマリーヤ」と題する詩なれども、氏の特長は奇警なる滑稽と、用語の純粹なるにあり。新世界の文學者は概して純粹なる西班牙風の詩文を能くせざるが通弊なるに、氏が能くこの弊を脱して衆中に超然たるは西班牙本國文學者の賞讃して措かざる所なり。蓋、氏は好むで第十七世紀及近代の西班牙名家の作を熟讀し、殊にセルワンテス、ソルリヤを玩味

せりといへば、これによりて發明、悟得する所、多かりしならむ。



A UN CANARIO.  
BENJAMÍN BLANCO (Boliviano)

62

かなりやに

ボリビア國　ベンハミーン、ブランコ

活ける細微の水彩画、

歌よむ行脚の旅小鳥、

汝れが妙なる節曲はなご、

あまたるき味もたずして、

悲哀の音色帯びたるや？

さながら風のその様や、

さては感情のそれならで、

心不斷にさはがせて、

身をも不斷に動かせて、

狭きひとやになご住める？

心ひとつに飛びめぐり、

あはれも深きいのりもて、

胸のなぐさめ求むるや？

あるは自由の失せたるを、

思ひて絶えず泣けるにや？

小鳥よ、うたへ汝を育て、

いつくしむ手に口吻けよ。

また汝がすめるその如き、

幸福と快樂のひとやをば、

慕へる人もありと知れ。

細き手をもて小女子は、

味よき餌を汝れに飼ひ

渴けば水をあたへつゝ、

63



その一顧汝が戀となり、  
匂ひの呼吸に生命吹く。

またもや身をばもがきつゝ、

やまぬ願に大空と、

光と自由もとむるや？

少女の黒き目に芽ふく、

火と明を汝は見すや？

すばやく撃つよなが翼、

大氣を斬るよ翼もて。

青きみそらを汝は好くや？

少女の微笑は歡喜に、

開けし天空にあらざるか？

戀すてふ友やさしくも、

呼ばひ求めて汝は鳴くや？

汝がひとや護る美き少女、

汝れに向ひて『愛すぞ』と、

いへるうれしの聲聞けや。

にがき懊惱思ひすて、

この上もなき美き音もて、

新しき歌さらへよや。

なれが鈍はうるはしと、

なれがひとやはうつくしと。

遠き陸すぎ海こわて、

なれは幸福ある時に來ぬ。

げによやさしの小歌鳥、



心迷はすたをやめの、  
祭の壇に歌ふべく。

心地澄みゆく調もて、  
なが歌天空に揚げよかし。  
小鳥よ、汝れし歌ふとき、  
少女の頬は赤らかに、  
染め出さるれ、色よくも。

黄金の翼たゝめかし、  
珊瑚の嘴を開けかし。  
たぐふものなき汝が歌に、  
清き少女の顔ばせを、  
また美しう飾るべく。

かすかなる音の震動もて、  
おほぞら高く上りゆく、  
いともやさしの調こそ、  
人の心に禽鳥の、  
示す秘密と知るものを。

すてよ、よしなきその熱望、  
すてよ、甲斐なきその歎願。  
汝れがひとやぞうつくしき。  
まして汝がすむひとやにて、  
死なむとねがふ人もあれば。

心の不安を忘れよや、  
さてもゆかしの歌きけば、  
その美しくしき獄には、



と歌へるが如き實にその好例なるべし。  
父は里馬市に於いて開業せる可なり醫師なりければ、その子等の内にて、コルパンチヨと今一人を  
醫師たらしめむと心掛け、幼少の頃より既に詩人たるべき天性を發揮し初めしコルパンチヨも、自、そ  
の目的を定むるの年配にもあらず、専、父の命を奉じて學業を勵み、千八百四十三年には「コレヒヨ、

千八百六十三年（わが文久三年）瀛船「メヒコ」號の火災難破は、墨西哥駐劄の秘露公使にして且將來  
有望なりと評せられし詩人マヌエール、ニコラース、コルパンチヨ（Manuel Nicolás Corpancho）の  
光榮ある生命に不測の終末を與へき。コルパンチヨが里馬市に生れしは天保元年即、西曆千八百三十  
年十二月五日の事なれば、年を閱する僅に三十四にして早世せるなり。  
かれは不幸にして出生後、間もなく母を失ひ、慈母の愛を知らざる母なし兒の悲哀は、常にかれの心  
裏に宿り、しばしばこの感慨を作詩の上に顯せしを見る。かれの作劇「十字軍の詩人」の中に

あゝみなしこ！唯一たびも  
われは母の胸にねむらす、  
たいひさたびも我がひたひに  
母なるもの、燃ゆる接吻  
觸れしを知らぬかなしき身なり。  
さても幸なきわが星よ！

秘露國の詩人マヌエール、ニコラース、コルパンチヨ

なれひとりぞと思ふなど、  
すゝしき音もて歌へるを。

聲はりあげて歌へかし、  
汝れが身を置くその籠の、  
ひごをばやぶること勿れ。  
汝れがの如く失せはてし、  
寵はふたゞびかへらじよ！

（をほり）



テ、ラ、インテハンデンシヤ（獨立學校）といふに入學し、哲學及數學を修め、尙進んで物理學及文學の一端をも窺ふに至り。

この時まで乾燥無味なる學科の注入をうけて壓制せられ居たるコルパンチヨの天性は茲に初めてその本質を發展し、十四五才の一少年ながら早、同級の諸生に勝れて教師に舌を卷かしむる程の詩文を草し、夙に想像の富麗さ、思想の高絶を示せり。されば若、コルパンチヨにして單にその長さし且嗜好せる文學の一方にのみ熱心、身力を注がしめば思ふに於て文學のために寢食を忘るゝに至りしならむとは何人も想像し得る所なり。

されど父の意に反して醫學の研究を廢するに於ては、かれの爲すに忍びざる所なりしが、一方に於いては自己の好癖にまかせ、或は文學上の講義に耳を澄まし、或は西班牙文學者の名著に眼を瞞し、或は詩作を試みつゝ、而かも勉學を忽にせず、千八百四十六年にはいよいよ醫學の専門的研究に進入し、千八百五十一年に至りて開業免狀を受けき。

かく醫學を修むる傍、作詩を以つて閑を遣りたるコルパンチヨは、千八百四十七年までは誰れもこの天才あるを知るものなかりしが、その年「繪入亞米利加」といへる雜誌に、かれの「亞米利加に與ふるの歌」といへるが掲載せらるゝに及びて、大に世人の耳目を惹き、秘露の文界に一新詩星顯はれたりと傳へ初めぬ。

コルパンチヨは初陣の功名を得て益々力を文事に傾け、絶えずその作詩を里馬の新聞雜誌に寄せ、千八百四十八年には數名の文友と圖りて「里馬週刊雜誌」と題する文學専門の一雜誌を創始せり。されどこの種の出版物を冷遇する里馬市の事とて、この雜誌の永續覺束なく、遂に廢刊の不幸を見る

に至りしを以つて、コルパンチヨは更に他の方面に向ひて奮勵一番し、文學中、至難の評ある劇作に従事し、「十字軍の詩人」と題する一劇を作り、里馬市の「プリンシパール」劇場に於いて上場せしが、その時まで曾てあらざりしといふ大高評を博し、智利國サンテイヤゴの劇場にても之れを興行しき。

千八百五十一年は軍醫となりて秘露國の軍艦に乗組み、新なる海上生活の經驗を得、見聞を廣め、詩想を鍊り、想像を富まし、着想を新にし、學ぶ所尠からず。この新生涯の産み出せるかれの詩は續々その年及翌五十二年の「商業新聞」紙上に現はれき。

千八百五十二年コルパンチヨは官費を以つて歐洲に旅行す。こは政府この青年詩人をして學得する所あらしめむと欲し、或る取調をなさしむるを名義として派遣せしものなりといふ。而して政府の企圖せし所空しからず、かれは歐洲漫遊によりて大に天授の賦性を培養し、歸航の途次マガヤーン海峽（英音マゼラン）を經過するに際り、世界週航者の亡靈に現はれて詩想を誘發す、即、「マガヤーンネス」と題するかれの名作なれり。こは「アルテ、マヨール」と稱する十一言の八行詩、百三十一節より成り、總体千四十八行に達する長篇の詩にて、千八百五十三年七月里馬市にて公にせられき。

千八百五十四年かれの作詩を集めて一卷となせるもの「詩の試作」と題して巴里より出版せらる。こは一年前「海の微風」と題し里馬市にて出版したる詩集の改版とも見るべきものにして、卷首に詩人コルパンチヨの肖像を掲げ、當時大家の稱ありし歐米文士の序文、評論を載せ、紙數二百七十八頁あり。

千八百五十五年には「宗教軍士」と題する劇を作し、これ亦、西班牙語亞米利加の諸國にもて囃さ



LA ESTRELLA DE LA TARDE.

CANCIÓN.

MANUEL NICOLÁS CORPANCHO (Peruano)

73

夕の星

秘露國 マヌエール、ニコラース、コルパンチヨ

原詩は、唱歌にして譜にあはせうたふべきものなり。さればその律格のまゝに八言八行に譯しつ。原意はつとめて寫し出したるつもりなれども、原語の妙味を盡す能はざるは遺憾の極なり。

夕の面覆とれ、

ひかり弱き星、

さびしきわが身と、

思念あはすなる。

黙しつさまよひつ、

淋しげに出でよ、

われや孤兒の、

幸なき身のこと。

心霊は渴けり、

72

れて、諸方の劇場に演出せられ、千八百六十年には年齢満三十才にして墨西哥駐劄の公使に任ぜられ、六十三年まで在勤せしが、前に述べたる「メヒコ」號の罹災に可惜一命を失ひき。



悲哀の翼の、  
やさしき自然は、  
そが神を語る。

汝が道たざれば、  
行く先もやがて、  
同じわれらなり、  
星よ、相愛せむ。

運命がわれらに、  
延べたる憂愁には、  
たうとき同情の、  
くしきさづなあり。  
満天にたゞひとり、  
友の星もなく、  
すめる汝を見るは、

わが身の慰籍。

夕の白星！  
汝が温き光氣、  
われに愛情の、  
深思をもたらす。  
潔き巡禮處女、  
わが生の摸像よ、  
わが廢心もまた、  
さこそ墓に行け。



LA HAMACA DEL JARDIN.

CANCION.

MANUEL NICOLAS CORPANCHO (Peruano)

76

庭の吊床 (唱歌)

秘露園

マヌエール、ニコラース、コルパンチヨ

こは熱帯の地方に於ける涼しき黄昏の景を歌へるものなり。原詩は八言の「イタリヤナ」律格もて作りたれど、われは十一言八行に和譯を試みつ。

白き月は、はや澄める、  
額をあらはしたれば、  
來り、ねむれ、わが側に、  
庭の吊床の中に。

わが貴む大天使よ、

こゝに花を揺り過ぐる、

微風にこりまかれて、

さやけき戀夢み得む。

細流口吻くる林に、  
柔和もて洗はれし、

汝がさやけき小き眼を、  
見るはいかに嬉しきよ。

また吊床の揺るまゝ、

たゞよふ汝が頭髮を見、

すべての毛筋に戀の、

接吻を押し印すは。

日は西に落ちて夜の、  
挨拶は開けそめぬ。  
美女よ！きよき汝の靈も、  
開け、わが無垢の戀に。

さらば汝は繁れる木の、

枝蔭に戀知りそめ、

花の匂樂しむは、  
いかによきかを悟らむ。

77



南亞米利加、亞爾善丁共和國の詩人クラウティヨ、マメルト、クエンカ (Claudio Mamerto Cuenca) は西曆千八百十二年、即、わが文化九年を以つてアエノス、アイレス市に生まる。富裕にして徳望ある系圖正しき醫家の出にして大學及醫學校に入りて教育をうけたり。かれの家は父祖の代より醫學校の教授職をも兼ね襲ひ、三人の兄弟もまた、皆醫學を修めしが、就中、クラウティヨはその中の一人サルステイヤノと共に解剖術に長じ、兄弟四人いづれも篤實なる名醫を以つて目せられき。千八百三十九年には年二十七にして「交感」を論ずといへる有名なる生理學上の論文を提示して、醫學博士の學位と醫學教授の稱號を得、その翌年には解剖學の講座を受持ち、爾後十餘年間熱心に解剖、生理の二科を教授し、また、外科醫として名聲高かりき。かくてエントレ、リーヨス縣の知事ウルキーサなる者、時の獨裁官ロサスの暴政に反抗し、兵を起せし際、クエンカはアエノス、アイレス陸軍の大軍醫となり、かの有名なるモンテ、カセロスの戦争に一命を失へり。時に千八百五十二年、即、わが嘉永五年二月三日にして、薄命なる詩人の齡は僅に四十才なりき。かれは終生アエノス、アイレス縣の外に出でしこなきかりき。

クエンカは音吐清朗、辨舌爽にして、その講義は頗、愉快に傾聽せられ、生徒は常に講義時間の極めて短きを感じたり。また、文士としてのクエンカは亞爾善丁に於いて當時屈指の一詩人なりしことはその作物が明かに立證せる所なりと雖、不幸、中年にして不慮の死を迎へたるため、未だ、公にせられざりし詩、または、完結に至らざりし斷篇多く、既に公にせられたる詩の中にも不熟の欠點少からず、

### 亞爾善丁の詩人クエンカ

來れ！ためらふな。温風は、  
われらの額さすりつ、  
この心地よき運動は、  
つひさやけき睡眠假す。  
さて「チリモヨ」の香を愛で、  
芭蕉の下に身をのがれ、  
庭の吊床にねむる、  
汝れ見むと願ふなれば。

△運動とは吊床の揺るゝをいふ。

※「チリモヨ」といふ果實を結ぶ亞米利加の熱帶地方の樹の名なり。花の香また頗よし。

(をばり)



EL AFRICANO.

CANCIÓN.

CLAUDIO MAMERTO CUENCA (Argentino)

荒れにあれし阿弗利加の、  
 砂原にいとまづしく、  
 賤しきもゝの子となり、  
 生まれ出でぬる身ながら、  
 幼きわれの搖籃は、  
 よしや幸福あらじとて、  
 自由と満足かさずとは、  
 詛はざりしものを嗚呼！  
 年齒いまだ進まざるに、  
 世に欲しと思ふものは、

阿弗利加人 (唱歌)

亞爾善丁 クラウディヨ、マメルト、クエンカ

原詩は十一言の「イタリヤナ」律格にてつくれり。而して下に譯する所は原詩に合せて毎行十一言としたれども彼我言語の相異甚しきが故に單に八行を以つては原意の半をも寫す能はず。よつて延長して十四行を一節とするの止むなきに至れり。

天もし、かれに假すに年を以つてせば或は一世の大家たるを得しやも知るべからず。惜むらくは未だ成熟の期に達せざるに先ちて逝きぬ。或る傳記家の説によればその頃獨裁官ロサスは聊にても反抗の嫌疑ありと思はるゝ政敵ある時は直にその家宅を搜索せしめければ、クエンカの母は萬一の災禍を恐れてこの詩人の手に成れる一櫃の草稿及手記を燒棄てきこいへり。

クエンカの詩集が數卷に分たれて初めて出版せられしは千八百五十八年の頃なりといへどその巨細を知るに由なし。後千八百八十九年、即、わが明治二十二年に佛國巴里のガルニエ兄弟出版社より詩集「文庫」の一として出版せるものは一卷の中形美本にして紙數四百八頁より成り全部を二部に區分して前篇には短篇の詩三十九章を集め、後篇には「この迷」(Delirio del Corazón)と題する長篇の物語詩を収め、且卷首に精刻木版の肖像畫を加へたり。



残りなく奪ひとられ、  
異邦に運ばれ来て、  
虐待うくる奴隷の、  
苦痛いかで忍ばむ！

野心宿らず憂苦すらも、  
餘所に見捨てしあばらや、  
いといぶせく見ながら、  
しづけき藁屋根のした、  
平和と親情の棲家に、  
雨露安らかにしのぎて、  
暮らし居ける我れなれど、  
今はなつかしの故國を、  
神々や愛もろとも、  
遠くへだて泣きになく。

泣けごさげべご誰れとて、  
耳をかす人はあらず、  
誰れとてわが不幸、  
和げむとも望まず。

この身阿弗利加にありて、  
自由をたのしみける時、  
めぐみふかきたらちねの、  
慰籍となりひたすら、  
母の胸にいだかれて、  
死なむとのみ願ひしも、  
かなはぬ身の甲斐なしや。  
あゝ最早むかしのごと、  
その腕にやはらかく、  
抱きしめられざるのみか、



戀しき膝にもたれて、  
 わが不幸に母の、  
 災禍あはせどもく、  
 なげくべきよすがもなし！

過ぎ去りぬる味甘き、  
 幸福あるよろこびの時、  
 あたゝかなる心もて、  
 愛されつまた愛しつ、  
 若き程は樂しみて、  
 日をくらし老ひなむ術、  
 知りし身もあはれ今日は、  
 夜深く心しづかに、  
 愁はむとするその時、  
 わが恐怖は目をさまし、

胸をかき亂し狂ふ……  
 あゝかなし！ 恩愛のため、  
 息つくわれをば見たる、  
 寢床いかで清からむ！

よき運命に媚びられ、  
 へつらはれたるのみかは、  
 人並の幸福をも、  
 かゝさずもちたりしとき、  
 故國と友等の中間より、  
 怖れにふるへし我れを、  
 つれなくも奪ひとりぬ。  
 かなしさ押へて聞けば、  
 親しめるものゝ口は、  
 天の憐愍祈りぬ。



あゝ、されど、われはもはや、  
 歎き得ざりき、其には！  
 苦痛に死ぬることも、  
 得せざりき、告別の時！

愛なく、また自由なく、  
 希望もなく、いと深き、  
 鬱憤に身をば蝕はれて、  
 この世に残れるものは、  
 何もあらず、わが爲に、  
 たいにがく重荷負ひて、  
 永らへむことの外は！……  
 いざゝらばわが故郷！  
 いざさらばわが幼く、  
 若く幸福ありしころの、

味あまき、胸の紀念！  
 もはや、世に在らむとは、  
 露ほども願はぬ身の、  
 最後の告別受けよや。

(なほり)



## 墨國詩人イグナシヨ、ロドリゲス、ガルブーン

げに詩人パイロンのいへりし如く、天才は薄運の命數にして、名譽と榮光は幸福でふものを犠牲としたる貴き價を以つて購はるゝものなり。パイロンは己が一身を以つてこの大豫言を照應せしめしにあらずや。

墨西哥の不幸なる一天才イグナシヨ、ロドリゲス、ガルブーン (Ignacio Rodriguez Galvan) は、わが文化十三年、即、西曆千八百十六年三月二十二日を以つてフイサエーカ (Hizayuca) といへる一邑に生る。かれの生家は初め、富裕なる生活に慣れたる家柄なりけれど、當時頻年踵を接して諸所に蜂起せる謀叛内亂の災禍に遭ひ、イグナシヨが生れ落ちたる頃は、既に零落して見る影もなき有様なりければ、かれは貧家の兒として必迫と欲乏の間に幼少の時代を経過し、七八才の頃よりは早くも手荒き農業の手助けなどして具に辛酸を嘗め、當時は名を後世に揚げむとの野心もなければ、名譽を得むこの大望もなく、後日かれが達し得たる榮光は夢にだも見るこゝなくして、満十ヶ年を田舎に埋もれて暮しぬ。

一家の貧窮は年齢漸く十一才なる一少年イグナシヨを逐ひてなつかしき故郷の空より出せり。かれは家計を助けむがため、父母の膝下を離れて一人の友もなき首府メキシコ市に出て、書肆を業とせざる伯父マリヤノ、ガルブーン、リエラの店に奉公せり。あゝ冷酷なる貧困よ！爾も時として人類の幸福を増進せしむるに與つて力あるが如く見ゆ。もし爾無かりせば吾人は遂にこのロドリゲス、ガルブーンといへる一詩人を有せざりしならむ。

邊隅の一農夫として果つべかりしガルブーンが書肆の丁稚奉公をなせりとの一事は、全世界の歴史上には何等影響する所なからむ。されど墨西哥國の文學史上には、正に特筆大書すべき大事件なり日々百千の書籍に接觸して之れを取扱ひたるガルブーンは、何時もなく書背の題號より書中の挿畫に眼を移し、挿畫より轉じて説明の幾行を覗く間に、知らずく書籍の効能を會得し、學問の妙味を悟り、この時までかれの心の底深く熟睡せりし慾望は、今や驟然として眼を覺まし、抑へむとするも抑へ難きに至れり。是に於いて一人一日の師友なきに拘らず、只管書籍に親しみ、古人に師事し、閑を偷むでは視線を透して入り来る書中の財寶を集め、また時に巻を伏せて咀嚼熟考し、店頭の手帳を取つて腹中に藏すること幾千巻、千辛萬苦獨學の末、智識大に開け、文筆また凡ならず、遂に文學的作物にまでも自己の學力を試みむとするに至りぬ。而して文壇に於ける大膽なるかれの畫策は幸に能く成效して千八百三十五年及その翌年には試作の詩などを公にし、齡二十を越ゆる青年詩人の心中には熱烈火の如き詩想伏在し、他日大に爲す有るの天才なることを示し初めぬ。

あゝ詩人ガルブーン！爾は遂に天才の詩人なり。爾の詩は多くの欠點を有し、詩學上最必要なる昂音アセントの位置正しからず、時に綴音の數に過不及あり、時に文法上の誤謬あり、殊に爾が初年の作「永別」の一篇の如きは八節三十二行中六行は詩句をなすこと評せらる。あゝガルブーンよ。こは悲しくも事實なり。されど學校に入らず、師に就かざりし苦心獨學の士には免れ難き所ならむ。世を早くしたる爾には之れを訂正するの時間なかりしならむ。心安かれ、詩人よ。吾人は慢りに人の非のみを擧げて長を没するものにあらざれば。あゝ風涼しき海邊に立つて園丁の技術を加へざる磯馴松の自然の妙趣を賞するはいかに善からずや。その枝ぶりの園藝術に適はざるを忘れて。



さてガルブーンはその後益々文藝を研ぎ、職業の餘暇には日夜心を潜めて詩作に従事し、或は佛伊の名家の作詩を翻譯し、また「墨西哥來遊者ムーニョス」と題する劇詩ドラマをも作せり。こは千八百三十八年九月二十七日の夜メキシコ府の劇場に於いて初めて上演せしが頗喝采を博せりといふ。かくてガルブーンは深く學ぶに従つて益々智識に飢ひ、名を知らるゝに従つて益々名譽に渴き、熱心日増しにその度を高めて、今は職業の傍執筆する位には心あきたらず、遂に千八百四十年には斷然心を決して十三ヶ年間奉公せし書店を辭し、専心勉學と詩作に耽り又原書によりて羅丁文學の眞味を樂まむとの目的を以つて一心不亂に羅丁語を學び、幾くもなくして羅馬詩人の最難澁なる詩句をも見事に翻譯し得るまでに上達せり。

翌千八百四十一年十一月かれば有名なる「副王の嬖臣」と題する劇詩を作り上げ、一通の書翰を添へて青年文士の熱心なる庇護者と稱せられたるフナール將軍に贈呈せり。而して將軍はその頃軍務大臣の椅子を占め居りしが、ガルブーンの作を讀むで大にその才を珍とし、豫れて、ガルブーンが外國に旅行して具に人情風俗を觀察し詩想を練らむと希へる願望を満足せしむるの目的を以つて、大にこの青年詩人の爲に奔走し、遂にその推薦によりて外交官の末班に列せしめたり。

何等の喜悅か之れに加ふべき、ガルブーンの將來には大成効と大名譽、大榮光の外は何物もあらざりしを、惜い哉！嫉妬の王たる「死」はガルブーンとかれの甘き夢との間に大手を擡げて立塞がり、遂に有望の青年詩人を捉へて冷なる墓中に投げ入れたり。然り詩人ガルブーンはその翌千八百四十二年ゴラクルス港より出航して玖馬嶋のアバナに赴き、更にゴラクルス、ニュー、オーレンヤンを経て玖馬嶋のアバナに航せしが、中途にして熱病に罹り、六月二十五日といふに友なき異郷の風に消ぬ。

年はこれわが天保十三年、詩人の齡二十有七。

あゝ墨西哥！太平洋は廣げれども而かもわが日本とは對岸の隣邦なり。遠き他人とみな思ひなせそ。こは北米合衆國よりも一層古き日本の友邦なり。こは徳川家康が好む修したる國なり、支倉六右衛門の一行が羅馬に使せしとき往復ともに經過したる地なり。而してガルブーンは日本の友邦たる墨西哥の子なり。逆縁なりとも一遍の回向を惜まざるは僧の奇特にあらずや。ガルブーンの死を吊ふ、豈わが國の文士の情ならずとせむや。讀者諸君、請ふ、吾人をしてかれが死後に遺せる詩を誦して懇にその靈魂を慰めしめよ！！



¡ ADIOS !

IGNACIO RODRIGUEZ GALVAN (Mexicano)

92

永 別

墨 國

イグナシヨ、ロドリゲス、ガルブーン

こはガルブーンが初年の作にて殊に句調整はずとの定評あるものなれども、翻譯はその意をとりて形に拘らざるが故に茲に出しぬ。

つれなき運命は汝れを見ざらしむ、

乙女よ、われいま、汝を失はむとす、

他人わがたからを弄ばむあいだ、

われはいとふかき、なげきに沈まむ。

いとやうるはしき汝れがその容顔も、

雪なすうなじもふた、び見ざらむ、

かゝやけるなが眼、起居とふるまひ、

見まじよ、またとは、汝が聲も聞かじ。

わが血の管をばもやせし汝が聲、

わが熱き思ひを煽ふりしなが聲、

こゝろ迷はするながその微笑、

いかにこの身をば狂はせたりしよ。

ふたでゝろの友、なれに近づきて、

みまもりつ媚びつ、よろこばむあいだ、

あはれなり、われは火のごと猛りて、

憎みと怒りに身は溶くるれもひ。

とはいへ、ゆるせや、なれ、たうとき乙女、

神々しき乙女よわがつみをゆるせ、

つれなくわが戀、よし、いやしむとも、

胸にはかはらず、汝れをこそ慕へ。

93



グレゴリオ、グティエルレス、ゴンサーレス (Gregorio Gutierrez Gonzalez) はフリオ、アルボレタ  
 と僅に十年間相前後してコロムビヤ國の天に現はれたる一詩星なり。わが文政九年即、千八百二十六  
 年五月九日をもつてアンティオキヤ州の僻邑セハ、テル、タムボに生る。父はホセー、イグナシヨ、  
 グティエルレス、母はイネース、ゴンサーレス。  
 詩人グティエルレスの幼時は格別平人のと異りたる所なく、夙に父母の膝下を離れて、アンティオキ  
 ヤ市の學セミナリヨ校に遊び、更に首府ボゴターに移りて「セミナリヨ、デ、ラ、アルキテイヨ―セシス」  
 といへる學校に入りて文學及哲學を修め、後また、國立大學たる「サン、バントロメー」學院に轉じ  
 て法學を研究し、博士の學位をうけ、且高等法院代言人の免許を得たるは千八百四十七年かれが二十  
 二歳の時にてありき。  
 グティエルレスの受けたる教育はあまり文學的のものならざりしことは、前に述べたるが如くなれど  
 も、かれの母は大に文學癖ある家系の出なりければ、遺傳的に文學を嗜好するの賦性を有し、かつ、  
 かれが學生としてボゴター市に滞在中、かれを世話したる從兄イトコのフアン、デ、テイヨス、マランサス  
 といへるは、當時屈指の政治家にして、文學にも達せる名士なりければ、その客室は常に政治と文學  
 の會談場たる觀ありき。従つて若き學生がこの名士の家庭に於いて受けたる感化も、また、大にかれ

コロムビヤ國の詩人

グレゴリオ、グティエルレス、ゴンサーレス。

わが口は汝れが、愛らしき名をよび、  
 オシヤンの琴のごと、わが耳にひびく、  
 思ひうかぶるよ、やさし汝が聲音、  
 苦しめるわれに、慰藉あたへて。

オ、ゆかしのローラ、なれが面影は、  
 永久にあらむ、胸に彫られて、  
 世にもいまはしき仇なる思ひも、  
 かはらぬ眞情を消さむによしなく。

さはれ、さまたげじ、郷等の幸福は、  
 禍まがらなれ二人がうへには、  
 きらはれし我れは、棄てられしわれは、  
 かなしみに朽ちむ、さらば、ローラ、さらば！

(むはり)



の詩想を發達せしめしならむ。

かれが「サン、バルトロメー」學院に在りしは、千八百四十五年より四十七年までの間に於て、常に文學を愛せる友人と會合し、或は詩文を闘はせ、或はゴネスエラ西班牙などの詩人の作物、小説などを研究し、就中グテイエルネスは學才衆に超え、特に作詩はかれに比肩するものなりし。またかれは温雅なる少年として同窓の友人間に愛せられしが、一たびテミルテといへる一少女を見て大に戀慕し、その成らざるを苦悶して、遂に病に罹り、一時故山に起臥するの止むを得ざるに至りき。されど新鮮なる故郷の空氣と、慈母の温暖なる慰藉は、よくかれをして心身の元氣を恢復せしめしを以つて數ヶ月の後、かれは再、學院に歸來して専心法學を研究せり。

さて千八百四十八年に業を卒へ、錦を飾りてアンテイオキヤ市に歸りてよりは、若干年の間、一家の訴訟事件に従事して亦、餘念なく、千八百五十年にはフリヤナ、イササ嬢と結婚し、幸福なる家庭の生涯に入り、千八百五十八年までは全々詩神に遠かりてまた、歌はざりき。かれが區裁判所、地方裁判所の判事となり、國民會議の代議員となり、また國會議員となりしはこの間のことなり。

その政治社會に於いて漸く重要な位を占むるに至るや、かれが曩日有望なる青年詩人たりしことを記憶せる友人等、何が故に歌ふことを止めたるかを問へり。而してこの頃かれが「何故われは歌はぬか？」と題する一詩を以つて、ドミンゴ、デイヤス、グラナドスに答へたることは實にかれの傳記を飾る逸事の一なり。

政治家としてのグテイエルネスは先天的に保守主義の人なりき。されば千八百六十年より六十二年にかけての革命には保守黨の一員として、諸所の戰場に勇氣を示し、越えて千八百六十四年一月の地方

動亂の際にもアスメホの戰爭に大効あり。衆人かれを推して州の臨時知事たらしめむせしも、固辭してうけず。自、その友バドロ、ホタ、ベルリヨを薦めて之れに當らしめき。

かくてグテイエルネスは千八百六十年より六十二年までの革命の際に殆、家産を傾け盡くして、最早紳士の体面を保つ能はざるに至りしを以つて、メサといへる山間の僻地に退き殖産業に従事せし事も事意の如くならず、加ふるに蟲害、熱病のために苦められしを以つて、友人の勸告を納れてソソロン邑に移り住し、尋いでアンテイオキヤ地方裁判所の判事となり、千八百六十八年に至りて退職せり。これかれが公職に身を置くの最後にてありき。

一たび幸運のために見離されて、零落の谷に陥りたる薄命の詩人は復、再、起つことを得ざりき。千八百六十九年には家族のために麵包を買はむとて、自己の作詩を集め、メデイーンの小部より出版せしむ、その得る所は少許にして、數日を支へたるに過ぎず。困難加はると同時に氣力は衰へ、貧苦増すにつれて希望は滅滅し、千八百七十一年夏に人手に渡りたる地所の代金を取立てむとて首府ボゴターに出でしも、他の代人既に之れを請取りたる後にて亦如何ともすべき様なく、窮極してかれは故郷に歸るべき旅費すら有せざりき。

詩人グテイエルネスの末路はかくの如く悲惨なりき。然りかれは貧苦の犠牲となり、高齡の慈母、最愛の妻、五男三女に涙を流さしめて逝けり。時に千八百七十二年七月六日午後六時、即、わが明治五年のこゝにして享年四十有七なりき。



EN EL CIMENTARIO DE SONSON  
GREGORIO GUTIÉRREZ GONZÁLEZ (Colombiano)

98

ソンソンの墓地にて

コロンビア國

グレゴリオ、グティエレス、ゴンサーレス

此所には休むにあらず、

また眠るにあらず、

『死ぬるとは眠るにても、

夢みるにてもなし』

此所にはたゞ生氣なき、

塵埃のみぞ慰ふ。

さいはむには、靈魂は……

なほ遠方にてを追へ。

さはれ亡き者の跡を、

來り吊へかし、

凡そ祈願のためには、

祭する壇あり、

かくて信と祈禱とは、  
常に燃ゆる如き、  
慰籍に會ひ、夢にも、  
いつはりを見出さず。

(をほり)

99



¿POR QUÉ NO CANTO?  
Á DOMINGO DÍAZ GRANADOS  
GREGORIO GUTIÉRREZ GONZÁLEZ (Colombiano)

100

何故われは歌はぬか?

コロムビヤ國

グレゴリヨ、グティエルレス、ゴンサーレス

詩人ゴンサーレス幸福なる家庭の快樂に耽りて作詩をなさざると凡十年の後、その理由を詩に作りてドミンゴ、デイヤス、クラナドスに送れるもの。千八百五十八年、かれが三十三才の時の作なり。

何故われは歌はぬか?

日、東天にのぞくとき

やさし聲もて歌をあげ

愛のぬくみの暖き

あけぼの、光よろこびて

歌へる鳩を君見ざりしか?

また、日のぼりて中天に

あつき光をはなつとき

疲れて愛の翅をば

101

快樂もとめて迷ひ出で

初戀心に萌へ來れば

あはれ快樂に氣はのぼせ

一つの唱歌の調もて

誰れしも若き時にこそ

歌ふなりけれ、あどけなき

齡われらをすゝむれば

心のうちに葬りて

秘むべきことをもはからず

分別もなう世に示すなり。

しづかにおのが巢の上に

延べて聲なく音もなき

幸ある鳩を君見ざりしか?



われこの幸を歌ふなり  
われこの幸を蒸し散らすなり。

されどその後……吾人は

こよなき苦痛かくすごと

快樂を胸につゝむなり

歎くためには閑寂の

中こそよけれ幸もまた

人目につかぬ暗所ぞよき！

たゞ暗所のうちのみに

心は安く世を捨てゝ

やすみ所を樂まむ

たゞ隠微たるうちにのみ

『幸福』てふものはねんごろに

絶えず愛願をかくるなりけり。

かざり氣もなく温和に

咲く薯の花君知るか？

わが唇の稱ぶ幸福は

その花にこそ似たりけれ

日蔭に生へてそだてごも

日の光にはうちしほみつゝ。

初戀胸にあたゝかく

芽ざすと思ふ人こそは

歌ふべきなれ傷うけて

苦みなげく心また

歌ふべきなり誘發の

死なすあるべきものにてあらば。



われらの愛づる名一つを  
足に彫られし玉琴は

調を高く大空に

めぐべきなりや、さもなくば

あらゆる糸を永久に

うち断たるべきものにてあれば。

とはいへ力もなき聲の

弱り枯れはてたらむとき

歌ふは悲しく響かなむ……!

とはいへ、心こゝになく

唱歌は氣中に迷ふとき

歌ふはいかに悲しかるらむ!

戀にやつれし歌人の

聲を近くに聞くときは

歌ふはいかに悲しきよ!

われらの聲をその唱歌に

合せかねたるちからなき

時に歌ふはいかに悲しき!

されども君は歌ふべし

君の調は感慨に

今一しほの高貴増す

その易らかにおとなしき

詩の句は君の名と琴を

不滅たらせむ、君歌ふべし。

歌へや、君の味美き

唱歌は音なく名もあらぬ



わが隠遁を鳩のごと

歌へや、君をほめそやす

長き反響の音にのみ

聲はとられむ！……君歌ふべし。

さはれ我がごと、君はしも

君みづからを忘却の

うちに葬ることを得じ

そは君の琴音も妙に

絶ゆる間もなくいづこにも

響きわたたりつ、大氣みだせば。

君がためには陰影なし

君の天才かややかむ

大螢の光はなつごと

光を避けて光もち

あさりてたどる暗影くを

照らしながらに進み行かなむ

(をほり)



エネスエラの詩人ドミンゴ、ラモーン、  
エルナンデス

近代のエネスエラ詩人の中にて最通俗の名を得たるはドミンゴ、ラモーン、エルナンデス (Domingo Ramón Hernández) なり。

かれの父はイグナシヨ、エヴリスト、エルナンデス、イ、プラエスと呼べる西班牙嵐の嚴肅方正なる人にして、母國西班牙に對し勤王精忠の士なりければ、その頃、獨立民主を唱道せる多數人民の増悪を受け、遂に放逐の災に罹り、首府カラカス市を去つて流寓す。イグナシヨがクラサオにてマリーヤ・マテイヤス、クルエロ嬢と結婚せしは即、この流寓中のことにして、それより新郎新婦手を携へて西印度諸島をさまよひき。

かくて千八百二十九年歸國の許を得たれども、こは單に名ばかりの救免にて歸着早々直に暗獄に投ぜられて幽囚の身となりぬ。詩人ドミンゴが憂苦にやつれ果てたる母の胎内より出て來りしは、即、この年八月四日の事にして、わが文政十二年に相當す。

さればかれが胎内にあるの時より受けたる千難萬難は延いて身體の虛弱となり、精神の悲鬱となり、その作詩をして悲哀の調を高くしめたる亦何ぞ怪むに足らむ。傳へいふ、幼兒の時に於けるドミンゴは或は夜中無人の境に迷ひ、またしばしば墓地に出入徘徊して専、寂寥を友とせりき。既にして小學時代に入りては當時の難澁至極なる注入的教育に腦漿をしぼりしも、幸に家庭の教育宜

しきを得て、こゝに第二の天性を涵養せり。即、父は嚴正なる教訓を以つて兒を示導し、母は性來、音樂詩歌の嗜好ありて、只管優美の感念を培養し、また、ドミンゴの爲には伯母に當るコンセプシヨーン、エルナンデス、デ、バイバ夫人も寡居してかれの家庭に在りければ、その長とせる詩學の傳授を怠らざりきドミンゴ九才の時同じ學校に通へる一少女の美をほめて

薔薇もて飾れるうつくしの  
汝が頭髮にぞ戯むる、  
森のてふく

青野の微風。

と歌へりといふ、また、故なきにあらざるべし。

かくて中學を卒へ大學に入りて佛蘭西語を修め、又別に師を求めて音樂を學び、千八百五十二年即年齒二十四歳の時カラカス市の一大商店に入りしも、ドミンゴの性質は到底商業に適すべくもあらず、自、その成効の學束なきを悟りてや、翌年に至り、遂に店員の務を辭し、専心美術を研磨せりき。かれは詩と音樂を以つて世に立つの人となり、その長所は寧、作詩にありしも、家計の上よりいへば音樂師こそその本職なりけれ。

このドミンゴ、ラモーン、エルナンデスの詩集は「花と涙」と題し、千八百七十八年を以つて巴里のガルニエー兄弟出版社より出版し、千八百八十九年に再版を出せしが、その詩集の卷首に加へたる略傳には千八百六十一年に登記局長に任ぜられしが、あまりに過度に身心を勞するの習慣ありて、かれは再、幼時の虚弱に歸れり云々と記述しその後の消息を傳へず。記者附けていふ。記者寡聞にして未だ



EL SUEÑO DE BLANCA  
NIÑA DE 5 AÑOS QUE, DORMIDA, QUEDÓ  
MUERTA  
DOMINGO RAMÓN HERNÁNDEZ (Venezolano)

111

『星は黄金と金剛石の  
粉よ、そこには天つ使  
薔薇の足をつくるなり  
われは迷ひて、刺みつる  
土の敷物踏むなるを。』

かく夢みけりブランカは  
やがて目さめてそが足の  
かやく星の敷物を  
ふまへてあるを見たりけり……  
幸ある夢や天ならで  
外には覺めむやうもなき！

(をほり)

安眠の中に世を去  
りける五歳の幼女

ブランカの夢

ゴネスエラ國

ドミンゴ、ラモーン、エルナーンデス

110

この詩人の詳傳に接する能はず。恐らくは最早世を去りたるならむと思へど、その年月をさへ詳にせず。更に後日を期して補正する所あらむとす。



玖馬の詩人ホセー、マリーヤ、エレディヤ

ホセー、マリーヤ、エレディヤ (Jose Maria Heredia) は千八百三年、即、わが享和三年、十二月三十一日を以つて玖馬のサンテイヤゴ市に生れ、三十七歳にして墨西哥のトルカ市に病歿す。時に千八百三十九年五月十二日にしてわが天保十年に當る。

父は裁判官として剛直の聞ありしホセー、フランシスコ、デ、エレディヤ、イ、ミエセス母はメルセーデス、デ、エレディヤ、イ、カムプサノにして兩親共に玖馬島の殖民史に有名なるかのドン、ペドロ、デ、エレディヤより出で、サント、ドミンゴ島の西班牙領分に生れしも、その地一時佛國の領有となりしとき、去つて玖馬に移住しき。

詩人エレディヤは父に就きて初等教育を受けしも、千八百十年、即、わが八歳の時、父はエネスエラのカラカス法院の判官となり、任に赴き、母に伴はれてサント、ドミンゴ島に移りたるを以つて、茲に伯父一人の聖經學者を師として學業を修め、俊秀人を驚かすものありき。超けて千八百十二年、わが父の任所カラカスに移り、その地の大學にて羅丁語及哲學を究め、千八百十七年には玖馬島に歸り、首府アパナに於いて法學得業生の稱號を授與せらる。時に年齢僅に十五なり。

千八百十九年、わがレズビヤさよべる意中の少女を思ひ殘して再、なつかしき玖馬より航して墨西哥に赴き、不幸にも其處にて慈父に死に別かれ、翌年悄然として故郷に歸り、少女レズビヤの既に競争者の手中に落ちたるを見て、益々その痛苦の尖頭を鋭利ならしめき。

既にしてわがレズビヤさよべる意中の少女を思ひ殘して再、なつかしき玖馬より航して墨西哥に赴き、不幸にも其處にて慈父に死に別かれ、翌年悄然として故郷に歸り、少女レズビヤの既に競争者の手中に落ちたるを見て、益々その痛苦の尖頭を鋭利ならしめき。

入りて法律事務を實習し、傍、文事に熱中せり。而して當時わがレズビヤさよべる意中の少女を思ひ殘して再、なつかしき玖馬より航して墨西哥に赴き、不幸にも其處にて慈父に死に別かれ、翌年悄然として故郷に歸り、少女レズビヤの既に競争者の手中に落ちたるを見て、益々その痛苦の尖頭を鋭利ならしめき。

入りて法律事務を實習し、傍、文事に熱中せり。而して當時わがレズビヤさよべる意中の少女を思ひ殘して再、なつかしき玖馬より航して墨西哥に赴き、不幸にも其處にて慈父に死に別かれ、翌年悄然として故郷に歸り、少女レズビヤの既に競争者の手中に落ちたるを見て、益々その痛苦の尖頭を鋭利ならしめき。

入りて法律事務を實習し、傍、文事に熱中せり。而して當時わがレズビヤさよべる意中の少女を思ひ殘して再、なつかしき玖馬より航して墨西哥に赴き、不幸にも其處にて慈父に死に別かれ、翌年悄然として故郷に歸り、少女レズビヤの既に競争者の手中に落ちたるを見て、益々その痛苦の尖頭を鋭利ならしめき。

入りて法律事務を實習し、傍、文事に熱中せり。而して當時わがレズビヤさよべる意中の少女を思ひ殘して再、なつかしき玖馬より航して墨西哥に赴き、不幸にも其處にて慈父に死に別かれ、翌年悄然として故郷に歸り、少女レズビヤの既に競争者の手中に落ちたるを見て、益々その痛苦の尖頭を鋭利ならしめき。

入りて法律事務を實習し、傍、文事に熱中せり。而して當時わがレズビヤさよべる意中の少女を思ひ殘して再、なつかしき玖馬より航して墨西哥に赴き、不幸にも其處にて慈父に死に別かれ、翌年悄然として故郷に歸り、少女レズビヤの既に競争者の手中に落ちたるを見て、益々その痛苦の尖頭を鋭利ならしめき。

入りて法律事務を實習し、傍、文事に熱中せり。而して當時わがレズビヤさよべる意中の少女を思ひ殘して再、なつかしき玖馬より航して墨西哥に赴き、不幸にも其處にて慈父に死に別かれ、翌年悄然として故郷に歸り、少女レズビヤの既に競争者の手中に落ちたるを見て、益々その痛苦の尖頭を鋭利ならしめき。

入りて法律事務を實習し、傍、文事に熱中せり。而して當時わがレズビヤさよべる意中の少女を思ひ殘して再、なつかしき玖馬より航して墨西哥に赴き、不幸にも其處にて慈父に死に別かれ、翌年悄然として故郷に歸り、少女レズビヤの既に競争者の手中に落ちたるを見て、益々その痛苦の尖頭を鋭利ならしめき。

入りて法律事務を實習し、傍、文事に熱中せり。而して當時わがレズビヤさよべる意中の少女を思ひ殘して再、なつかしき玖馬より航して墨西哥に赴き、不幸にも其處にて慈父に死に別かれ、翌年悄然として故郷に歸り、少女レズビヤの既に競争者の手中に落ちたるを見て、益々その痛苦の尖頭を鋭利ならしめき。

入りて法律事務を實習し、傍、文事に熱中せり。而して當時わがレズビヤさよべる意中の少女を思ひ殘して再、なつかしき玖馬より航して墨西哥に赴き、不幸にも其處にて慈父に死に別かれ、翌年悄然として故郷に歸り、少女レズビヤの既に競争者の手中に落ちたるを見て、益々その痛苦の尖頭を鋭利ならしめき。



軍サンタ、アナの革命に加擔して自、戰場にも臨み、後、將軍の率ゆる革命黨より離退せり。これ、即、エレテイアの變節の第一段なりき。

流寓の寂寥を嘗め、内亂の禍害を目撃したる詩人エレテイアは、革命の失敗と、民主政治の欠點を見て、沈思せり。躊躇せり。逡巡せり。戀郷の念は益々勢を得るご同時に、かれはその抱持せる主義の是非を疑へり。其の是ならざるを知れり。その非なるを悟れり。弱き故、人間の心!! ければ變節に變節を重ねたり。かれは遂に千八百三十六年四月一日付の願書を以つて墨國トルカ市より玖馬島總督に向ひ、西班牙女皇が發せられたる特赦の恩澤に浴し數日間故郷に家族を訪ふを許されむとを請へり。漸く許可を得て同じ年の十一月四日に玖馬に歸着せしも永く故郷に留まるべくもあらず。翌年一月十五日またもや第二の故國墨西哥に歸りしも、政府は革まりて就職の途なく、恩給金すら受くる能はざる不幸に逢ひ、もごより虚弱なりし身の病勢さへ加はり、醫師は一切執筆を廢すべしと勸告するに至りぬ。よつてまた、妻を携へて故郷に歸らむとせしも果さず、玖馬の天に夢を馳せつゝ、トルカ市に客死せり。時に年三十七。

エレテイアの文名は世評既に定まつてまた動す可らず。その千八百二十五年を以つて、紐育市に於いて最初の詩集を公にするや、大に世人の注意を惹き、倫敦にて西班牙人の發行せる雜誌先、その大詩人たるを吹聴し、西班牙本國有數の文士亦之れを賞讃するもの多く、單にその名を西班牙語使用國に轟かせしのみならず、米人ケンネデーの著書によりて英語使用國に傳はり、佛人アムペールによりて廣く歐洲に紹介せられき。

かれは、また、戯曲をも作しき。「エドワルド第四世王一名謀叛者」(Eduardo IV, ó el Usurpador) を題

する一幕の散文劇は、千八百十九年二月にマタンサス市の私立劇場にて興行せられ、エレテイア自、一役をつとめ、佛人の作を模倣したる「アトレオ」(Atreo) と題する韻文悲劇は千八百二十二年の二月にマタンサスの劇場にて興行せられ、墨西哥の劇場にても翻譯の戯曲二種を場の上し、尙外に二三の翻譯あり。散文にも長じ諸所の雜誌に掲載せられたるもの多けれども纏まりたる著書としてはトルカ市にて出版したる「萬國史教科書」(Lecciones de Historia Universal) 四卷あるのみなり。

要するにエレテイアは新世界の西班牙語國に於ける一大詩人たるは何人も否認する能はざる所にしてまたかれは主觀的詩人として確に成効したるものなり。その最特殊なる點は故國を愛する念の熱烈崇高なることにして、かれの作詩中白眉の稱あるものは、ナイヤガラ瀑布を詠したる一篇の「カダ」なり。



# EL NIÁGARA

JOSÉ MARIA HEREDIA (Cubano)

116

## ニヤーガラ (ナイヤガラ瀑布)

玖馬 ホセー、マリーヤ、エレディヤ

わが琴の糸しらせよ。そを我れに與へよ

慄ひ且惱乱せるわが心霊の中に

誘發の燃ゆるを覺ゆれば。オ、いかに久しき間

わが額誘發の光氣を以つて輝くことなく

暗黒の中に過ぎけるよ……！浪立てるニヤーガラよ

爾の莊嚴なる恐怖のみぞ能く

かの苦痛の汚はしき手が怒つて我れより奪ひたる

神聖なる天の賜をわれに返すを得む。

巨大なる激流よ、静まれ、爾の怖るべき

轟雷の聲を黙させよ。かはるべく爾を圍む

その暗黒を少しく拂ひ除け

117

我れをして爾の純清なる顔を熟視せしめ

灼々たる熱心もて我が心霊を満たせ。

われ爾を熟視するに足る者ぞ。そは我れ

常に平凡と鄙陋とを蔑視して

恐大と莊嚴とを熱望したれば。

(然り)、猛烈なる疾風狂乱するとき

電光わが額の上に反響するとき

われは雀躍して喜べり。われは暴れたる

南風に鞭たれてわが船と格闘し

またわが足の前に煮るかへりつゝ渦開くる

大洋を見き。而して我れ危険を好みき。

されど海の力は

わが心に起きしめざりき。

爾の雄大が起さしめたる如き深き印感をば。



爾は純清にして威風凜々と奔りつ、やがて

嵯峨たる岩石を碎きつゝ、

急激且迅速に突進す

さながら抵抗し難き盲目なる運命の如く。

いかなる人間の言語か

怒號せる隱巖の恐ろしき形相を

寫し得べき？ わが心靈は

その沸き立てる激流を見て

茫々たる思想の中に混乱す。

その激流徒にそが飛躍の中に

紛亂せる景を延ばさむと欲す

いと高き絶壁の暗黒なる際涯に。千波

恰、思想の如く駿速に過ぎて

衝突し且狂亂す。

而して更に千波又千波早くも之に續ぎ

泡沫と吼號の間に没し去る。

見よや！来る、飛ぶ！恐ろしき深淵は

直下せる激流を呑み盡くす。

その深淵には千條の虹霓相交叉し、森林は

猛烈なる轟雷の聲を反響せしむ。

頑固堅硬なる岩石にあたつて

水碎く。靄々たる雲氣は

彈性ある力を以つて

回旋風の中に深淵を満たし、上騰し

渦をつくつて回轉し、空中に

光氣燦然たる金字塔を建立しつ

そが近傍の山々を覆ふて

單行の獵夫を驚慌せしむ。



さりながら我が熱中せる視線は甲斐なき焦望心を以つて  
 何をか爾の中に求むる？ 何とて我れは  
 爾の壯大なる巖窟の四周に  
 棕櫚を見ざるか？ あゝわが熱き  
 故國の原野に太陽の微笑によりて生長し  
 いと晴朗なる天空の下に、太洋の  
 微風の吐く息うけて搖るゝ  
 美はしの棕櫚を。

この追懷われを苦めてわれに来る……

オ、ニヤーガラよ！ 爾の運には欠くる所なし。

また爾の怖るべき巖大には

蘇々たる松樹の外には他の榮冠なし。

棕櫚と「ミルト」と繊弱なる薔薇は

誘發するに足らむ、溫柔なる快樂と、さゝやかなる庭の

心地よき閑さを。(さばれ) 運命は爾のために  
 更に高貴にして更に莊嚴なるものを秘藏せりき。  
 自由豪俠且強大なる心靈は  
 來つて爾を見、驚嘆し  
 鄙陋なる愉快を輕んじ  
 尙その振昂するをさへ覺ゆ、爾をほむる時。

全能の神よ！ われ他の國々にて

爾の至聖の御名を瀆しつゝ、

忌はしき誤謬と狂亂を播き

血と泣哭とを以つて野を漲らせ

兄弟間の痛恨すべき戦を煽り

且狂暴を逞うして地を荒らす

惡むべき怪物どもを見き。

そを見き。而して胸はそを見るや否



深刻なる憤怒を以つて燃わき。また他の處にて  
爾の神秘を考覈して爾を輕んせむことを敢てし  
且憐れむべき人間を歎かはしき不信の深淵に  
突き落さむとせる

似而非哲學者どもを見き。

かるが故にわが纖弱なる心は

莊嚴なる寂莫の中に爾を尋ねたり。即、いま

わが全心は爾に向つて開く。我れを取圍める

この偉大の中に爾のみ手を感じ。

而して爾の深雄のみ聲はこの激流の

永遠の雷霆の中にわが胸を喝破す。

驚絶すべき奔流よ！

いかに爾の景色は失神せしめ

恐懼と歎賞を以つて我れを満すよ！

爾の出所は何れぞや？　しかく數多の世紀の間  
爾の無盡の源泉を富すは誰れぞや？  
爾を受收して而かも地上に  
大洋の漲ることなからしむる  
その有力なる手は何ぞ？

●『主』はその萬能のみ手を開き給へり。

惱亂せる雲を以つて爾の顔を蔽ひ給へり。

爾の狂亂せる水にそのみ聲を與へ給へり。

かくてその「アーチ」を以つて爾の恐しき額を粧ひ給へり。

突飛、深廣且不斷に爾は奔るよ

底なき永遠てふもの、中に馳する

暗々たる世紀の激流の如く……！その如く人間より

喜ばしき希望去り

花咲き匂ふ日も逃げて



覺むる眼に見るは苦痛……！あゝ！わが青春の  
 時期は煎り焦されて横はれり。わが顔は萎しぼれて。  
 而してわれを惱亂せしむる痛苦は  
 苦患によりて暗瞻たるわが額に皺を興ふ。

● われは今日といふ今日ほど深く

わが寂莫と幸なき放擲と悲しき憎惡とを

感せしこと曾てあらず……あゝ血氣わきかへる年なるに

戀愛てふものなくば如何にして

幸福なるを得べけむ？ オゝ！もし一人の美女

わが愛情に固着し

この深淵の逆亂せる汀に

わが茫々たる思念と

燃ゆる如き大望心に伴ひて在らむには！

それとはわかぬ蒼白き色もて蔽はれ

その嬌趣ある恐怖の中に一入美しく見ゆつ

わが戀慕せる腕によりかゝりて

ほゝむ少女をながめつゝあらば如何に樂しからむ……！

純白なる謔語……あゝ悲し！流竄の身

故國なく愛なく

わが前にはたゞ慟哭と苦患とを見るのみ！

威勢強きニヤーガラよ！

いれらば！いれらば！今、數年ならずして

冷かなる墓は爾の微弱なる謔歌者を

呑み盡してあるなるべし。(さばれ) わが詩句は

爾の不滅の榮光の如く永續せむ！旅人の中には

爾を眺めつゝ我が紀念のために

奇特にも一個の歎息を興ふる者もあるべし！

かくて太陽西方に没落するとき



VUELTA AL SUR  
JOSÉ MARÍA HEREDIA (Cubano)

127!

船は飛ぶ。うす黒き岸邊は  
太陽の活ける反射により  
深き霧のかき消さるゝ如く  
はや遠く見えずなり行く。  
際涯なき景わが開ける眼の前に  
海原はるかに走り延び  
高き空漠たる天空には  
煌々たる太陽純乎として君臨す。

南 歸

玖馬 ホセー、マリーヤ、エレデイヤ

この詩は千八百二十五年の作にして、北米合衆國を去り故郷玖馬の島を左舷にのぞみつゝ、かれの第二の故國たるべき墨西哥に赴くさまの感慨を寫せるものなり。原詩は十言の「イタリヤナ」律格もて作りたれどこの和譯はエレデイヤの熱烈なる思想をなすべくこのまゝに傳へむと欲して散文に直譯しつ。

126

幸ある我れは「主」がわれを召し給ふ所に飛翔し  
またわが名聲の反響を聽いては  
雲間に光輝燦然たる額を高むるを得む。

○括弧内の文字は譯者が原意を汲むて添ふる所なり。

(なほり)



われらは微風の快活なる呼吸もて  
 われらの雪白の帆を孕ませ  
 光明と喜樂の中間に  
 清朗なる南方の國に向ひ飛ぶ。  
 悲惨なる北地よ、爾の氷に暇告げむ。  
 爾の冬が興へたる苦痛は死に  
 はや我が血管は強壯と健全を  
 われに約しつゝ、沸け立つを覺ゆ。

萬歲樂！喜ばしき南方の天よ！

この太陽はわが生命を肥大ならしめ  
 その光線はわが燃ゆるたる靈魂に  
 生涯不滅の花火を集中せしむ。  
 わが年齢の愛すべき初の實を  
 われは紀念物として爾の女むすめに與へつ

今なほ我が眼に熱き火焰は  
 愛すてふことをわが知れるまゝによく表示す。

オ、平和と幸福の紀念よ！  
 いかにか太陽は爾の美はしき西方に  
 光氣の中にわが愛する者の  
 純潔の顔を溢れしむるよ！  
 いかにかわれはその胸の  
 柑樹の蔭にわが額を支へ  
 またその薔薇の唇に  
 樂むで美感の杯を嘗めしよ！

なつかしの玖馬よ！爾の聖なる祭壇に  
 われはわが一生の幸福を牲として捧げ  
 且爾の大事敗れたるを見て



われはわが愛と友とを遺し去れり。  
されど鐵と復讐をもて武装し來り  
爾の醜惡なる暴虐者に見ゆるは  
その日遠きを出でざるならむ。

(かく美はしき希望はいかにわれを勵ますよ！)

美はしき南方の天よ！爾は同情もて

われに力と生氣とを返らせ

苦痛がわが胸かきむしる

殘忍なる呵責を和らぐ。

爾の慈悲深き威力に感じては

わが舌運命を咀ふことなく

爾の太陽われを照らし得る限りは

決してわれを不幸者と思ふことなし。

いざさらば、氷よ！オ、玖馬の琴よ！

いま爾の幸ある和音を恢復し

希望と愛の忠實なる頌歌を

翅に托して南方より送れよ。

爾の糸は寸斷されて見ゆ

無慈悲なる北方の暴怒のために。

されど溫柔に呼吸つける微風は

爾に生命と氣力を齎らし歸る。

われ爾をかい撫づ。かくて爾の響は

わが萎める眼中に啼泣を呼び覺ます……

如何にわれを療すよ！爾の温和なる

美妙われを強めて實在を感せしむ。

忠實なる琴よ、莊嚴なる喜悅と

苦痛の中の愛する友侶よ！



爾は最早、扁柏と織々たる花をもて  
永久に爾の身を飾らざる可らず。

永久に……否、玖馬ふたゝび其の子等を勵まし  
われら其の星の輝くを見むとき  
爾は莊嚴なる調子もて  
仁義の戦中に轟くべし。  
彼等は閔をつくりて叫ばむ—

『自由その胸に活氣の火焰を燃せり』と  
かくて、よしやわれ斃ることもわが光輝ある榮譽は  
未來の幾世紀を経て尙忘るゝことなけむ。

(をばり)

### 秘露國の詩人ヨナ氏

メマ、ボムビリヨ、ヨナ、イ、エチエエルリ (Numa Pompilio Llona y Echeverry) と云へる長き姓名を口にするまでもなく、單にヨナといへば誰れしも秘露國の哲學派詩人の隨一、十四行詩の名家たるを知る。

氏は元來エクワドル共和国の産にして、千八百三十二年(わが天保三年)を以つてグラヤキール港に生れ、父はホセ、エレ、ヨナといへる知名の狀師母はメルセデーテス、エチエエルリなりき。

氏は二才の時父母に携へられてカウカ州のカリコ呼べる一市邑に移り爾後その地に留まること十數年カリの「サンタ、リブラダ」校に入りて初等教育をうけ、夙に秀才の聞あり。好むでタツソ、ミルトンなど大詩人の作を耽讀し、同時に氏が有せる天才の幾分をほのめかしぬ。こは千八百四十三年より四十六年までのことにして氏が初めて作詩を試みしは十一才の時なりしといふ。

さて千八百四十六年、齡いまだ十四に満たざる一少年は秘露國に移住したる一家の數に加はりて里馬市に來り、多數の文士を出したる「サン、カルロス」學院に入り、哲學と文學を愛するの癖、ます／＼募りしに拘らず、千八百五十二年には法學を卒業して首尾よく代言人の免許をうけ、この間早くも文界に名を知られて、續々作詩を公にし、年二十三にして里馬大學の美學及文學教授に任ぜられき。これ即、氏の青年時代に於ける閑歴なり。

その後、氏は引續きにはあらざりしも、數回を合せて前後凡十ヶ年の間、教授として學生を薰陶し、千八百五十四年より五十九年までの六ヶ年間は秘露國出版物の大關と唱へらる「エル、コメルシヨ商業新聞」の編輯長と



À UN POETA  
NUMA POMPILIO LLONA (Peruano)

135

勇邁なる思想の孵化器、  
されど、かれは爾に豊富なる誘發ホンスピレーション

爾の價低き麻布の搖籃を飾らざりや。  
また、所詮、黄金、あるは摸稜は  
聖き目つきの碧き眼を與へざりき、  
心ひきつくる柔和なる磁石よ、かれは爾に

透明なる音響の美聲を拒みさ。  
(即)かれは吝くも爾に黄金の頭髮と  
肉體的賜物を給すること輕微なりや。  
運命は爾を地に投げ下しけるとき

ある詩人に

秘露國 ヌマ、ポムピリヨ、ヨナ

134

なり、千八百六十年より六十二年までは秘露國の領事として西班牙に在勤し、超えて六十四年、里馬

市に於いて開かれたる亞米利加會議の書記官となれり。

この會議閉會の後、氏は伊國駐在の總領事に任命せられ、千八百六十五年には巴里に於いて「亞米利加カントス之歌」と題する一卷の詩集を公にし、その後出版に係る詩集その數亦少からず。

また氏はその後、美術委員として佛、伊兩國の間に奔走し、その結果として一大紀念碑里馬市に建設

せらるゝに至る「五月二日紀念碑」即これなり。

尋いで千八百七十一年には西班牙翰林院の通信學士に擧げられ、千八百八十年には秘露政府氏を擧げ

て、美術學校長に任じ、高等教育會々員を兼ねし。氏、今や齡古稀に達し、殊に老病にて筆を執ること稀なりと雖、氏の文名は既に定まりて亦動かし難

し。氏の室、ラステナヤ、テ、ラルリーヴ女史 (Señora Lasteria de Lariva) また閨秀詩人としてその名

高く、現にその詩集は里馬市の一書肆より部分出版の法を以つて世に公にせられつゝあり。



LA DICHA HUMANA  
NUMA POMPILIO LLONA (Peruano)

137

われはわが行路の醜怪なる荆棘の中に  
血しほに染みたるわが心と

また、あらゆる快樂の後には乾燥無味の嫌悪！  
底にかくる、苦味あり、  
無上甘味の杯の中にはいつとでも  
さて、そは常にくしくしかく絶命の空虚にて！

われは盲目なる焦望心と狂せる執着心とを以て  
長きあいだ、幸福のあと逐ふて走りき。  
(即)榮光を逐ひ、戀愛を逐ひ、容色を逐ふて  
わが半醒半睡の中にそを求めき。

人間の幸福

秘露國 ヌマ、ポムピリヨ、ヨナ

136

天來の火の漲溢する心靈、  
高貴、且、熱心に創造する智力、  
及、白痴、腐敗、頑迷の凡夫に對する  
死的侮蔑の酸味ある微笑とを與へき！

(をほり)



マリヤノ、メルガール (Mariano Melgar) は千七百九十一年、即、わが寛政三年をもつてアレキパ市に生る。父はフアン、テ、デイヨス、メルガール、母はアンドレヤ、ブルダイネエリ、家計はさきで裕ならずりし、平靜と満足の故郷たる中位の階級にありて、徳行を一家の裝飾物となせりき。四才にして讀書をなせりといへるこの詩人は書籍を以つて玩具に代へ、はや羅丁語をも解するに至りければ、夙に僧正チャエズ、テ、ラ、ロサ師の太に寵愛する所となり、九才の時、兩親の請を俟たずして「プリマ、トンスーラ」第一剃髮式を授かり、僧衣を着くるに至れり。これ加特力教徒たるかれの兩親にこりては此上もなき榮譽にてありしなり。

かくして彼れは益々讀書勉學に耽り、業年と共に進み、且天性自然の美を直感するの奇才ありければ、師によらずして繪畫をよくし、また音樂にも堪能なりしと傳へられ、二十一才の時には既に、哲學、數學、神學、法律、歴史、美文學など凡、アレキパ市に在りて學び得らるゝ限りの研究を卒へ、羅丁、佛、伊、英の國語に通じ、各科ともに人の師たるに足りければ、自、教授法を改め教科書を選びて哲學數學を教授せしこともありき。且宗教上の研修も群を抜きて熱心なりければ、一朝自己の天職は宗敎家にあらざるを悟るに及び、決然志を告げて還俗しき。

神童は今や血氣旺盛の時期に達し、男子が一たびは遭遇すべき戀人の境遇に移り入れり。かれが全身全靈を献げて愛慕したる女神はシル非ヤといへる一少女にして、少女もかれを心憎からず思ひ、愛情漸く熟して遂に結婚の申込をなすに至れり。少女の兩親はいたくメルガールを尊敬せしも、果してか

秘露國詩人マリヤノ、メルガール

わが靈、わが生の敗軍遺品をのこしき……

かくて、結局、苦痛によりて悟りき、

幸福とはひとつの夢、また『運命』は癡惡ながらも

唯一の重寶として吾等に『忘却』を惠與せりしことを！

(なほり)







ELEGÍA

¿ Porqué á verte volví, Silvia querida?....etc.

MARIANO MELGAR (Peruano)

哀歌

秘露國 マリヤノ、メルガール

この原詩は「テルセト」(Terceto)と稱する律格もて作れり。「テルセト」は十一言の詩句三行を一節とし、毎節の第一行と第三行の韻をあはせ、さて前節の第二行と次節の第一行とを同韻とし、何節にても、かく前後相互に同韻をかけつゝ、變轉し行き、最後の二節のみを特に四行とし、その第一行と第三行とは前節の第二行に合はせて韻をふみ、二と四とは別に韻をそるへたる、頗、優美なる律格なり。さりながら、凡、原文のまゝの律格を使用し而かも原意を損せざるやうに外國語の詩を翻譯せむことは、最、相似通ひたる二國語の間にてすら、難中の難なるを、況んや根本的に語源文脈を異にせるわが國語に譯することをや。十二言と十四言の更置五行を以つて一節とせる没韻のわが和譯、たゞそれ、原詩の意を髮髻せしむることを得む乎。

何とてわれは汝の見むと

かへり來にけむ愛するシル井ヤ?

あゝかなし何がためぞや?

わが苦痛を一きはつらき

告別わかにのぞみ吐かむとて。

わが運命は好めるよ

わが幸さいなきを見て樂まむと。

失ふ寶はなほさらに

棄てがたく見ゆあゝ!かく早く

消わかなむとするこの寶!

あはれ幸なき記憶かな!

かなしき紀念かたみ!われ汝れを見き.....

榮光!されど大苦痛!

夢露かくとは思はでありし

害毒受けぬわれはいま。

熱きわが戀懸命の



鏈は強きいきほもちて

わが身を汝れに引きつけぬ。

われはいへり』われいま幸あり、

わが歡喜は全し』と。

されど、あなや！むごたらしき

運命われを汝より引き分く。

これわが大苦惱、大愁歎、

汝を見るは生命得むためなるを

笑止、われいま、死をぞ見る。

この天見むとて歸らずば

かゝるなげきに會はざりけむを。

また、ひたすらに泣聲を

別れて出づる憂き長旅の

身の慰藉とせしものを。

廣き海べに近づきて

わが深痛は涙のうち

かなしき胸を破りけり。

はやも、くるしみ、早も、呻きぬ。

われ泣きはてつ、かくまでも……

さらば何とて歡樂を

心にもたむためにはにあらで

わが苦を鋭くし

やぶれし心今更に

傷けむとて歸りけむ？

わが愚盲なる願望の



火山の勢ひ熾なる火の手は  
 いやましに強くなり來ぬ。  
 さればこそわれ、今その猛勢の  
 犠牲となりてもがくなれ。

頂嶺高き山々よ！

永久に汝れらが動かぬ如く  
 われの所有主なる人近く  
 永住すてふ幸福をわれに  
 與ふるものは誰れなるや？

かなしい哉や！奔流よ

すこく恐ろしき形相もて  
 地上の道路をみな毀て、  
 願くは深き慈悲をたれて

わが焦心の熱望斷て！

荒き海よ、ながはげしき  
 戦を休めて市々をば

湊なき島々に變へ

一孤島の中に幽閉せよや、  
 シルギヤとわれとたゞふたり。

慈悲をたれよ、暗雲よ

風よ暴風雨よ！さはさりながら  
 汚れたる地球、不淨の地、  
 汝れわが爲に大慈大悲の  
 恩恵施す能はずや？

シルギヤ、シルギヤ、われに告げよ、



誰れに向つて訴ふべきかを。

萬物を育て給ふもの

いかでか殘忍なるを得べき。

二人の歎訴『天』に向けむ。

かゝる恐怖の日にあひて

残るは『天』のみ、かゝる苦難の

唯一の避難所は『天』なれや、

げに『天』のみぞ殘虐もたで

われらまもらせ給ふなる。

いかに歎くとも懸命の

時にあふべき要あるならば……

『大悲の天』よ！わかれ行く

わが苦痛の重き心を

なさげに和げ給へかし。

われは泣く……はや此の上は……

愛するシル并や、いざわれをして

痛苦の激流の中に

身をば沈め、傷もつ心靈を

胸部より抜きて取らしめよ。

暗き夜の黒き喪服を

歎の中につらき心の

またと得がたき友とせむ。

未練はつきじ、早、甲斐なしと

われは諦めはてたれば。

わが誠實の戀を知ろし



希望のぞみの中にうち休やすみ  
われらが苦患くるしみ終末すまひをぞ告ぐ。

(をほり)

苦痛くるしみ見給ふ『聖せいき天てん』よ、

われに希望を與へ給へ、

わがいつくしむ寶を、また

見るを得むとの希望をば。

あと追ひ求むるわが戀は

汝おが情なさけのみに依りこそ頼め……

いとしのシルギヤ『天』こそは

われら二人の身の幸福さいふを

かたくも誓ひ給ふなれ。

さなり、われ泣く、さりながら

かく涙なみだもろさわが心こころ靈たまも

よろこばしき鍵鎖かぎさもて

なれに結むすはれていとたのもしき



YARAVI

Ya que para mi no vives...etc  
MARIANO MELGAR (Peruano)

『ヤラヴィ』歌

秘露國 マリヤノ、メルガール

そも『ヤラヴィ』歌(YARAVI)は秘露國の山間に住める土人の情歌にして弦琴に合はせて謠ふものなり。従つてこの歌の純粹なる佳作は『ケチユア』といへる土語のものに多く、西班牙語にて作れるものは『ケチユア』語よりの翻譯かさなくばその摸倣なり。いづれも戀に傷けられたる男女の怨情を巧に優しくいひあらはせるものにして、大かたは八言の四行詩または五行詩もて作り、五言の句を挿入することあり。時として八言より長くも短くもすることもありて詩形全く一定せるにはあらず下に譯せるは五言と八言との長短句を交へたる『ビエー、ケアラダ』(破脚)の稱あるものなれども、原の律格によれば原意を損ひ原意に従へば詩形を示すこと難し。故に直譯、意譯の兩様をもつて『ヤラヴィ』歌の面影を示めすことせり。

(直譯)

爾は既にわが爲に生きず  
わが眼、爾を見るべきにあらず  
わが眼、爾を失ひたれば。  
わが苦痛に居所を與へむ

悲しき寂莫の中に、  
われ今日その寂莫の中にあり。

爾われに諭を與へていふ  
永久に爾の婉美を  
忘るべしと、

單に死のみを以つて  
この記憶を忘却の中に  
葬り得べきの時。

われ永遠に爾を思ひ泣くべし  
わが胸より取り去りがたき  
抵當物として、  
爾は心霊に印せられてあらむ  
わが悲しき身冷かなる



死骸となりて残るども。

(意譯)

きははれ果てゝは  
ふたゝび相見む  
よしもなや  
くるしき思を  
さびしき心に  
宿さばや。

いましてが容姿動作  
思ひな出しそと  
告げこせと  
死なでは如何でか  
この世に忘るゝ

ことを得む。

胸よりこれざる  
かたみを永劫  
われ泣かむ。  
かばねは朽つども  
心こころ靈たまにいましが  
影とめて。

(なほり)



## グワテマラの文學者ホセー、ミーヤ

グワテマラ、ガンドウラス、サルブドール、ニカラグラ、コスタリカは總括して中央亞米利加と稱せらる。この五ヶ國はいづれも獨立共和國にして西班牙の文化を移植したりといへども、その進歩の度、極めて遲緩にして到底墨西哥及南米の姉妹國に比肩すべくもあらず。思ふに地勢の狹小にして大國を形成するに通じざるを氣候の炎熱はおのづから人智の發達を阻害するものあるによるならむ。中米の國勢既にかくの如し、大文學者の輩出を見ざるは毫も怪するに足らず。寧ろ當然の事のみ、従つて記者は中央亞米利加諸邦の詩人を紹介せむとするに當り、最、困難を感じたり。加ふるに記者はいまだ曾て、中米に旅行を試むるの機會を有せざりしが故に中米詩人の作物を蒐集するの便宜を欠けり。尤、西班牙國バルセロナにて出版せられたる『亞米利加詩集』(Antologia Americana)には中米詩人の作詩をも収めたれども、記者が本書を編譯するの企畫は先づ第一に詩人の略傳を掲げ、然る後、その作物を紹介するにあるを以つて單に詩のみを集めたるものは、記者を裨益すると、さまで大ならず。且、記者は別に公務の執るべきものありて常に圖書館に出入するの時間を有せざりしを以つて遺憾ながらこの集には中米詩人の作物のみを紹介し、小傳は一切之れを後日に譲らむとの胸算なりき。然るに幸にして古本屋より『中米名家詩集』(Colección de Poesias de los Mejores Poetas de la América del Centro)の第二卷壹冊を發見せり。こは詩人ラモン、サリアルテ(Ramón Uriarte)の編纂する所にして千八百八十八年にグワテマラ市にて出版したるものに係り、記者が得たる第二卷にはすべて十九家の略傳と作詩とを集めたれども端本にして揃ひ居らざるは誠に憾多き次第なり。

さて同書に載する所の傳記によれば、グワテマラ國の文學者ホセー、ミーヤ(José Milla)は詩人たるよりも寧ろ、散文家、小説家として屈指すべき天才にして、一般にサロメー、セル(Salomé Jil)といへる匿名を以つて世に知られ、千八百二十二年(わが文政五年)三月十九日を以つてグワテマラに生れ、千八百八十五年に世を去れり。幼にして『コレヒヨ、セミナリヨ』といへる學校に入り有名なる聖經學者カステイヤに就きて初等教育を受け、後、大學に移りて哲學と法律とを修めしが、自己の性質、法律家たるに適せざるを悟るに及びて法學の研究を中廢し、その目的を變じて専ら文學に親しみ、新聞記者として世に立つに至りぬ。

かれが『グワテマラ國官報』の編輯長となりしは千八百四十六年のことにして、その後千八百七十一年まで在職し、同時にかれは若年の頃より政海に游泳せし結果として外務書記官より、外務次官に擧げられ、千八百六十四年には國政會議の一員となれり。

政治界に於けるミーヤは數多の反對者を有せしかば文學者としては更に多數の賞讀者を有し、中米有数の散文家として雷名を響かせ、三種の小説を物したる外、その名著『風俗漫筆』(Cuadros de Costumbres)は外國語に譯せられて歐米に弘まりき。

千八百七十一年ミーヤは政府の變革に際し、故國を去つて歐洲に赴き、就中巴里に留まりて『海外郵報』といへる西班牙語の定期出版物編輯に關與せしが、千八百八十二年十月一日を以つてグワテマラに歸來し、遊寓中の著書數種を出版せり。また、かれは夙に中米全史の編著に意ありしが、歸國後、政府の囑を受けて自己の有なる『ケサダ』耕地に退き、執筆に餘念なかりしも、惜しい哉、



A MI HIJO  
EN SU PRIMER CUMPLEAÑOS.  
JOSÉ MILLA (Guatemalteco)

159

今日汝が穉き心霊は會得せずも  
いつか汝が貴む日のあるべき

温柔なる棕櫚、そのやさしき蔭に  
他日慰藉の庇護を與ふべく、  
またわが行路の終極に際りて  
わが疲れたる老年に安息を與ふべき。

麗しき色さまぐの蝶。  
活氣ある色合を太陽にむけて延ばす  
慈母の巢の中のいとをしの鳥、  
にをへる谷間のしとやかなる百合、

はじめての誕生日にわが子に與ふる。

ガラテマラ國

ホセー、ミーヤ

158

漸く最初の二巻を書き上げたるのみにて逆去せり。



わがいつはりなき愛情の聲を聞き  
この恩愛の供物うけよ、わが財寶。

われはたゞ汝が爲のみにわが黙せる琴の糸を弾く、  
而してわれは高雅なる熱心もて  
曩に詩人の妖艶なる夢想を  
忘却に委したる琴線を更めて鼓舞す。

されど琴は疾くよりわれに叛きて  
汝が爲にわが懇請する甘美の調を拒む。  
わが愛する心よ、尤むる勿れ、かまへて  
否、寧、わが不幸なる運命を罪せよ。

遠き雨のしかく軽やかなる響は  
天空の大を横断せしかか？

新しき太陽の光氣を吸はむため  
るの飛翔を擴張せし鳥か？  
空間に棲むで薄微なる光を  
逃れつゝ行く空中の軍隊たる  
霧裏に語れる神々の  
眼に見えざる琴の音か？

否、高き天空より離れて  
黄金と眞紅の翅はたゞきつゝ、  
いそぎ翔つて汝が上に天降る  
幼年加護の天使なり。  
半ば開ける薔薇の汝が無垢の唇は  
祝すべき夢想には、  
光明赫々たる大天使は  
その愛くるしき微笑を見て欣舞す。



人間の耳が甲斐なくも  
了解せむとつとむる幽玄の語調  
かはるく耳邊を圍み  
微風の如くして美はしき幻影低語す。  
而して唯汝れのみその神秘なる言語の  
穿通し難き意を得了し  
汝が心は天來の勅詔を聞いて  
喜悅のあまり鼓動す。

吾等の穢れたる天性は  
別生涯の不可思議なる秘密に到達する能はず、  
造物主はたゞ無邪と純潔のみに  
その秘事を示し給ふ。  
天使の兄弟にして  
罪惡の帶を釋き放たれたる小兒は

いと尊き『主』の寶座までも  
その思ひきりたる飛翔を揚ぐるを得。

幸福なる在天の諸靈は  
その白き翅の上に彼等をあげ  
その急速なる回旋の中に  
正義の永遠の太陽さして彼等を伴ふ。  
而してわれら早天が  
朝の最純潔なる光を洩らすを見るとき  
誰れかは知らむその靈魂、黄金と緋の雲の中に  
しあはせよく神に行くや否？

夜その喪中の覆巾をのべ  
きらめける星衆光輝を反射す。  
思ふに死が吾等より奮ひし愛する者は



星衆とともに平しづか静かに住まひ  
 其處よりやさしく吾等をながむるなるべく  
 その温和にして親しげなる目つきは  
 吾等の憐れなる心霊を敗滅せしめたる  
 かの残忍なる苦痛を柔ぐるを得む。

あゝ！わが子よ、誰れか、汝れの運命を  
 われに隠匿せる面巾おもてかみをかゝげて  
 暗き將來が汝れの爲に開通せる  
 その道路を今日われに示すを得む！  
 われは汝が才智の夜明け初むるを見る、  
 汝が母とわれとは汝が愛情の初果はつなかりを收む、  
 されど汝がやさしの接觸は  
 われに不思議なる焦望心を起さしむ。

不敬虔なる死は無暴にも  
 汝が安眠に乗じて奸計をめぐらし  
 汝が頭を細やかなる草の如く  
 鎌の刃に倒すことあるべきか、われ知らず。  
 誰れか知るべき、汝が靈魂  
 死を生命の世界につなぐ纖弱なる繩を断ちつゝ、  
 苦痛と憂患を脱れて自由に歸し  
 神のみ胸に失せ行くかを。

オ、避け難き苦痛の汝が分、  
 汝がために生命を庇護し、  
 また酷薄なる腐蝕性の憂患  
 汝が可憐の心臓を搔きむしることあらむには、  
 (さては)汝が怯ぢたる扁舟は  
 荒き情海の中に揺られて



猛風狂亂の玩具となり  
 無人の濱に打上げらるゝことあらむには……………

さはれ、苦惱絶命的憂慮の毒矢は  
 いかで吾等を滅すことのあるべき、  
 また、この幸福と満足の喜ばしき日に  
 啼泣、など、眼を曇さむとて來るべき、  
 死と苦痛よりの悲哀の使者たる  
 恐ろしき面相の妖怪にはあらで  
 善良なる天使はわが愛の子の搖籃に  
 そが祝福の感化力を溢れしめむことを。

かれ等(天使)わが子に父祖の純清なる信仰を齎し  
 その胸に熱烈なる慈悲心を燃やし  
 掬すべき希望かれにそが慰籍と

人間を神の如くならしむる諸徳を献げむことを。

平靜なる愛、堅心以つて不幸を排除する  
 正肅なる精神をかれに與へ  
 且嫉妬、憎怨、復讐、及不毛なる野望の  
 死毒を悉くかれの胸より取り去らむことを。

率直なる心霊と良心の平和  
 今生にてかれの援助となり、支柱となり、  
 また偉大なる光明かれの智能の中に  
 眞と善の道を示しつゝ輝かむことを。

オ、わが神！爾の庇保的擁護かれの爲に禦ぎ  
 爾の光氣かれの暗闇たる行路を照らさむことを、  
 かくてこの悲しき人世を歩むかれが行旅の終極に



南亞米利加に旅行して、エクワドール共和国のグワヤキール港に上陸するものは、この港に「オルメド街」とよべる所ありて其處に一個の宏大なる銅像の立てるを見るべし。これエクワドールの父と稱せらるる詩人オルメドがその産聲をあげ、且最後の呼吸を引きこりたる家のありし町にして銅像は即ちこれなり。

ホセー、ホアキーン、デ、オルメド (José Joaquín de Olmedo) は西班牙よりグワヤキールに移住したるミゲール、アグステイーン、デ、オルメドの長子にして母はアナ、フランシスカ、マルーリ千七百八十年即ち安永九年の三月十九日を以つてグワヤキールに生る。

九才のときキト市に伴はれ行き留まること二年、この間小學校に入りて西班牙語と羅丁語の文典を修め、千七百九十四年、齡十五にして秘露の里馬市に送られ、「サン、カルロス」學院及「サン、マルコス」大學に入り、秀才拔群の稱あり。千八百五年には法學博士となり、千八百八年には代言人の免許をうけ、また、「サン、マルコス」大學に於いて羅馬法の講師たりき。かれはこの年八月二十日故郷グワヤキールに歸着し、その七日日さいふに父を失ひ、翌千八百九年には中央會議に列席の筈なる僧正シルヴの書記となりて西班牙に旅行を企てしが、途中にて同會議解散せられたりその報に接し、墨西哥より故郷に歸り來れり。

エクワドール國の詩人ホセー、ホアキーン、デ、  
オルメド。

かれ十字架の木蔭に眠らむを希ふ。

(をばり)



ガルメド歸郷して未、幾くもなきに、かれはクワキール州選出の代議員となり、千八百十一年を以つて西班牙のガトイスに着し、國民會議の代議員申居指の人物として推さるゝに至る。されど千八百十四年に入り國民會議解散せられ、知名の士續々捕縛せらるゝを見て、ガルメドは首府マドリッドに身を匿して就縛の禍難を避け、翌十五年カーテイスより乗船し、玖馬島を経て、千八百十六年の暮に故國の地を履みしが、かれの慈母は既にその年の六月に世を去りてありき。

千八百十七年ガルメドは里馬に短時日の旅行をなし、歸國後ロサ、テ、イカサを娶り、この夫婦の間に一男二女あり。

千八百二十年十月九日クワキールその獨立を宣言す。ガルメドは即日推選せられて政務長官となり、一州の政を執り、超えて十一月十一日發布の「政府假條規」と稱する獨立州の憲法を起草し、また、「執政會」の長となれり。而して當時北隣コロムビヤは既に一獨立國となりて、その根底を固めむとせる際なりければ、クワキール獨立を宣言せりとの報を得ると同時に、獨立主唱者ホリーヴルは直にこの「執政會」に向つてコロムビヤに合併するの利益なるを説き、スクレ將軍をして一團の遠征隊を率ゐてクワキールに到り應援をなさしむ。尋いで千八百二十二年七月十一日ホリーヴル自、兵三千を率ゐてクワキールに到着し、更めてコロムビヤ共和國に合併せむことを勧め、ガルメドをはじめエクワドールの當路者は多く之れに反對して一獨立國を建設せむことを主張したれども、その盡力遂に効を奏せざりき。是に於いて知名の志士クワキールに留まるを欲せずして、秘露國に移るもの頗、多く、ガルメドまた、一書をホリーヴルに贈りてその處置を批難し、足の塵を拂ひて秘露國に向ひ乗船す、これ同年七月二十九日のことなり。

里馬に到着後ガルメドは直に選ばれてパスコ郡を代表する立國會議の代議員となり、この會議に於いては委員の一人として秘露國憲法の起草に干與し、またこの會議に於いては南米の地より全く西班牙の權力を拂はむとの目的を以つてホリーヴルの應援出馬を請ふの議定まり、ガルメドは他の一人と共にエクワドールの首府キトに赴きホリーヴルを迎へ來るべき委員に任命せられたるを以つて、昔日の惡感情を棄て、忠實且熱心にその使命を盡せり。

應援のため秘露國に出馬したるホリーヴルは、直に推されてその獨裁官となり、フニン及アヤクアヨの兩地に勝利を得て、茲にその獨立を確かむ。ガルメドが「フニンの戦勝」と題し、千八百二十四年八月六日の勝利を歌へる詩は、最傑作の稱ありて、今尙南米諸邦を通じて廣く吟誦せらるゝものなり。

かくてガルメドは千八百二十五年には一月十五日を以つて秘露國會より同國出生市民の權利を許與せられ、尋いで八月には外交上の用務を帯びてホセ、グレゴリオ、パレーテスと共に英、佛、其他の諸國に使し、歐洲滞在中、有名なるゴネスエラの詩人アンドレス、ペリヨと交を結びき。而して歐洲より歸りし後は故郷クワキールに在りしが、ホリーヴルより外務大臣の要位を與へられしも、公務に従事するを欲せずして辭退し、後エクワドール國分立するに及びて、その立國會議の一員となり、エクワドール共和國の憲法編纂に與われり。されど同會議が申出せる副大統領の職を固辭し、暫時クワヤスの縣知事となり、千八百三十二年より三十三年にかけ、コロムビヤ國との境界決定談判委員となり、その後暫時退隱せしも、千八百三十五年にはまたクワキールより選出せられて國民會議の代議員となり、その議長として功あり、且この會議にて制定せられたる新憲法の大部分は亦かれ



EN LA MUERTE DE MI HERMANA.

JOSÉ JOAQUÍN DE OLMEDO (Ecuatoriano)

173

わが妹の死にけるこき。

エクアドール國

ホセー、ホアキーン、デ、オルメド

こは千八百四十二年グアキールに於いて作れる一篇の十四行詩なり。

かくても爾は神にてましますか？ われ誰れに向ひかこつを得む？

爾の榮光と權威の中に酩酊しつ、

いまはしくもわれを食ひつくす苦痛を見て、

慈悲の一瞥をわれに否み給ふを！

われを慰めむため冷かなる墳墓の

いかめしき土塊つちくわいを今一たびとり除けしめ給へ、

而してオ、神よ、わが胸にかへし給へ、

爾がわれより奪はむことを望み給ひし妹を。

われはそを爾に願ひしことなし。いかに滅ぼさむが爲に

172

の手に成れりといふ。

さてガルメドはその後再、退隱して専、文學を樂しみ、英人ホープの「人間論」を譯しなごして日を送ること凡十年、千八百四十五年の革命には首魁の一人として大統領フロレスに反對し、革命軍勝利を得て、一時はロカ、ノボアの二名と共に三頭政治を布き、尋いでロカをして大統領の職に就かしめたる後、數年前より患ひ居たる病の爲に歿す。國民大統領の禮を以つて厚く之れを葬る。時に千八百四十七年二月十七日にしてガルメドの年六十有八。わが弘化四年のことなり。



造り給ふとは偶然なるか、神らしき<sup>たはむれ</sup>娛戯か、  
或は下界はしかく多くの徳を値せざるか？

或は爾の純潔なる光明の中に吸収せられたる<sup>チラス</sup>齊聲の  
絶間なき歌調は爾によりて一段貴からず見ゆるにや、  
われに告げ給へ、爾の天にはこの<sup>つかひ</sup>天使を要せしや否？

### 譯者の註

○第二節は救主キリストが少女マルタの兄弟ラーサロを甦らせ給ひしこゝ  
を引きて今一たびその奇蹟を行ひ、わが妹を甦らせ給へさいへるなり。  
故事の詳細は新約聖書約翰福音書第十一章を見よ。  
○末節第二行の意味は天には不<sup>つ</sup>断の妙樂あるべきにわが妹の歌ふ聲の更に  
美なるを見て之れを天に召し上げ給ひしやと詰れるなり。

### 秘露國 の文豪

#### リカルド、パルマ氏を訪ふ

明治三十四年七月四日の午後、余は友人△△君と相携へて秘露國第一流の文士リカルド、パルマ  
(Ricardo Palma) 先生を里馬市國立圖書館に訪問した。かれはスコットが蘇格人中の蘇格人と稱へら  
るゝ如く里馬人中の里馬人と評されて居る人である。

パルマ氏は千八百三十二年我が天保四年の二月七日に里馬市に生まれ、「シエツユイット」派の「サン、  
カルロス」學院に於いて法學を修め、同學院を辭したのは千八百五十三年、即、氏が二十一才の時であ  
つた。無論、法學を修めたからには代言人になるべき筈であつたが、どういふものか、海軍にはい  
つた。だからコルテス編纂の「亞米利加人名辭書」にはパルマ氏を「秘露國の詩人兼海軍人」と  
してある。

丁度千八百六十年まで海軍主計の様なきこをやつて、それこれの軍艦に乗り組んで居つたが、當時、  
殆、絶間もなかつた革命の結果として、かれは智利國へ流竄された。流寓中の凡、三年間、かれは新  
聞記者として智利國で聲譽を博したこのことである。

扱、政府が革まるに共に、千八百六十三年の暮、かれは故國に立歸り、居るこゝ數ヶ月、歐羅巴、北  
米合衆國に旅行をなし、後、總領事に任ぜられ、ブラジル國パラ駐在を命ぜられたが、氣候險惡の  
ため止むなく職を辭して里馬に歸つた。千八百六十六年五月二日の戦争の際には、かれは某省の一課  
長であつた。それから一年半の後は革命黨の首領バルタ大佐の書記官長として、この間非常な苦心  
をした。而して革命黨いよく勝利を得、バルタ大佐の大統領となるに及んで、かれはその秘書官に



任ぜられ、同時にロレト州選出上院議員となつて居つたのが、約四年の間であつた。

千八百七十三年に議員の榮職を辭してから、かれは斷然政界に永久の暇を告げて、専心筆硯の業に身を委ねた。けれども智利との交戦中は出版物を利用して愛國の大業をなすに躊躇しなかつた。

あゝ智利との交戦！これは彼の爲に大恨事であつた！美はしきミラ、フロレス邑（眺花郷を譯すべき）に於ける家屋は無慘！兵火の災にかゝつて、惜むべし！四千餘部と註せられたかれの秘藏の珍書は、あはれ、一塊の灰と化して仕舞つた。

かれは千八百六十三年に「里馬教刑史略」を著し、千八百六十五年に「調和」と題する詩集を出版し、千八百七十年には「情詩」千八百七十七年には「勸詞と現在分詞」と題する詩集を公にした。尙、外に數多の作物はあるが、かれの文名をして西班牙語使用國に轟かしめたのは有名なる「秘藏の傳説」(Tradiciones Peruanas)である。

「マウリー」旅館を出て、僅、三四丁を距てたウカヤリ第四街（一に勉學町）の圖書館へ着したのには二時過であつた。BIBLIOTECA NACIONAL（國立圖書館）と門上の壁に塗りつけられた朧げな文字は、確に建築物の古きを示して居る。入口にホツ然と立つて居る門番に「パルマ先生は……」と尋ねると「奥の館長室に居られます」と答へた。よつてわれ／＼二人は普請中の中庭を通り抜けて正面から這入つて直ぐ右側の「館長室」の戸を二三度軽く叩いた。すると室内には返事もなく、外面からしづ／＼と歩み寄つた一老人——左様、中庭で見かけた老人で、われ／＼は彼れを土方の親方と思つて居たのである——が、「一寸軽く會釋して「何か御用か」と尋ねた。

「ハイ、一寸パルマ先生にお目に、り度くつて……」と△△君は答へた。

「ジャアおはいりなさい」といつて自分で戸を開けて、われ／＼二人を先に入れて、後から續いてはいつて「よくお出でになりました……サアお掛けなさい」といつて自分は机の前の安樂椅子に倚りかゝつた。

「貴君がパルマ先生ですか」といひながら△△君は墨國現代の名詩人フラン、デ、テイヨス、ヘサ氏から貰つて来た紹介状を渡してその來意を告げ、余もまた、初對面の挨拶を述べた。

「君はメキシコからお出でか。ファン（態を親しく名を呼んで姓を呼ばなかつた）は相變らず壯健で居ますかネ、あれは文學上の古い親友です。君はまたメキシコへ歸りますか。成程、ジャア出立前にも一度来て下さい、私からも一つ手紙を書きますから……」といつて、更に余に向つて「君も矢張りメキシコからですか」と尋ねた。

「ハイ、昨年の八月に秘露へ参ります前はメキシコに居たのです……私は當分此方に在勤の筈です。何分にも宜しく願います。」

「ハ、アそれは結構だ、始終お出でなさい……時に圖書館の内部を見物なさい、案内しますから……」  
 そも、秘露國立圖書館の創立されたのは千八百二十二年、即、わが文化五年の九月十七日で、創立の際一萬二千五百六冊と數へられた書籍は、その後、追々増加して凡五萬冊に達した。然るに、南隣智利國と戦端を開き、敗北をした結果千八百八十一年、勝ち誇つたる智利軍は里馬市に侵入して、遂に圖書館にまでも闖入し、珍貴なる圖書の大部分を掠奪し去つた。その殘冊を集めて圖書館の再設に盡精したのは、即、パルマ先生であつて、その再設式を擧げたのが千八百八十四年の七月二十八日無論パルマ氏は館長として推された。而してパルマ氏の文名は當時既に西班牙語使用國に鳴り渡つて



居つたから、先生の依囑に應じて書籍を寄贈する同情の士、頗、多く、殆、國庫の補助を仰ぐことなしに、今や藏書の數は無慮四万冊以上に達して居るのである。

バルマ先生は何時でも圖書館を訪問する人があれば、喜び迎へて第一にその内部を示すのが例規である。かれは親がその子を客に誇ると同じ様に、その手で育て上げた國立圖書館を見せたいのである。然り、この圖書館はバルマ氏の血をわけた子である。またバルマ先生をして名著を作り出さしめた母親である。

バルマ先生は先に立つて案内された。まづ入口に掲げられた油畫の説明を聞かせ、讀書室に導き、藏書室に伴ひ、珍書一千餘部を寄附したといふ一紳士紀念銅像―丁度、出來上つて据ゐた儘のもの、それから新聞雜誌部など残る限なく示された。

再び館長室に歸つて座について、つらく先生の相貌を眺めた。學者といふものは東西一様である。バルマ先生年齢は今年さつて六十九歳、背はすらつと高く彼は六尺もあらう。頭巾の下の白髪はまだ雪白さまでに行かない、幾分か壯時の名残の黒を残し、敢て禿げない方である。鼻は隆く美髯繁りて兩端少しく上り、頬は瘦せた方で凜として居るが、また何處となく一種溫和の相が見ゆる。服装は土方の親方に見ゆる程に粗末なもので一向飾氣が無いにも拘らず、その心中に潜む學識の光は自然と外に洩れて風采人を射るの威力がある。

「時に先生、紀念の爲に先生の御近作は何かありませぬか」と△△君はいつた。  
余も裏面から之に應じて「日本では英、獨、佛語が盛に行はれるだけに此等三ヶ國の文學は餘程普及して居るやうです。否、むしろ、日本の文學界は既に英、獨、佛に飽いて、今は露をはじめ、なら

ば、西、伊、葡の毛色の異つた珍らしい文學を窺きたいといふ新傾向も有して居る様に見受けま  
す。で、私共は西班牙語が出来るのを幸ひ、力の及ぶ限りは西班牙文學を日本に紹介したいといふ野心を  
持つて居ります」と述べた。

「成程、それは好い考である。西班牙文學にも矢張一種獨特の妙所があるからナ……私の書いたものは色々あるが、此處に持合せがない。こんなものでも上げやう。何も紀念の印だから……」といつて、△△君には先生が西班牙へ旅行された時の紀行隨筆と余には千八百九十七年、西班牙マドリッド府出版「里馬教判史畧」(Anales de la Inquisición de Lima) 第三版一冊を與へられた。次の如き數語を自書して

Al jóven Ryoji Imamura  
en recuerdo de su visita.

R. Palma.

Lima 4 de Julio 1901.

若き今村良治に贈與す、

そが來訪の紀念として。

千九百一一年七月四日

里馬にて

エレ、バルマ

これより暫時、西班牙語と西班牙文學について談話した後先生はわれ々に向つて日本語の聖書を一部望むとの意を洩された。「大抵どの國のも集つて居るが、まだ、日本語が無いから……」といつて。



OFRENDA  
RICARDO PALMA (Peruano)

拙く、かつ、調はざる歌どもをうたひつゝ、  
わが眞情の印を汝れに進めむとて來れり  
\* わが鳩よ！  
われは貧し！……たい我が詩のみを有つ。  
餘人は奢侈おごりてふもの、供ふる品々ひんぱんと  
東洋の眞珠の冠ひんぱんを汝れに捧げよ。  
詩と花とは  
わが戀のいつはりなき表彰あらはしなり。  
汝が額には花こそ殊ことにふさはしけれ、  
花は汝が姉妹あがねなり、愛度あがねの少女。

供物

秘露國 リカルド、バルマ

原詩は四行のもの四節にして、第三行のみを五言とし、その餘の三行を各十二言とせり。押韻は對聯法により一と二、三と四に韻字を聯ぬ。

余は舊約文學を愛する一人で、余が雅號「敬天牧童」の四字は希伯來人種の特性たる敬虔の信念を發  
輝した。かの詩篇中の大部を占むる神歌詩人、イスラエルの王ダビデの幼時に由來して居るのである。  
また余は一種の辭書として聖書を利用し、博言學研究の好材料として聖書を參考する一人であるから、  
現に英、佛、獨、西、及希臘、羅丁、希伯來の聖書は夫々所持して居るけれども、生憎日本語の分は  
メキシコで好奇なる英國宣教師ローソン氏に呉れて仕舞つたから、無いのである。羅馬字綴の日本  
字の二兩方あるが、どちらがお望みと聞くに、無論純粹の日本字のが欲しいとのこと。

「ソ一ですれ、無論日本へ注文すれば譯はありませぬが、これは一寸目數が掛ります。何でも在留日  
本人中に基督教信者がありますから、一つ探して見ませう。もし無れば日本へ注文しますから」と約  
束したのは余であつた。

先生の机下を辭して歸途に一人の日本人を尋ねて、聖書を持つて居ないかと聞いた。占めた！ある  
く。舊新約全書一冊、まだ外に有りますから、送上げて宜しいとは何よりの幸ひ。

七月十一日に△△君と余とは再、バルマ先生を訪問した。△△君は告別した。メキシコのテイヨス、  
メサ氏への書面を受取る爲に、余は約束の聖書を進呈するため。

この日もいろいろ談話があつたけども一々記すには筆が重い、手が疲れた。で、唯、南米秘露共租  
國里馬府の國立圖書館には一冊の日本語聖書が備附してあつて、「西曆千九百一十一年七月十一日今村良治  
氏之れを寄贈す」と認められた表紙裏の文字は、文豪リカルド、バルマ氏の自筆であるといふだけを  
記して茲にいさしき筆に暫時の休憩を與へやう。

辛丑十一月里馬にて

敬天牧童草す



¡TODAVIA!  
RICARDO PALMA (Peruano)

183

君われに誓ひぬ、戀を。  
わが唇よりもまた、おなじ  
誓言放ちぬ、貴婦人よ。  
ともに忘れぬ、その誓言、  
事みな忘却の胎内に入れば。  
われはわが知覺のために  
はかなき狂亂を求めぬ、  
あだし女をもの接吻に。  
また、君もまた、あだ戀の  
颯風につよくさらはれぬ。

いまごても！

秘露國　リカルド、バルマ

原詩は十一言四行をもつて一節とし「アソナンテ」といへる字母整韻法により作せり。和譯は十二言五行に試みつ。

182

汝れは花の如く  
汝が過ぐる足跡に匂残して行けば。

見すばらしきわが供物食してさげすむな、  
汝が心霊はやがてわが心霊を知るべければ。  
價格を見るな、  
たい汝が發さしむる戀の純分を見よ。

\* わが鳩よさばわが戀へる少女さいふに同じ。

(をばり)



その昔、新西班牙ヌエバ・エspanニヤと稱せられたる墨西哥合衆國は西班牙文明が亞米利加大陸に産み落したる長子にして、「いすばの、あめりか」中の先進國なり。その征服以前に居住せりしアステック、トルテック人種の文化の度よりいふも、西班牙が征服占領せし年代の順序よりいふも、また、その位置が歐米の先進國に接近せる點よりいふも、墨國は慥に「いすばの、あめりか」の隨一たる可らざる可らず。殊に政教の分離は墨西哥合衆國が獨、よく到達し得たる勝利點にして、他の「いすばの、あめりか」諸國の如き制限ある思想の自由を誇るの比にあらず。従つて文學上の進歩も他の諸國に比し更に光輝の灼爛たるものあるべきは蓋、數の然らしむる所なり。

曰はく、デイーヤス、ミロイン、曰はくグティエルレス、ナーヘラ、曰はくフランシスコ、ソサ曰はく、ファン、デ、デイヨス、ペサ、曰はくホセー、タブラダ。當代の墨國詩人にして西班牙語使用國にその芳名を覆郁たらしめつゝあるもの枚擧に違あらず。

記者が墨西哥に滞在せしは明治三十一年の十月より明治三十三年の七月まで約二ヶ年間のことにしてこの間記者は職務の繁忙と語學の研究に追はれ、文學より遠かること殊に甚しかりしを以つて、知名の文士を訪問してその高説に耳を清むるの機を有せざりき。されど新聞に雜誌に或は著書に文豪の名を知り、文傑の作物に接するは殆毎日のことにして夙にファン、デ、デイヨス、ペサ氏の英名を慕ひ氏が温平たる顔に微笑を浮べつゝ、公衆の喝采の間にその純雅清麗の詩を朗誦せるを見るの機會を得たること實に二回、また青年詩人ホセー、タブラダとばかれが日本に來遊せし以前に握手して數分間の

墨國現代の詩人ファン、デ、デイヨス、ペサ氏

さて、しかはあれど今とても  
 優男やさしきの手にうれしげに  
 うち絶り行く君みれば  
 わが顔に悲哀かなしみ描かれ  
 われ苦しめて心臓こころ搏つ。

さても、こは、心こころ靈のうちに  
 初戀の理想のおもひ  
 死に絶わで生き居ればなり。  
 火はなほ、灰のなかにあり、  
 火山の焼石いまだ燃ゆ！

(をばり)



談話をなすの榮を有せりきタブラダは頗、日本最負の人にしてかれの詩集には「日本」及「菊の花」と題せる二篇の詩を載せありしことを記憶せり。要するに記者は墨國滞在中、文學とは極めて疎遠にてありしも全くこれを知らざりしにはあらず、たゞ専心之れを研究するの時間を有せざりしのみ。然り記者の机上には墨西哥府にて求めたるガルブーンGarbunの詩集二卷、墨國名家詩集、アントニヨAntonio、ブラサ詩集、アクニヤAcuña詩集、及ベサ氏の傑作集各一卷ありて當時の紀念を語る。

墨西哥にありし間ばさまでにベサ氏を大詩人とも思はざりき。されど後、去つて南米に移るや、ベサの名の到る處に發音せらるゝを見て、その名聲の高きに驚きぬ。氏は墨西哥一國の詩人にはあらずして西班牙語使用國の大詩人なり。

傳へいふ。ベサ氏はわが嘉永五年、即、西曆千八百五十二年を以つて墨西哥市に生れたりき。然らば氏は今年正に五十一歳なり。

氏の父は陸軍の將官にしてマキシミリアン帝政の時代に勳功ありし人なるが、ベサ氏は幼少の時、慈母にわかれたるを以つて専、父の手に教育せられ、年頃に及びて「Escuela Preparatoria」校に入る。この學校は官立の中學校にして法學院、醫學校、鑛山學校など高等の専門學校に入るの豫備科たるを以つてこの名あり。さて氏はこの學校に在る間著名の文學者イグナシヨIgnacio、ラミレスRamirezに師事して文學を修め、早くも詩才を示し初めしが、氏の目的は醫學の研究にありしを以つて遂に醫學校の門を倦るに至りぬ。氏がかの薄命詩人マヌエルManuel、アクニヤと交情を温めしは即、醫學校在學中のことなり。

かくて、氏は間もなく卒業すべき榮譽の時期に近きしが、當時政海に於いては共和黨勝利を得てマキシミリアン帝を利するに至りしを以つて、氏の父たる將軍も遂に流竄の災禍に罹れり。従つて氏は前

々の如く學資の出所もあらざるより止むを得ず、退校して新聞社に入り、再後千八百七十六年即、氏が二十五才の時までは間斷なく新聞に詩文を書き、夙に文界に名を揚げき。

千八百七十六年氏は任ぜられて公使館書記官となり、結婚後幾くもなく任地西班牙に赴き在勤することあり。この間盛に西班牙著名の文士と交際し、就中詩人グリロGrilo、セルガスSergasと親みき。

氏は室との間にコンセアションConcepción、マルガリータMargaretaといへる二女とフアンJuanと名くる一男とを擧げしが、墨西哥に歸りし後、不幸にしてその室を失ひ、三兒は母なしとなり、氏は孤獨に昔日を懐ふて泣くの鰥夫となりき。その後氏は聯邦州の慈善協會會長となり、國會の上院議員を兼ねたることもありしが、數年前よりは遞信大臣の秘書官として今、現にその職に在り。

詩人として氏の長所を認むべきは、幽遠なる哲理を含むが故にあらず、偉大なる思想を歌ふが故にあらず、氣々たる香氣を襲むて而かも未だ之れを發せざる薔薇の苔の如き小兒を歌へるにあり。否、小兒を歌へるにあらずして、氏の身邊に嬉戯せる愛兒の爲めに歌へるにあり。既にその愛兒の爲めに歌ふ。この詩や單に修辭學上の法則を墨守して俗人の耳に遠き雅言を駢列したるが如きものにあらず。慈父としての眞情を平易なる言語の媒介によりて、無垢白玉の如き幼兒の無邪氣なる心に訴へたるもの即、氏の詩なり、歌なり。豈に高潔、純清、柔和ならすこせむや。



Á MIS HIJAS  
JUAN DE DIOS PEZA (Mexicano)

188

わが女等に

墨 國 フアン、デ、デイヨス、ペサ

わが悲哀は海なり。わが苦き日を  
濃密に裹むるが海霧あり。  
その波は涙にてなれり。わが筆は  
その中に浸されぬ、わがむすめらよ。

汝等はその海の岸邊に  
生ひ出でたる無心の花ぞ。  
わが苦痛の黙したる嵐は  
汝等が幼少期の兒守歌となりぬ。

われは戦はむが爲に生れき。激烈なる戦闘の中に  
正肅且强健に氣力を恢復す。

死を以つてわが大膽に價拂ふとき  
われは果合の勇士の如くわが牌上に斃れむ。

その様にて人々われを汝等につれ來らむことを。  
われは人間の權威を蔑ます、また、その憎怨を懼れず。  
わが榮譽はことごとく之れを汝等の名の中に入れ  
心靈の全部を汝等の無上の愛の中に置く。

汝等は世に出でむとて急ぎ行く、  
願くはその時期決して來らざらむことを！  
そは世と相對して諦視せむが爲には  
笑聲を以つて泣哭を溺らすべき要あれば！

汝等われに倣ふこと勿かれ。われはわが創口を  
ひとしほ廣やかに開くを以つて自、慰む。

189



汝等は汝等の祖父の高貴を學べ、  
わが一生を照らせし徳行の太陽を！

禱れ、而して免せ。祈禱の後には  
内心の平靜常に大、  
罪をゆるすを知れる人間は  
靈魂の中に神をやどすを知る。

汝等の胸は親切の巢たれ、  
汝等何人も達し難きことを分外に望むなかれ、  
宥恕に忘却を冠せしめ、  
いかめしき徳に希望を冠せしめよ。

あだなる快樂を崇拜することなく  
純潔汝等の額を抱かむことを。

汝等婦女の中に童女の心霊を求めよ、  
また、童女の中に天使の心霊を求めよ。

何人も汚名をうけて生れ出でず、  
何人も刑罪のことが享受することなし。  
汝等かまへて罪惡の奴婢とならむため  
大聲揚げつゝ自、辨恕すること勿れ。行末は明白なり。

生くるは戦ふなり！戦ひつゝ、  
みづから棘の冕を戴くもの不幸ならず。  
下界にはすべての精進誼はれ、  
天上にはすべての罪過ゆるさる。

空想は微弱なる燈光の如く消ね、  
容色は萎れゆく花なり。



信心なき婦女は世に害ある立像、  
家庭より配謫せられたるものなり。

悪はすべての人を病ましむる蝮蛇なれば  
汝等の眼を悪に注ぐことなかれ。

かくて、われ墓中に悲しく眠らむとき、  
汝等平安に睡らむため善を行へ。

この地上には名聲も賞讃も虚榮も榮光も  
寸毫わが心を動かすことなかりき。

(しかり) 汝等の幸福を求むること、之れわが大願、  
汝等を愛して苦むは之れわが歴史なりき。

わが生命の太陽西天に没落せむとき  
汝等わが恩愛満つる訓誡を思ひ起せ、

而して一考ごとに、また、一步ごとに  
廣大なる高き所に神を尋ねよ。

われは懇望す、われ若、死なば聖き賞品として  
汝等の愛情の過剰の中に  
わが墓前の花には汝等の哭聲を得  
わが墓碑には汝等の接吻を有たむことを。

(をほり)



## 墨國の厭世詩人アントニヨ、プラサ

去る明治三十一年十一月二十四日横濱にて病歿したる墨西哥共和國總領事エドムンド、プラサ氏は、薄命なる詩人アントニヨ、プラサ (Antonio Plaza) の長子なりき。

詩人プラサがこれの爲には悪人の舞臺と見なたるこの浮世に引出されたるは我が天保四年のことにして實に千八百三十三年六月二日を以つてグワナフアト州アバセヨ邑に産聲を揚げき。父はホセー、マリーヤ、プラサ、母はマリーヤ、テ、ラ、ルス、ヤナス。

幼にして修學のため首府墨西哥に送られたるプラサは「セミナリヨ、コンシリヤール」といへる學校に入り、法學及羅馬教の研究をなせしが、性頗、放逸にして常に校則を遵守せず、且西班牙人種に多く其の例を見る如く極めて利發早熟の少年にてありき。されば千八百五十七年の憲法を擁護するを名として國事に盡力したる知名の志士は多くこの學校より出でたる際にて、プラサもまた、進んで進歩黨に加盟し、その一兵卒として奔走せり。されど不幸にしてある時の戦に砲彈を以つてその一足を傷けられ、自由を失ふに至りしを以つて、遂に依願退職となる。時に千八百六十一年、かれが齡二十九。それより暫時、身を文筆に委れて自由主義を唱道せる數種の新聞雜誌の寄書家たりしが、千八百六十二年には中佐の資格を以つて再、軍籍に入り、後ケレターロの役に出陣し、軍隊を統率して墨西哥府に歸來せしは千八百六十七年のことなりき。

詩人プラサを評するものは曰はく、「かれは餘りに理想に傾き過ぎたる不均衡の頭腦を有したり」と。實に然り。彼れは負傷の爲に不具者となり、創口よりは始終出血絶えずしてかれを苦ましめ、天才

を遇するの道を知らざる社會はかれを酷待せり。否、社會はかれを酷待したるにあらざるも、かれの理想はかれに社會の暗黒面と欠點のみを示し、かれを不平ならしめ、かれを憤懣せしめ、遂に世を厭はしむるに至れり。

一友かれの貧困を憐れみ、生計の方便として一誌の發行をなさしめむことてかれに勧めしが、かれは冷然答へて曰はく「それは何が爲ぞ？ 政府を攻撃せむか、これわれ自、進んで獄裏の人となるのみ。然らば飄つて政府に媚びむか、これ恰、死人の髭を剃るに類し、徒に、剃刀をへらし、理髮師の名を傷ふのみ」と。かくして交際場裏より侮蔑せられ、貧苦に責められ、辛き運命の奴隸として一生を終れり。かれが逝きしは千八百八十二年即ち明治十五年の八月二十六日なれば、この薄命なる詩人が世に在りしは五十年の間にてありき。極めて淋しき式をもつてグワタルーハのテハヤツク墓地に埋葬せり。

プラサは理想家にして主觀的詩人なりき。かれは屢々人に語りて「大教師の講義は一ととしてわれを益せしことなし。われは鳥の如く歌ふべき必要を感じるが故にうたふものなり。榮光がわれにその榮冠を捧げ來ると、忘却がわれをその悲しき絹の中に包み去るを撰ばず」といへり。實にかれはその思ふが儘を歌へるなりき。

プラサの薄運を以つてその思ふが儘を歌ふ。その全く人間社會の美を知らざりしは亦當然の事のみ。火の如く熱烈なる性情を以つて自己の辛酸を吐表す。厭世の筆に憤恨の墨汁を染めて優麗と芳香に乏しき而かも悲慘讀者の心底に徹する作詩を遺したる決して偶然の事にあらず。かれは悲思哀想を歌はむが爲に世に出でしなりき。造化は詩人プラサをして墓地と荒廢の地に咲き出



ASI  
ANTONIO PLAZA (Mexicano)

197

氷に觸れてにをひ散る

ほこれる鶯は生命奪る  
鉛塊の傷に落つるなり。  
憎き運命にやぶられて  
心は死ねり、その如く。

夜その衣をのばすとき  
白晝の光明は消ゆるなり。  
黒き悲哀の蔭のうちに  
心は死ねり、その如く。

その如く

(意譯)  
墨國  
アントニヨ、プラサ

196

つべき悲哀の草花さならしめたれば。



エネスエラ共和国の詩人ホアキーン、キンテロは千八百三十三年十月二十二日にスーリヤ州の首府マラカイボ市に生る。即わが天保四年のこさなり。故郷に於いて初等教育を受け、引續いて中學程度の學科を修め、千八百五十七年には年二十五にして航海學を卒業し、海軍に入れり。かれは海軍に在職せる間、効蹟群を抜くの譽ありて漸々立身し、遂に海軍大佐に累進し、多年軍務省海軍局長の椅子を占め、將軍ホセー、アントニヨ、パーエス獨裁官たりし時には艦隊司令官に任ぜられ、尋いで司令長官となる。

その後、故ありてかれは民間に退き、マラカイボに在りしが、この間絶えず再び官途に就かむことを勸誘せられしも應ぜず、以つて千八百七十年に至る。而してその年反對黨の爲に投獄せらるゝの不幸に遭ひ、後ラ、グワイラの暗獄に繋がるゝこと十八ヶ月間、遂にこれが爲に不治の病を得たりと稱せらる。されども當時之れを自覺せざりしかば、この暗獄を出でたる後二十六日を経て、千八百七十三年四月二十六日にエミリヤ、カステイヨ嬢と結婚し、グラサホに住し、政治上に奔走する所ありき。千八百八十七年即わが明治二十年八月二十五日午後八時、最愛の妻と幼き兒等に枕邊を取り圍まれて逝けり。時に年五十五。

キンテロは如何なる點より見るも大詩人にあらざるこさは世既に定評あり。されどもかれの作詩は概して温雅、純清恰、朝露の草の葉に宿りて太陽の光に輝くが如き趣あり。或る人はかれを評してエネスエラ國のベサ(墨國詩人)なりといへり。この評當らずと雖遠からず。

## エネスエラの詩人ホアキーン、キンテロ

薔薇の花は息きれぬ。

信心の香もあと絶わて  
心は死ねり、その如く。

忌むべき倦厭は身を消磨し

不幸、苦患の生涯は  
喪服の下につゝまれぬ。

光明や、鶯や、薔薇のごと

いたみ、傷もち、香もうせて  
心はもはや死にければ。

(をばり)



Á UNA FUENTE

JOAQUÍN QUINTERO (Venezolano)

泉流いづみに

エッセエラ國

ホアキーン、キンテロ

原詩は八言の「イタリヤナ」律格もて作れり

小石の中間なかをちよろ／＼と  
坂に止どまらず、しばらくも  
やすむひまなく心せき  
身を碎くだき行く小泉流いづみよ、  
何なににとて汝おれはわが歌に  
耳みみかさずして急いそぐにか？  
また汝おれを海うみにさそひ行く  
河がはに向むかひてかけるにか？

汝おれは知らざるか、大洋は  
『南の風』が暴亂ばうらんの

なかに鞭むちうつ苦水くすいを  
その冥胎めいばいに抱かかけるを？  
知らずや、汝おれが水途みづぢに  
海うみなる水みづに混まりあひ  
にがき苦痛くつうの、あゝ！浪なみに  
かはり果はつべきものなるを？

201  
小き泉流いづみよ、うす暗くらき  
森もりに迷まよへる銀ぎんの絲いと、  
汝おれが清水しみずを河水がはに  
ませむ爲ためにな行ゆきなせそ。  
よし河がははそが財産ざいさんを  
荒あれたる海うみに献けんぐとも  
清しみずき泉流いづみよ、かまはずに  
そがなすまゝに棄すておけよ。



されど、否とよいと高き  
 諸王の王が創造に  
 與へ給ひし法則を  
 易へむとするは狂ならむ。  
 心の境界超ねむとて  
 世の人ちからつくす時、  
 説き明さむと甲斐なくも  
 わせる永久の法則を。

青玉地としてその上に  
 赤玉の球ころぶと  
 天空にめぐれる億萬の  
 世界といへどいと速く  
 動きながらに易らざる  
 法則まもる定めにて

たゞ一瞬のあいだとて  
 軌道外るゝ能はずば、

人間、植物、動物も  
 水また土も火も風も  
 思想の抱くものすべて  
 死に限らるゝものとせば、  
 萬物創造のそのみぎり  
 均衡保ちあらはれて  
 ひとつ宇宙の法則に  
 盲従すべきものとせば、

汝れはかなはじ、小泉流よ、  
 汝が疾き流かへむこと、  
 また、河さして汝が進む



CANTARES

JOAQUIN QUINTERO (Venezolano)

(直譯)  
 (一)  
 汝れ笑ふとき、「モレナ」よ、  
 汝が頬の邊に形づくらる、  
 小き二つの笑くぼ、  
 その笑くぼ戀を公に示す。  
 かくてわれはいたく恐る、  
 汝れは汝が小き笑くぼの中に  
 心こころ靈を擒にせむことを。  
 (二)

(直譯)

(一)

ゴネスエラ國

ホアキーン、キンテロ

この原詩は七言と五言とを相混交へて作り一節七行より成る。即ち第一、第三及第六の三行は七言にして殘餘の四行は五言なり。原意と詩形とをあはせ示さむため、直譯、意譯の兩様に依れり。

雅誦歌

その坂に立つことすらも、  
 たゞ神のいと高き  
 力のみこそ無限なる  
 大もて自然の法則を  
 かへ得るに足るものなれば。

行けかし、されば、銀の絲  
 道眞直に河さして、  
 森をも棄てよ、うす暗き、  
 わが歌もまた聴くなかれ。  
 そはさやかなる回轉もて  
 汝が寢床の坂はしるみて  
 神の理法を嘆美せむ、  
 引力の理を嘆すれば。

神をいふ

(をほり)



「モレナ」は白人種の間にて稍々色の淺黒き女の稱にして、雪白の肌よりは却つて愛嬌ありませらるゝものなり。

(なほり)

(二二)

わがもてるもの  
 汝はもつな、  
 わが願望をば  
 知りたくば。  
 まことぞや、  
 わが悩むこと  
 悩むなよ。

もしや汝れわが好むところを  
 汝れに告げむことを欲りせば、  
 我れは望む少女よ、  
 わが持てるものを汝は持たざらむことを。  
 これより能く當れるはなし、  
 そはわれは我が悩むところを  
 汝が悩まむことを好まざれば。

(意譯)

「モレナ」笑まへば

汝が頬には

小わくぼ二つ

戀かたる。

恐ろしや、

心を捨るか

ろの笑くぼ。



LOS ÚLTIMOS INSTANTES

DE MI HIJO

LINO CLEMENTE

JOAQUIN QUINTERO (Venezolano)

208

わが子リノ、クレメンテの臨終

ゴネスエラ國

ホアキーン、キンテロ

千八百八十六年一月十日の作なり。詩形は前に掲げたる雅誦歌のと同じ

『いとしのわが子  
汝れはなにぞて  
天にいそぐか？  
無邪氣の羽に  
うち乗りて。  
地にのこさるゝ  
汝が兩親は  
かなしみなげき  
いためるを。』  
『いとしの父よ、  
われ天に行く、

209

天にはわが友  
いすゞ棲みつ、  
神様は  
天にてうたふ  
歌のなかまに  
とく歸れよと  
のたまへば。』  
『いとしのわが子、  
祝福うけよや、  
飛べ天國に、  
無邪氣の羽に  
うちのりて。  
よし地にのこる  
汝が兩親は



かなしみ、なげき  
いたむとも。』

『いとしの父よ、

時は来りぬ、

はや大天使は

天より来る、

わがためにも。

父よ、強かれ！

わが母うへに

つたへ給へや

おさらばと！』

(をばり)

### 秘露國の文士リカルド、ロッセール氏

リカルド、ロッセール氏 (Ricardo Rosel) は秘露國文壇の一老雄なり。今や齡六十を超え、筆を執るこそ稀なるにや、里馬市にて發行する新聞雜誌の紙上に、氏の詩文を見るとき稀なりと雖、詩人兼散文家としての氏の聲譽は、古本屋の主人をして氏の著書を掘出し物視せしむるの姿なり。

千八百二十六年を以つて秘露國に來住せし佛蘭西人、エウヘニヨ、ロッセールといへるは、即、氏の父なり。家系正しく、性質また質直勤勉なる商人にして、その里馬市に開きたる商店は佛蘭西人の輸入商店の嚆矢なりといふ。ある年の聖週に、氏の父なる人一寺院に於いて美聲の少女カールメン、シロー (Carmen Siro) を見初め、遂に六ヶ月の後に、これを娶れりといふが、即、氏の母にして、氏の出生はわが天保十二年、即、西曆千八百四十一年五月十二日なり。父は千八百五十九年氏が十九歳の時に世を去りき。

氏の親族はみな美術の心掛ある系統を引き、一人として誦歌若くは樂器の操縦に長ぜざるはなく、氏はこの羨むべき遺傳の天性を享受したるものと見ゆ、幼にして「セミナリヨ、デ、サン、トリビヨ」といへる學校に入りしが、試験のたび毎に優等賞を受け、夙に音樂上の嗜好と才能あることを示し、文學上に於ても亦衆童の企て及ばざる所あり、十三四才の頃には、未だ何等の文學的研究を爲せし、さなきに拘らず、早くも詩を作り初め、閑あれば古今の高尙なる文學書を無二の友とせりき。

世人いふ、米大陸に於ける西班牙語國の文學者は、多く富有なる良家の出にして且政治家及外交官などの間に發見せらる。これ大に其の故あることにして、高等なる教育が下等社會に普及せざることを



及、文學によりて衣食する能はざるの二大理由に原因するものなり。さればリカルド、ロッセール氏の如きも官界に入らず、政海に出づることなかりしとはいへ、如何なる點より見るも文學を専業としたる人にあらず。従つて氏に向つて長篇大作を出さざるを責むるは酷の酷なるものなり。

氏が當時政治熱の猖獗を顧みずして、全く獨立の地位を守りし一事は、氏をして秘露人民の渴仰する英雄たらしめざりし代りに、亦氏をして憎怨の府たらしめず、結局あらゆる社會を通じて敬慕せらるゝ温好の紳士たらしめたり。氏は或る時は父の從事せりし事業を執り、千八百七十四年までは間接に農場の指揮取締をなし、或はカヤカ港なるロツセル商會の長となり、或は鑛業會社の社員となり、支配人に擧げられ、秘露共和國の公民としてカヤカ市會の議員となり、また同港商業裁判所の長となり智利との交戦中も愛國的運動をなして拔群の効勞ありき。

氏の閱歴大要かくの如し。いかに氏の穎敏なる性質と、深厚なる勞力と、純粹なる詩才を以つてするも、氏の作物の量は微少なざるを得ざりき。然れども氏は眞に文學を愛するの士なれば、その睡眠時間を喩みて筆を執ること前後二十有五年、この間絶えず勉強して、或は詩に、或は文に、或は小説に或は文學的演説に、その清酒なる感情を寫して之れを公にし、殊に「文學俱樂部」後組織を改めて「里馬文學會」なるの創立に關しては氏の盡力最多きを占め、單に熱心なる一會友として會合の度毎に殆欠かさず出席して、その作を朗讀吟誦せりしのみならず、千八百七十五年より千八百八十一年まではその文學部長の任に當り、その後も多年里馬文學會 (Ateneo de Lima) の副會長たりき。又千八百八十六年には西班牙翰林院の通信員に擧げられ、現に秘露文學院の學士たり。

氏は西班牙の詩人プレトーン、デ、ロス、エルレロスの著作を最深く味ひその堂を究めたる人にして

詩文共に亞米利加の西班牙語國は更なり、西班牙國にも持て囃さる。氏の作詩中、傑作の稱あるは、秘露の傳説を基礎として作れる (Catalina Tupac Roa) を題する二千行以上に達する可なり長篇の物語詩にして、こは千八百七十七年、即、氏が三十七歳の時、南隣智利國にて催されたる萬國（但、西班牙語國のみ）文學懸賞競技會の募集に應じ出草して一等金賞牌を得、後、秘露政府及文學俱樂部よりも各々賞牌を贈られたる名作なり。

氏の詩文を一部に集録して出版せるものは單に一種あり。上卷は千八百九十年の出版にして紙數三百九十頁すべて散文の作物を収め、下卷は詩集にして紙數凡二百七十頁、その翌年の出版なり。いづれも里馬市にて印刷出版せられたるものなれども、今之れを得るは頗、困難なり。

尙、氏の詳傳を敬愛する讀者に紹介せむことは記者の最希望する所なれども、今はこれ以上を知ることは能はず、更に他日を約して茲に一まづ筆を擱く。



LA LECHERA.

RICARDO ROSSEL (Peruano)

糶乳女

秘露國

リカルド、ロッセール

この詩の傑作なるは巧に糶乳女の風俗を活寫して眼前之れを觀るが如き思あらしめ、且俗語を混用せる點にあり。前後二節よりなれど茲には前節のみを譯しつ。

里馬の都市の入口を  
冬とて夏とて變り無う  
野末の花を見た様に  
清らに嬌然うれしげに  
牛乳賣る女通るなり、  
年が年中かゝさずも。  
かざり氣のない身のまはり  
髪を叮嚀に梳きつけて  
絹の手拭おのが背に  
ひらりふらりと靡かせて  
廣い蘭編の帽子冠り

遠くの山のうしろから  
額つき出すお日様の  
光線をこれによけさせて  
荷鞍の上にゆうくと  
乗り行く様は女王なり。  
荷鞍の兩側よく見れば  
きら／＼光るは何じややら、  
あれは四個の鐵葉壺、  
ぶら／＼するのは何じややら、  
あれは十錢五錢とて  
小賣の樹の小柄杓。  
さてこの荷物の負ひ役は  
毛をば奇麗に刈り込むだ  
お馬よ、さても、その馬は  
いつもかはらず足早に



小股にかけるが習慣。  
 そはまた何故かと尋ねれば  
 古い由來の文句附  
 今までつひぞ糶乳女は  
 足搔ゆたかに里馬さして  
 はいつた先例見えずとは  
 著述家がたの説とやら。  
 それは兎もあれ角もあれ  
 夢にも牛乳を賣る様な  
 營業なさらぬ地主さへ  
 おなじ調子で乗り行くを  
 見かけ事もあるなれば  
 理屈はこゝらで捨て置いて  
 いざや。土堀の中道に  
 牛乳うる女追つかけむ。

牛乳賣る女は此所や其處  
 得意のお屋敷おとづれて  
 辻をぬけては街を過ぎ  
 御最負うくる門毎に  
 胸一ぱいにつん伸びて  
 かなまり聲のあり限り  
 屹度「牛乳屋——イ」と呼び立てる。  
 するとこの聲聞きつけて  
 年増の黒女銅色人奴  
 さては混血種の「サムボ」どの  
 鍋か湯沸器か汁碗か  
 茶碗か飯をおつ取つて  
 かけ出して来てさて問答——  
 『ごつさり牛乳をまけるんだよ、チー。』  
 『イエ〜どうして、飼料が高うて。』



『オヤマア、枳量の悪さといつたら。』

『よく／＼量つて大まけですよ。』

『御覧な、わたいの旦那様は』

性急者だのに、チー、△お竹どん。』

『古い馴染だ、早く頼むせ。』

『だつて。八様手が二本だもの。』

なごどこぼすやらせつくやら

苦情と小言と依頼のなかに

鐵葉壺に入れて持つて来た

牛乳をお錢に代へて行く。

つひには悉皆賣り切つて

大きな芭蕉の實を喰ひく

よろこび、笑ひ歌うたひ

急ぎ田舎に歸り去る。

\* Cántaro ちへる蓋つきの壺の形したる罐なり。これに牛乳を入れる。

◎ 道路の兩側にある耕作地はすべて土塀にて圍みたれば、往來の左右はひさしく土塀なり。

● 亞弗利加黑人種と亞米利加印度人との雜種をいふ。

△ 原文には Dona Brigida あり。

○ 原詩には Don Mariano あり。

(なほり)



LOS AMIGOS Y LAS AVES

RICARDO ROSSEL (Peruano)

220

友と鳥

秘露園

リカルド、ロッセール

春の日ひにわれは見き、  
花と葉を見せながら  
揚々と天空そらさして  
枝のばす太き樹を。  
また蔭と清涼しみやうを  
めぐむ其の繁り枝えだに  
嬉々しきと歌ひあふ  
うつくしき千羽の小鳥こどりを。

されど、あゝ！凍りたる  
冬の日ふゆにやがて見き、  
その樹枯れ口噤くちがへみ  
葉落ち北風きたかぜむちうつを。

また蔭と休息やすみ所  
與へねば裸なる  
枝にやせる鳥もなう  
つれなくも去りしあどを。

221

その如く人の世にも  
幸さいありて榮ゆるとき  
つごひ来るいつはりの  
友千人ちたうわれらにあり。  
されど、あゝ！不幸まがらみの  
風吹きて来るやいな  
冬の樹の鳥のごと  
みな我等捨てゝぞ行く。

(をばり)



## Ricardo Palma :

- Una entrevista con él.....175  
Ofrenda.....181  
¡ Todavía ! ..... 183

## Juan de Dios Peza :

- Notas biográficas. ....185  
Á mis hijas. ....188

## Antonio Plaza :

- Notas biográficas. ....194  
Asi.....197

## Joaquin Quintero :

- Notas biográficas. ....199  
Á una fuente. .... 200  
Cantares. .... 205  
Los últimos instantes de mi hijo  
Lino Clemente. .... 208

## Ricardo Rossel :

- Notas biográficas. ....211  
La lechera.....214  
Los amigos y las aves. .... 220

FIN.



Andrés Bello :	
Notas biográficas. ....	52
Diálogo. ....	56
Benjamin Blanco :	
Notas biográficas. ....	58
A un canario. ....	62
Manuel Nicolás Corpancho :	
Notas biográficas. ....	69
La estrella de la tarde. ....	73
La hamaca del jardín. ....	76
Claudio Mamerto Cuenca :	
Notas biográficas. ....	79
El africano. ....	81
Ignacio Rodríguez Galván :	
Notas biográficas. ....	88
¡ Adiós ! ....	92
Gregorio Gutiérrez González :	
Notas biográficas. ....	95
En el cementerio de Sonsón. ....	98
¿ Por qué no canto ? ....	100

Domingo Romón Hernández :	
Notas biográficas. ....	108
El sueño de Blanca. ....	111
José María Heredia :	
Notas biográficas. ....	112
El Niágara. ....	116
Vuelta al sur. ....	127
Numa Pompilio Llona :	
Notas biográficas. ....	133
A un poeta. ....	135
La dicha humana. ....	137
Mariano Melgar :	
Notas biográficas. ....	139
Elegía. ....	142
Yaravi. ....	152
José Milla :	
Notas biográficas. ....	156
A mi hijo. ....	159
José Joaquín de Olmedo :	
Notas biográficas. ....	169
En la muerte de mi hermana. ....	173



### INDICE.

Introducción : Lengua castellana — Literatura española — Literatura hispano-americana — Poesia hispano-americana.

Francisco Acuña de Figueroa :  
Notas biográficas.....1  
El ramito anónimo.....3

Manuel Acuña :  
Notas biográficas.....4  
Entonces y hoy. .... 9  
Ante un cadáver. .... 16  
Nocturno.....25

Clemente Althaus :  
Notas biográficas. .... 30  
Á un cóndor enjaulado.....34

Julio Arboleda :  
Notas biográficas. .... 36  
Á Beatriz. .... 40

Eduardo de la Barra :  
Notas biográficas. .... 45  
Such is life ! .....49  
Pasión.....50

明治卅六年三月廿一日印刷  
明治卅六年三月廿四日發行

不許  
複製

纂譯者 今村 良治  
發行者 赤木 久太郎  
印刷者 齋藤 豁

發行所 齋藤活版所  
東京赤坂區青山北町一丁目一番地  
(電話新橋二六七番)

(定價)  
五錢

發兌元

東京牛込區通寺八番地

美育社



特約大賣所

東京 神田區 表神保町	東京 神田區 裏神保町	東京 上田區 屋敷町	東京 警備區 尾張町	東京 橋區 桶町	東京 廣文區 堂書	大阪 吉備區 後町	大阪 東區 南本町	京都 金尾文淵 寺通	京都 佛光寺	京都 東枝律 書	名古屋 本町三丁目	名古屋 川瀬 書	横濱 尾上町三丁目
店	店	店	店	店	店	店	店	堂	房	房	店	店	店

美育社設立の主旨

帝國の文明は著しく發達せり。明治の文華は實に長足の進歩をなせり。而かも、其の文明はあまりに乾燥ならずや、其の文華はあまりに赤裸ならずや。見よ、我が江湖の趣味は低落し盡して、明治文華の子、其の心今や野生の蠻人に似たるものあらんとす。

文明は現利の權化にあらず。現利の外に、文明が保有せる地域は極めて濶大也。我が社會は、一意現利を追ふに急にして、茲に此の濶大なる地域あるを忘れてたり。濶大なる地域とは何をかいふ、不肖等をして言はしむれば、其は即ち趣味也。文明の現利の外に相對せる文明の趣味也。

趣味は、現利の外に超絶す。人は、利をはなれて、能く平凡に生き得き。趣味あれば也。人は利をはなれて、能く悲痛に堪へ得き。趣味あれば也。而かも、趣味をはなれんか、人は一日も世にある能はず。悲しむべきかな、明治の才傑、此の利を養ふに專にして、而して此の趣味の陶冶を忘れたり。

不肖等微力をはからず、茲に美育社なるものを創設し、聊か我が美育の爲め



に力を致さんとするもの、是れ一に社會が趣味の欠乏と低落を憂とせざるを憂ふる甚だ多きが爲め也。不肖等、能く自らを知る。何ぞ後進鈍才の不肖等に於て、世に多くを寄與するの能あるべき。されど、不肖等また能く誠意の天に通ずるを知る。不肖等、能ふ限り奮進して、趣味の陶冶と普及とを圖り、田圃に、道路に、家庭に、店頭に、工場に、より高くより清くより幸なる文明の影を宣傳せんと欲す。

是れを盡すの方法として、われらは先づ出版事業を取れり。此の出版に依つて、少しく所志を江湖につたへ、而して後、また、他の方法を取つて、飽くまでも趣味涵養の爲めに力を致さんとするもの、是れ我が美育社の創立主旨也。義人よ、仁者よ、唯物主義の弊に憤れる人よ、情の人よ、希くば不肖等の野勇を笑はず、不肖等の愚を笑はず、其の微衷を掬んで、幸に誘導贊助の聲を惠まれんことを。

美育社の事業は、前途尙ほ遠遠也。更に希くば、近き日の行動を目して、直ちに遠き將來を速断することなからむを。われらは、敢へて茲に、是れを記録するの用意を忽にするに能はず。

明治三十四年秋

赤木久太郎 謹白  
黒田直道

今村敬天君著 小島冲舟君密書 寫真版數葉入

●新體詩集 青春之詩

全一冊 頗美本 價五十錢 郵税四錢

文藝界評 (上畧)熱烈にして而も純潔なる萬腔の情緒は、よく修辭の粗奔を掩うて餘りあり。その言ふ所悲しむべき運命の辛き酒を嘗めたるものにあらずれば言ひ能はざる味ひありて、讀過いひしらぬ同情の念に撲たれ云々。

讀賣新聞評 (上略)怨恨の一篇最も長くしてまた最も誦すべきものなるべし。「花の木蔭に手をとりて、朝に戀をかたるとき、そら晴れ渡る春のごと、心は戀に匂ひしを。」あはれ浮世の嵐に破れて、七たびわが自殺すとも死なぬ怨恨の限りなき胸の傷手に遣るかたなき煩悶の思ひ髣髴として目に見るが如し。その詞調整はざるもの多しと雖も、その情熱はたしかに讀み畢はらしむるの力あり。(下略)

國民新聞評 (上略)心を破りたる苦悶は默するに堪わすして、聲の限り天に向つて號泣したるは、聽て此詩なりといふ。人の世の薄命を歌ひたるもの前後二十四章、其想や其辭や時に幼稚なりとの評は免がるべからざれ共、誠意の存するところは之れに外ならずして、寧ろ當今の朦朧たる詩に優るものなしとせず。(下略)

發行所 東京牛込通寺町 美育社



今村敬天君著 小島冲舟君密書數葉入

●新體詩集 **短笛長鞭** 全一冊頗美本 價五拾錢 郵稅四錢

太陽評 (上略)詞足らず、調整はざる所ありと雖も游子真情の流露亦捨てがたきものあり。夫の徒らに清新を衒ひて輕浮に陥るものに優る萬々なりと謂ふべし。

帝國文學評 (上略)近時早稻田出身にして、新詩をものする人極めて少なりしに、著者此好著を出されたるは、實に喜ぶべき事なり。「智恵と力」より「月」に至る二十六篇と附録として巴山人の「船唄」湖山人の「雲無心」の二篇よりなる、着想は随分面白けれど、措辭は未だしき處多し云々。

小天地評 (上略)兎も角もこれ丈の稿をものせられたるは、斯道に忠實なればなり。内容に於ては湖山氏の序あり、とりて代ふべし。曰く「其の懐く所純清にして高雅、自然にして熱烈の調、また以て聞くべきにあらずや。」

中央新聞評 (上略)長詩短詩廿有餘篇、智恵と力の如き、蝸牛の如き、お正月の如き、純正高雅、措辭の彫琢をもちゐずして思ひ少しも邪なきを見る。云々

發行所 東京牛込通寺町 美育社

美育社出版書籍目錄

- 永井荷風君作 小島冲舟君密書 小 新青年 心 價廿二錢 郵稅二錢
- 生田葵君作 (泰西名畫挿入) 小 自由結婚 價三十錢 郵稅四錢
- 黒田湖山君作 (泰西名畫挿入) 小 大學攻撃 價廿二錢 郵稅二錢
- 有本次郎君作 (泰西名畫挿入) 小 女の秘密 價廿二錢 郵稅二錢
- 知名大家序題跋 赤木巴山人著 漫筆 文筆 紅葉鳴雲先生題句 夢人大羽兩君編 大 春の巻 價五十錢 郵稅四錢
- 大 俳句の巻 價三十錢 郵稅二錢
- 虚子知十兩先生題句 夢人大羽兩君編 大 秋の巻 價三十錢 郵稅二錢
- 君著 小島冲舟君密書 女 人島漂流記 價三十錢 郵稅二錢
- 押川春浪君著 小島冲舟君密書 萬國幽霊怪話 價廿五錢 郵稅四錢
- 大放浪客君著 (寫眞版數葉入) 國會噴飯錄 價廿五錢 郵稅四錢
- 四村清山君作 冲舟君密書 空中旅行 無 人 嶋 價十五錢 郵稅二錢
- 黒田湖山君作 冲舟君密書 少年露西亞征伐 價十八錢 郵稅二錢
- 藤井紫明君作 (寫眞版數葉入) 夜行富士登山 價十八錢 郵稅二錢
- 千葉紫草君作 (寫眞版數葉入) 大 力 水 兵 價十八錢 郵稅二錢
- 押川春浪君作 (寫眞版數葉入) 世界陸大競走 價十五錢 郵稅二錢
- 鄭湖君著 (獨逸皇帝愛犬繪入) 新狩獵 手引百發百中 價五十錢 郵稅四錢







7

31

